

何故ヨ戯談ヤお道化よ離縁状が書けませるか眞實よ去て仕舞ふのですヨ婆兄イお止しヨ坊が泣くからヨ草泣ッて見も投り出して往くノヨ婆和郎夫の眞實よ云ふのかエ草なんで虚言が吐けるかエ

第十六回

婆アレマア呆れて仕舞た何うか爲たんだヨ、兄イ和郎斯な可愛い兒だの女房を棄て出て往くてエの何う云ふ了簡よ成たのだエ和郎が然んるとよ成ての妾も老る年だし和郎より他よ頼寄よ思ふ者ハ座いません、妾を何うするのだエ草何うするッたッて小哥と和女さんとの身寄でも親類でも無い赤の他人で初女さんの奥石重兵衛さんのお内儀さんてエ義理だから小哥の胤の重太を残して往くから重太よ跡目相續をおさせませへナ婆アラマア何うも……十五年此方と和郎さんの妾を親の様よヤレコレ云てお呉んあすッて和郎さんの眞實な事を思へばこり丹精した事も有り升るのよ今更妾を棄てし義理が立ちますかエ草義理たッて和郎さん所の重兵衛さんの父でも無へのよ葬禮まで出して遣たからモウ恩も義理も無へが據なく今まで居たんだ婆アラマア何うも呆れた、妾が出て往きませうヨ草何んだッて和女が出て往くのだ和郎の宅ガアあ……意氣地あしの婆アが居て面白く無へから女房子を置いて往うてエのだつねアラマア、妾が悪いから謝罪から堪忍して下さい、

と袖よ絶り付を草エー放せつね、お生だから兄さん、と既足で土間へ驅け下り袖へ細ッて止るも聞かず振り切て表へ出る、婆アの上り端まで這ひ出し婆草三さんつね兄さん重太阿父やア、と三人が表まで驅け出して呼びますのを構はずよ草三郎の流れ川を渡ッて自性寺の前から木島峠の方へ驅けて参りましたが後から三人よ呼び立てられる聲が耳よ残ッて後髪を洩れるやうよ思ひ升れど三人の者へ繩を掛けるが不憫と思ひ切て出い出たが婆アさんに何んだッて然んる事を爲て義理が濟むかと云へれた時よ堪り兼て實の斯だど云いふと思つたけれども義理堅へ婆さんだから一緒に繩よ掛らうと云ふかも知れぬへから黙ッて居たが跡で乃公が繩よ掛つたと聞いたら嘸ぞ驚くだらう、と氣丈の草三郎も氣が屈し道傍よ暫く立て泣いて居りましたが氣を取直し木島峠を越し其晩ハ神山の汚穢い宿屋へ泊ッて翌朝暗い内よ起きて中室田へ出て室田から上野原へ上ッて参ると夜が明けました左方の小松原右の方の大きな萱葺屋根の観音堂が御座いまして赤松が往來へ甍々出て居り升裏手の山續きに篋が有ッて往來へテヨロヨ水が流れて居り升ッノ路の悪い所へ踏み込んで崩雪上りよ上ッて彼是半町ばかり往たと思ふ頃ろ突然よ閃めく鐵刀、草三郎の驚ろいて跡の方へ歸ッて参ると観音堂の傍から手先御用、手先御用、と左右前後から出られ草三郎の驚きあがら一足退いて差して居た銅鐵を引き抜て身構へる、大沼金七郎と云ふ且

那が小長い鐵刀を振り上げて大沼「草三郎少し調へなければならぬ事があるから尋常は細
 よ掛れ草一旦那何で小哥を疑るんです小哥の繩は掛るなんて覺えの御座いません大沼
 然れじやア何故逃げた草伊香保の親分はチット用が有て大沼「エー縛れ、と云ふ下知よ
 左右から手先が組み附いて来る草三郎の寄らば斬るぞと身構へながら段々と跡の方へ退る
 と大沼が飛び込んで参りました腕前の宜い御仁だから草三郎早くも右の手の甲を打たれ
 ガラリと長刀を落す同時は左右から寄て来て組み附く草三郎の何うかして振り切て逃げや
 うと二人ばかり投げると大沼の踏込んで草三郎の手を逆取て捻伏せ大沼「手向ひを致す
 か、と云ひながら繩は掛けやうと左右から手先が寄て来る時よドンと一發雉子でも打た外
 れ彈丸が大沼金七郎の胸の邊へ中りましたから堪りませんウーンと鐵刀を持たり立ち上
 り身を震やし口から血を吐きドタアリと横に斃れるを見て捕方の驚きバラ／＼と崩雪
 下よ恣行やうよ逃げて仕舞ひました草三郎の肩から血を浴びたが思はず命が助り繩目を脱
 れるとい不思議な事だへテ何所から鐵砲彈丸が飛んで来たか是は伊香保の親分は逢れるや
 うよ日頃信心する神さまのお影で有るかと思はれて四邊を見たが夜が明け切たばかりゆ
 る何所から獵人が来る事かと四邊の山を見て居ると傍の觀音堂の扉を開けて出て来た旅
 僧の左の手は網代の深い三度笠を提げ麻の法衣は鼠の着物で端折を高く取て白の羽半甲掛

け草鞋腰よの鐵の女意を差し右の手は種ヶ島の短銃を持って火繩を吹ながら出て来た
 大戸の喜三郎吾妻の清次と云ふ上州で肩書の有る悪黨が取手屋で六百兩の金を盗んで逃げ
 ましてから世を忍ぶ爲め頭髪を剃り落して出家の姿もあり身匿しを爲て會津から上州東口
 へ逃げて再び房州路まで出て参りましたが充分足が附いて居る身の上で座の升から吉見
 村の大師堂は小匿れをして居ると其所へ恒川半三郎が三百兩の金を持って参りましたから
 之れを盗んで逃げ去りました丁度二十一日の夜で座の升夜通し掛って逃げ延び上野原
 の觀音堂の中へ身を潜めお里の容子を聞き度と存じて居ると觀音堂の前よ充分の捕
 方では座の升から脛は疵持つ譬へで自分へ捕方が係った事かと思ひ觀音堂の中で兩人とも
 よ覺悟を爲て居ると堂の前で草三郎尋常は繩は係れと云つて八州の捕方がトウ／＼草三郎
 を捻伏せて大沼金七郎さまが今草三郎は繩を掛けやうと致しましたから何うかして草三郎
 を助け度と思つて幸ひ彈丸込めを致して置きました種ヶ島の短銃を持って大沼金七郎を彈
 殺し、網氏の三度笠を冠り鼠の頭陀を首へ掛け白足袋草鞋甲掛で鐵砲を持って出た時よ
 草三郎の何故乃公を助けて呉れたかと驚愕して見て居ると旅僧の笠を脱つて僧「兄い誠よ
 久し振だナ何うも思ひ掛けねへ危険へ事だった乃公等が此所よ居たから宜かつたがマア何
 う爲たんでニ草三郎、と云はれて草三郎の驚き能く／＼顔を見ると喜三郎は清次で思ひ

掛けない事ゆゑ又た驚愕して「草」何うも「マア和郎等」此所で面會ふと思はなかつた何う
 爲たんだ出家姿よ成ッてスツカリ改心して悪事を廢め然んか姿よ成ッて托鉢でも爲て歩行
 のか喜「エーナニ大違エよ少し忙しい身体で始末が悪いから斯んか行装をして清次と二人
 で此觀音堂に匿れて居た所を和郎と知らねへが乃公が驚いたから何んでも譯の有る事だ
 と思ッて鐵砲で彈殺て仕舞ッたが、和郎「マア何うしたのだ、草」然うか……有難へ……素
 より命の惜い譯のねへが少し仔細が有て和郎等の仲間入を爲て三百兩でエ金を竊取て大沼
 さまの繩よ掛る所だッたけれど只「マア一言」福田屋の龍藏親分へ頼み度事有て此所まで切抜
 けて來ると充分の張込で既よ繩目よ掛る所を和郎等のお蔭で助かつた……何うか是から乃
 公を伊香保の福田屋の親分の所まで送ッて呉れぬへか喜「乃公も久しい事面會ねへが恩人
 の親分だし丁度那所へ身匿しを爲やうと思ッてる所だから一緒よ送ッて往かう、と是から
 三人伴れで福田屋龍藏親分の所へ逃げ込みました草三郎の親分に面ッて「草」親分實ハ小哥
 の盜賊を爲やしたと云ふの大恩の有る仁へ恩返しを爲やうと思ッた事が早くも發覺て斯う
 云ふ譯にありましたが實ハ和郎さんも此存じの通り女房お常よ義理有る父の仇敵を討せて
 遣らさけりやアあらねへので溝呂木の幸吉から還言も有り升から何うか八呎鳥の九平と鬘
 櫛の坂の二人の行衛が知れたらば和郎さん子分衆よ吩咐けて助太刀を爲て仇敵を討して

下さるやうに軟弱い婦女の事だから宜敷願へます小哥の直よ名乗て出ますからと云ふを
 「龍藏」マア待て汝が名乗て出るのハ少し早い何うか工夫を爲て遣る汝ハ素より盜賊をする
 野郎で無からマア待て少しの間乃公が汝の身を匿して置く内よ夫程心配するのだから九平
 お坂の二人が廻り廻ッて此家へ來ぬへ者でもねへから其時女房へ「助太刀を爲て幸吉の遺言
 通り仇敵を討して遣るが宜い夫までハ乃公が汝の命を預る、と云ふので是から草三郎ハ榛
 名の坊の飯炊よあり名を梅吉と改めました、喜三郎清次の大戸へ身匿しを爲て仕舞ひまし
 たお話し分れましたして彼の簾形岩次郎の始めて吉原へ遊びに参り角海老の相馴を買ッて初會
 の味「ア、え、が若いから有頂天に成ッて頻りと通ひます相馴も標致の美し温和いから岩さ
 んハ宜い仁だと思ひ素より親孝行で身を賣りました娘で座の座い升から浮氣を心の有りませ
 ん只眞實な仁だと思ッて能く取りました此方ハ只逆上ッて通ひますが酷く八釜敷い時分ゆ
 ゑ何うかすると石垣の間から出たり柵矢來の間から出まして大鳥さまの前へ出て三浦さま
 の裏へ掛るのが道が近ふ座い升ドットと降る雪の中をサク／＼踏んで澁蛇の目の傘を差
 して岩次郎が頭巾眞深よ冠ッて出掛けましたハ十二月二十二日で雪の爲か素見も通りませ
 ん今大鳥さまの手前へ掛ると雪の中でウーンウーンと呻吟る聲が聞えましたから驚いて後
 へ退ッて容子を見ると心子羽織を着て細の古い頭巾を冠り前へ俯倒て居るハ鹽梅でも悪い

かして頻りと自分で胸を押へて呻吟て居り前の方へ傘が投げ出して有り升からドットと頭から雪が掛ります岩次郎の傍へ立寄り岩何うしたか加減でも悪ひのか、往來の仁何うかおしかな男「ハイ」有難う存じます……イニ尊公急差込んで参りましてナ……斯か日は出ての悪いとやましたのを出ましたから……ウーン、お願ひで傍座い升がド何うか往來の仁少し腰の處を押して下さいませんか岩夫の困ったものが拙者の少し急ぐんだが……此儘見捨られもせんからナト押して進ませうが兩手で何んすると傘が持てんから片手で押すから利んかも知れんヨ男「イエ片手でも足でも何んでも宜しう傍座い升岩是で押す譯より往かさいが何にしろ待たさい善い藥がある、と懐から取出し岩是をば飲んで見あさい、と飲したが水が有りませんから積って居る雪を搦て差出し岩是で飲み込むが宜い、と餘程の塊を飲して押して遣りましたが片手でも男の力だから利き升男有難う存じます、ム……尊公然う遣て傘を差して居て下さいますので願へ雪も掛りませんで誠有難う存じます……是の結構お薬と見えて忽ち又利きましてグーと下りました、是まで何んを薬を飲んで利きませんでしたは是の良いお薬で岩是の賣薬にのきい宮様から出る妙薬で容易に飲けんが幸ひ予の持合して居るから男へ、勿体至極も傍座いません有難う存じますお影さまで少し下りました様で岩斯う遣て雪の降る往來中も居ても困らうか

ら向ふの寺院の大門の屋根の下へでも這入て凍いたら宜らう男門の屋根の下までい思か些とも往れません何うかモウ少し押して下下さいませんか男困りました子……些と我慢して立て見る氣の有りませんか男へ何うも立てませんが岩困りましたナ此先へ往くと駕籠が有るから其駕籠屋まで伴れてッて進ませうか男恐れ入ります岩「サア肩へお捕まり……モット腰を引ッ立て下さい……大變お所へ通り掛りましたナ駕籠屋の所まで参りませうジツと肩へ捕まッて下さい、其所に杖が有り升ヨ男有難う存じますハッハッ岩「シツカリ肩へ捕まッて、と親切にして呉れますので男も力を得て漸く立ち上り男何うか下駄を穿せて傘を拾ッて下さい、と云ふから其通り介抱致し片手で抱ひ込んで是从から老爺を擔ぐやうにして伴れて参りましたが娼妓買ひに往うとして老爺さんの介抱だから岩次郎も感心致しませんけれども根が眞實な仁だから他人の難儀を見捨てる譯も参りません駕籠屋へ伴れて來まして駕籠へ乗せ土手まで來て岩和郎何所へ往のだエ男「私ハ吉原へ参ります岩拙者も吉原へ参るのだ男「左様なら誠と恐れ入りますが御親切次手は私を吉原までお伴れ下さいませんか岩「吉原まで行くの誠と御儀致すから大門切りまして五十軒の所で別れる事致さう、廊へ這入るの御免を蒙り度い兩側茶屋が有るから茶屋でキョトク見られるのが思だから男「ハイ有難う存じ升岩加減の悪いのよ老体で餘り外

三百 へ出ない方が宜しい。男「へい誠有難う御座い升と衣紋坂を下りると駕籠が這入りドロ
く人が這入りますから 岩然んら此所で別れませうと岩次郎の老爺も別れ急いで茶
屋へ参りました

第十七回

岩次郎の老爺も別れて茶屋へ参り茶屋から送られて角老海へ参りました所が相馴の名代座敷で宵更チャリと見たばかり所でなく宵更も参りませんで番頭新造の花の香が何か甘味を持って来て 花「岩はん之を喫て見まし花魁の今も腹が空いたから御飯を喫べて直來るてエ事さいますと云ひ捨て往て仕舞ふ岩次郎の名代座敷も何時まで待ても相馴が出て来ませんので若いから少し嫉妬が起りましたから廊下へ出て来て突當りの便所で小便をして歸つて来たが床も寐て居られませんか又た起上つて帯を締め直し羽織を引掛けて又た疊んでスーツと立てパタパタ廊下へ出た時分のモウ丑刻近くありました。岩斯も來い事無いが是の何んでも馴染のお客も違ひない何うも相馴の容子が訝しい何んでも宜いお客が出来たよ違ひない何所も居るかど本間の方へ出て容子を見やうと相馴の座敷の前を往たり來たり爲て次の間の障子を開けて覗いて見ると禿が居眠りを爲て居り升からソツと障子を開けて中へ這入ると本間も屏風が立廻した中は居るの相馴のお客と見えて番頭新

造の花の香がヒソヒソ小聲で咄しを爲て居升が何うも能く取るお客のやうですから何よを云ふかと耳を欬て聞くとシンと爲て居升から能く聞えず花「チヨイト和郎はん眞實も見あましヨ花魁の此頃の心配てエもの一通りぢやア有りまへんヨ何うかして月々一度づゝ和郎はんは逢ひ度が儘よからあへ浮世だつて和郎はんの事ばかり云つてるノ何うかして和郎はんの塩梅の悪いのを恢復したへつて朝丈け火の物斷をするんだヨだから子妾が花魁も然う云ふノ身体も障るといけあへから火の物斷の廢してお呉んあまし其代り妾が二十八日よの不動様へ精進をするから火の物斷の廢して鹽物斷だけよしてお呉んははい妾も二十八日よの精進して何うか和郎はんの加減が恢復り元々通りチャンとまアねへ一緒交情宜く朝夕顔を見合せて和郎はんの笑ひ顔を見て樂しみ度いバツかりで花魁も神信心を爲て辛苦い中で氣を揉んで居るんぞますから和郎はんも些と察してやんなましヨ……岩ア、彼れだもの……賣女に戀なし寶を以て戀とするも譬への通りでア、云ふ宜い情夫が有るから來ねへのだ……末頼母しいの和郎はんばかりだ妾の親戚知己もない身の上だから目を掛けてお呉んあまななて乃公を騙欺して影も彼様を情夫が有るんだ何を云やアがるか、と尙も耳を欬つて聞くと花「花魁が幾許氣を揉んだつて年の若し馴染の客衆も少いから何うか和郎はんは度々小遣を送る事も出來あへんだヨ早晚よ良いお客でも出來たら和

二百二十三

郎はんを揚屋町邊へ世帯を持たして置きたいと花魁が云ッてるんだヨ然うして花魁が日よ
 三度も和郎はんの處へいかれるやうに爲て旨い物でも有ッたら和郎はんの宅へ送ッて喰さ
 せ度い小遣ひを送るのよも離れておると違ッて廊下居れば何うでも自由なるから梅の
 悪い時の往ッて看病を爲たいッて眞實よ花魁の心配しておるけれども出来あへんだから幾
 許氣を揉んでも今の處での仕方が無いノ 相馴「妾もねへ朝夕共に和郎はんを忘れた事の有
 りまへんけれども氣儘にお目よ掛ることも出来ないから心配爲ておると花の香はんが種々
 心配して呉れるから何も角も花の香はんよ頼んで斯う遣て和郎はんを忍ばせお客の積りで
 呼んで逢ひ引するのよ皆お花の香はんのお影さますヨ………出岩アレ………番頭新造と馴
 合ッて居やアがる彼奴がまた旨い事を眞實らしく云やアがるけれども他も情夫が有るのだ
 併しこれも是非ない譯だが娼妓なんてエもの却ッて金の無い奴よ惚るものだ、色男金と
 力の無かりけりでお客の積りで身揚りをして揚るとい不埒至極の奴だ二度と再びモウ吉原
 へい來られねへアの容子でい小遣まで送るだんナ………相馴「此間届けた丈けでも一月ぐ
 らお樂よ和郎はんの嗜む物を喰て暮せるやうよ心配して置たんさますヨ………出岩ア、アレ
 だもの………若「花魁の別よ馴染のお客もあいが只た一人上野のお寺院の住持部屋とか云ふ
 若い仁が來るんさますが極良い仁で其仁のナトお金があるのサだから其人よ無心を云ふと

三百三十三

ア、ノと云つて幾許でも出すから其仁を騙欺して和郎はんへ小遣ひを送るんだヨ具岩さ
 んてエ仁を騙欺して二十でも三十でも取ッちやア和郎よ送るんさますヨ、といふのを岩次
 郎が聞いて堪へ兼ねグツと込揚げましたから荒々しく障子を開けました 出岩花の香、花の
 香、チヨイト顔を貸して呉んナ、と云はれて花の香の驚いて出て來り花「アラマア岩はん
 が來んだヨ、廊下蔭を爲ちやアいけねへッてアノ位云て置いたにサア岩はん 出岩「イエー…
 …乃公の歸るから羽織を持って來てお呉れ歸るから花「アラマア腹を立てサ、此處へ來ちや
 ア往けまへんヨ少し末が悪いから 出岩「末が悪いから手歸りますヨ 花「歸るッて何んだね
 へ……何んだ子此娘の今つから居眠りをする奴が有るものか 出岩「何も然んあま手馬鹿よ
 爲あくッても宜い何うせ予の茫然してゐる人間だから欺し宜いからアアノと云て云ふ丈
 けお金を出すから手から取て置いて情夫へ送るんだ誠よ頼だお奉公を致しました花「何う
 爲たんだねへ往けまへんヨ 出岩「予のソノ花魁の情夫よお目よ掛せう、花魁チヨイト花「
 大きな聲を爲なますナ静よ爲なましヨチヨイト坐ッて呉んなまし 出岩「坐りませんヨ花「ア
 レマア立た切りだヨ坐ッてお呉んなばらさいと困るんさますヨ 出岩「何時までも斯く處よ居
 ると何んか難よ逢ふか知れないから羽織を出してお呉れヨ花「羽織を出セッて仕様が無い
 ねへ、花魁困るヨ岩はんが歸るッて 相馴「岩はん少し末が悪いから跡で咄い解るんさます

四十三百

がお願ひごますから少し彼處へ往て呉んおまし岩「予のッノ和郎のお容よお目よ掛りませ
 うヨ相馴「マア待て、と取縫るのを突き退けバラ／＼と屏風を開けて中へ飛び込ましたか
 ら花の香も驚いて俯伏で仕舞ましたスルト中へ居た客も休裁悪氣を顔を押へて布團の中へ
 潜り込みました相馴も涙含んで相馴「和郎はん此處へ這入りやア面目あうごます岩「予も
 面目あくつて朋輩にも顔向が出来ませんからモウ二度と再び来ませんよへエ二度と再び参
 ません……其處は居の情夫だか此だか知ないがお容さまお入来ささいまし……何せ予の
 馬鹿にされてるんだからハイ／＼と云てお金を出ますは緩りお、お遊ぶすつて下さい花
 何も仕様が無ねへ花魁が心配してゐるから彼處へ往て、呉なましヨ此事がパツとする内
 所の手前が悪うごますから岩「内所も何も皆な花魁と同腹よ成てるのだ精進までしてゐる
 程の者が有のよ予を欺かして……へエ娼妓の虚言を云事知てるけれども餘りだ……お容
 さまお案じささいますナ男「誠は何も何ともハヤ頼だお邪魔を致しまして……却てお匿し
 ずささい方が宜ぢやアおいか……は免下さいと、顔を上げて頭巾を脱と年の頃五十二三よな
 る胡摩鹽交りのチヨン髻の禿頭の老爺さんで座い升から岩次郎も驚き岩「尊公さままでへ
 、一是の何も誠は何うモ花「岩はん和郎はんの眞實又頼神漢だよ何んを間違へたんだねへ
 ……お愚弄なはんナ花魁の阿父さんごますよ今ハ千徳祿爲てゐるから和郎はんよ面會あひ

五十三百

ツてると花魁も斯う云ふ氣象だから阿父さんが零落れて汚い行装で斯な處で逢たら和郎は
 んが愛想を盡して來さくありやア爲さいかと心配して阿父さんを岩さんよ面會せねへやう
 よ都合して偶々逢ひ度と云てる處へ雪の降る中を來たもんで鹽梅が悪いてへから暖かい物
 を喫べさせて機嫌が治つたから緩くり暖めて寐して置いたんごますがお容の積りで氣を揉
 んでるんごますのよ中へ飛び込んで邪魔を爲ちやア困るぢやア有りまへんか、何んを間違
 へたんだヨと云ひ詰められて岩次郎ハモテ／＼爲さがら岩「然うなら然うと早く云へば
 宜いのよ乃公の情夫が來て居るんだらうと思つた、和郎はんの病氣を恢復さうと思つて朝
 晩火の物齋をするノ夫れぢやア身体は降るから不いさまへ精進をするノ花魁が旨いものを
 喰べさせ度ノお百度を踏ノと云ふからヨ花「當然ぢやア有りまへんか阿父さんの病氣を
 恢復す爲よのお百度踏だつて何も珍しい事ぢやア有りまへんや夫が何う爲たノ岩「揚
 屋町へ川帯を持って毎日仕送るつてへから訝しいぢやアないか相馴「訝しいつたつて妻
 の阿父だもの遠隔い處よ置いての弁分看病も出來まへんから廊の内へ世帯を持たして日よ
 一度でも二度でも見舞ひ引取つて小遣ひを送り度と云ふ話ぢやア有りまへんか岩「ウン……
 ……お容誠よお尤もで……併し他ハ金を持つてお容の無いが岩はんと云ふ仁のへエ／＼云
 ツて金を出すから欺かして取つて送るてへの酷いぢやアおいか花「酷いたつて夫の濟

ねへけれど和郎より他は無心を云ふ仁もあし阿父さんが鹽梅が悪いンでお金があるって無心でも云はふと云ふ仁の和郎はんより他は無心のだが斯う云ふ阿父さんの有る事を知らせたら和郎が来なくなる往かあいつて花魁も心配してゐるんだヨだから云はすはお金を借りたんだアね 岩然うあら然うと早く云つて呉れ、ば宜いノよ 老翁誠ニ毎度娘から取たまはつて居りますすが御借負もあすつて度にお光来下さるつて有り難う存じます私くしもお光来下さるつて夫も永い間の病氣で居坐いましたのが漸く杖を突いて歩行かれるやうもありましたから月一度でも娘の顔を見るのが樂みに参りました處ろ牛憎雪が降つて来ましたから少し暖まつて往つて留められましたので折角尊公が御光来つてお目も掛れば私しの何處へ来ましても次の間も居ても宜しう居坐い升から尊公何うか此有難の上にお乗り遊ばして下さいますし 岩是にお初にお目も掛りました私ハ岩次郎とす不問法もの伊後ども御久しく御別戀願ひます 花阿父さんの心持ちも成つて見なましヨ 岩成つてるからお辭義を爲てゐるぢやアあいか 相馴「斯うな年を老て間が悪いねへ其上親戚知人も無身の上だから岩はん大事よして呉んなましヨ 岩「エー一生懸命は大事致すといはれて彼の老翁ハ首を掻げ暫く岩次郎の顔を凝視して居したが 老翁「オ、公さまだ、オ、尊公さまだ 岩「エー、ナ何んでず何事が始まりました 老翁「尊公ハ先

刻大鳥さまの傍で私しが倒れて居升ると結構にお薬をいすつたばかりでなく私を肩へ掛けて五十軒まで送つて下さいました御仁さまで御座いませう 岩「誠ニ何うも是れ何うも甚だ失禮 老翁「イニ何う致しまして 私の方でこそ失禮を致しました只今も咄しを爲て居りまする處で三十軒まで若い御仁が送つて下さつたが何んたる御親切な御仁かと申てへエ花「アレマア不思議ぢやアあいか岩さんが花魁の阿父さんの看病爲たてへの、有郎ハんの親切だヨ眞實ニ感心だヨ惚れるヨ、眞實ニ身も染みて眞實を感しなましヨ 岩「予も思ひ掛けるい花魁の阿父さんと知らず介抱すとい何んたる深い縁で御座いませう 老翁「實に尊公のやうな仁あれば娘の行末を願ひましても私しの安心で御座い升……ナニきよや此御仁のやうなまだお若い廿歳の一歳か二歳出た位は見受けやすが實ニ若い御仁よ似合あいな眞實、私しのやうな老翁を背負て下さり誠ニ白難う存じます娘の母の何分宜しく尊公に願ひます 私ハ只今躰足致し燈明店は居ましく裏屋に居て實に見る御座いませんけれども何うか又た御通りがかりも御座いませんたらばお立寄り下さいまして雨でも降りましたら番傘の古いのぐらぬ御座い升から……何うかおきよの身の上の宜しく尊公は願ひ度う御座い升、といひれて岩次郎も機嫌が直り 岩「阿父さん此處へ御入來か甘味しいものでも御馳走致しませう、と云ふので老翁も喜び頻りと娘の事を頼みます相馴も



百八十三 阿父から世仁を力ゝ爲ると云のれてグツと又た岩次郎は惚れやうが増しました妙おもので能く有る事ですが父母が此仁の親想だと先へ惚れてかゝると其娘の猶ほ一層惚れやうが増すもので是れから猶ほ岩次郎の足が近く成て来ました

第十八回

取手屋久兵衛の岩次郎の眞實は惚れ込みまして、何うか只一人の娘ですが尊公行ハハ此娘を女房に持て遣て下さいまし私ハモウ何うせしへ死ぬ身体で御座い升が兄弟も何よも無い身の上ゆゑ何うか力ゝ成て遣て下さい、と頼んだので相馴も岩のんの眞實を仁だぞ猶惚れ込み殊ゝ養父が許して末の夫婦と云た言葉も有るので夫からの猶能く取り戻す主振のよ致し升から岩次郎の片時も大慈院の尻が落着きません少しの間でも角海老へ来て相馴の面會なけれ何うも心が濟みませんやうな譯で斯ういふ事の若い中に有り打ちの申で一傾城は可愛がられて運の盡き、傾城の涙で庫の屋根が漏り、吉原の町をくまれば内は闇、無分別吉原も闇内も闇、斯ういふのハナト甚しいので、スルト取手屋久兵衛の十一月中旬から次第く衰へまして十二月に這入るとドツト危篤になりましたゆへ孝心の相馴の本曾の御嶽山と淺草の觀音さまへ一心不亂の心願を込め何うか阿父さんの病氣全快致すやうよと火の物断を致しまして無理を願掛を致しましたが其甲斐なく段々重りまして十二月二

十二日よの絶えと云ふ事にありましたゆゑ相馴の心配して相馴「花の香はん妾ア何うか阿父さんの死水が取り度から旦那はん頼んで呉んやましモウ永い事も有り升まへから花宜うさます聞いて見て進ませう、と是から内所へ参り花魁の阿父さんの今日か明日かど云ふ程で花魁が夫れを聞いて勤めの中でも死水丈けを取り度いし又いひ遣す事も有らうから是非お暇を頂いて往き度と、花の香から頼むと角海老の主人の解つて居り升から去然んから素人行装として花の香も一緒は随いて往くが宜い、と主人も少し他の娼妓衆への体裁の悪い思ひを爲て暇を遣りましたので相馴が燈明寺店へ來ると間もかく久兵衛の死しました、岩次郎も度々來ての小道を呉れたり一晚泊つて看病を爲たりするのハ久兵衛より相馴が可愛いからでトウ、相馴と岩次郎と二人で久兵衛の死水を取つて漸やく深川の願寺へ葬りましたが葬式料のすすまはず是で病中も度々來て小道を遣たり又た世間の吉原へ往つたりしたので岩次郎も多分金子が要りましたから勝手金遣ひ込みましたが大慈院の主人の岩次郎を可愛がって居から知ても大目に見て見詫だけで濟ましたが其後大慈院の主人が交代して榛名の本坊へ参り本坊の主人がト野袋谷の大慈院へ來ることあり主人が違つて來まして段々取り調べよあると岩次郎の使用たことが露見致したから奉公して居られませぬ岩次郎の殿しいお咎めで秋田へ退去れると秋田でも義理

が有るから宅へ置くことが出来ませんので勘當よりました岩次郎の勘當金を只々十五兩
 貰ってアツリと出たが他は往く處も有りませんから吉原へ這入て水道尻の升見屋へ行き
 番煎の花の香を呼びよやり升と早速よ来て 花「岩はん能く來あました子 岩「エー能く
 も來せんが何かチヨット花魁よ逢て相談仕度と思つて先刻手紙を贈たのサ 花「先刻和郎
 はんが贈した齊簡と花魁が見て大變心配してゐるんさますヨ能々だから一目逢て遠い所へ
 行き度てエ事が手紙の文言よ有るから何か心配が出来たんだらうつて花魁の氣を揉み方の
 實よ一通りぢやア有りまへんヨ直よ來るンですが首尾が悪くつて出られせんノ……ナニ
 宜いお客でい無いんだが新川の一組が來てゐるから其方を切抜て忍んで來る積りだが花の
 香はん先へ召て岩はんよ何か旨い物でも喫させてお呉んあはいと頼まれたから妾だけ抜け
 てチヨイト來たんださますがマア何う云ふ心配だか妾よ大略を聞してお呉んあはいナ 岩
 夫れか子實の予の世當されたよ 花「オヤアノ和郎はんが阿父さん阿母さんよかエ 岩
 予の幼稚い時に貰はれて行たんですから何うもソノ可愛い情も眞實の父母とい違つて少し
 の麻が有るが勘當するてへ心よもあるんだけれど父母を恨む情もない皆予が悪いんだけれ
 ども實のソノ大熱院の手文庫に在るは手許命を使ひ込んだのです 花「オヤマア和郎はんが
 ……大熱ぢやア有りまへんか何のくらゐ使ひ込んだノ 岩「三百兩ばかり使ひ込んだので花

アラマア何うも和郎はん大層使つた子エ 岩「使つたつて夫が何うも一時よ使つたんぢやア
 ない當地へ來ても華美よ使た事も有りませんが微塵積つて山の譬の通りチビく使つたの
 が巨額くちつたのだから是までの種々細工を爲て置いたから知れなかつたけれど主人が交替
 たから何うしても仕方がない途よ露見したので親よ勘當され主人方の放逐つてしまひ予
 の何うする事も出来なから遠い處へ身を匿さうか一層の事一思ひも腹でも切て死さうか
 と思ひ詰めて花の香さん未練のやうだが花魁に一目逢て死度と思つて忍んで來たが花魁よ
 然ん事事を云て心配を掛けるやうなものだが何うも是切り大門を跨いで這入る事出来
 い是れがモウ吉原の見納めだから一目花魁よ逢て然りして予の直よ今夜歸る積りです 花
 待ちなましヨ和郎はん輕躁な事を爲て往けさいヨ岩はん氣を附けて能く考へて見なまし
 だが大變ぢやア有りまへんか、チツとヤソツとのお金から何うか工夫も附うが花魁の養父
 さんが死んだよ就ても散財してゐるし病氣中も雇婆まで置いたんだから花魁も大變借金か
 出來てる處だから此處で三百兩てエのの大變な借金だネエ……何うも金を使つて和郎は
 んの宮さま衆の若旦那ぢやア有りまへんか少しぐらゐの事で勘當するなんてエ眞實よ往け
 ねへヨ道樂を爲ねへ阿父さんや阿母さんハ然う云ふもので……眞實よふざけてるヨ 岩「何
 もふざけてゐる事はない親の勘當するのの至當だアね 花「待ちなましヨ妾の花魁と相談し

て見ますから……早く来ると自立つから丑刻になると妾の花魁をお伴れ申すから夫まで緩くりと氣を落着て居ますし花魁は逢はずもツと往つちまふと大變だヨ花魁が跡で何んかよあるか知れまへんから岩向うしてお恥しいが一目花魁に面會あけりやア迎も予の死ねません花死ね杯と云ひなますあヨ和郎はんも坊ちやんだし花魁も未だ年が往か歩お嬢さん見たやうだから眞實よ心配あんさますヨ妾は斯な苦勞してゐるのよ花の香はんは段々肥滿つて他人よ云はれるノ眞實よ苦勞がなかつたら何のくらゐ肥滿かつて云はれてる位なんですが金づくで濟心事あら工夫して何うでも爲やうから待あましヨ、と是から花の香が抜け出して参り相馴れ耳打を致すと飛び立つ程の逢ひたさよ丑刻を打つのを待て升見屋へ参り岩次郎も逢て右の始末を聞き相馴れ實の岩はん妾も廊の容子の未だ眞實よ知てる身の上ぢやア有りまへんから萬事花の香はん頼んで居るんさますが阿父さんの事で年季も増え借金も大層出来た容子さますから妾も此地の居られまへんが和郎はんが輕躁も死ぬやうな心よあつたら妾だつても夫りやア生て居られる身の上でないから一緒に死度ぐらゐですが死あずよ何うかして何んあ山の中へ匿れても和郎はんも三日でも妾の夫婦も成て阿父さんの位牌丈けを立たいと思ふんさます和郎はんの親戚兄弟も無い事知てるから何うか妾の身体を伴れて逃げて呉んあましナ 岩さうかりれの嬉しい然んなら何う云ふ手筈

よ爲やうと屏風を立て廻した中でコソコソ相談をして居ると屏風の外でスーツと音がいたしましたから相馴れ何かズリ出すやうですと見ると包みが其處よ有てバタ／＼と二階を下る音がいたしました相馴れハテ何しよ此處へ包みを持って来たかど其風呂敷包みを開いて見ると升見屋の女房が相馴れ拵へて呉れた藍の万筋の小袖を花色裏小鳥たのど黒縞子の帯が有り襦袢から白縮緬の下締めまで萬事取揃へ届いた事よ御高祖頭巾から着替へまでもチャンと這入て居り書附けが有りましたから開いて見ると此裏の跳橋も成て居るから繩を卸すとコレ／＼橋が下りるから裏手から三浦裏へ逃げなましと云ふ眞實を手紙の升見屋の女房か夫れども花の香はんか何ちよしても嬉しいぢやア有りませんかサア伴れて逃げてお呉ないとは是から支度を爲て頭巾を冠たから老相んだ年増拵らへもありました相馴れ是から何處か知れぬ田舎へでも往て丸鬘も成つたら知れぬいと云ふんですが然うの参りません媚妓衆の何う拵らへても知れませぬ殊も十七廿一と云ふ坊ちやんだから婀娜氣ない行装です是から跳橋を下して抜け出し三浦裏へ掛り大鳥さまの手前へ來ると向ふへ昇夫が提灯を提げて往き升岩昇夫／＼昇夫／＼昇夫／＼誠よ夜更けて毒の氣だが酒代の多分よ遣かぬすから板橋まで遣つて呉れんか昇夫／＼昇夫／＼昇夫／＼板橋まで宜しう御座い升が此二人の御容子ですナ岩ナニ予の歩行から此婦丈け乗せれば宜い予の駕も附いて一緒に歸ける積りだが澤

山の驅けられんから歩ける丈け驅けて予が休む時に其方等も共々休んで呉れ昇夫「へ
 エ畏まりました岩」ムー板橋まで幾許で行るナ昇夫「左様で御座へやす何うも餘り夜が更
 けてますから如才も御座へやすめへが板橋まで近道を通りましてナト道が悪う御座へ
 やすから何うか……エー……然うヨ三分ばかり戴き度もので岩」三分とりの餘り高價いやう
 だノ昇夫「高價かア御座へやせん道が悪いわつかりでなく思な處を通りやすので滑ッ氣味
 が悪う御座へやすからナ岩」宜しいから急いで遣て呉れ昇夫「へエ急ぎやす……御公の一
 緒にお驅けあせへやすか岩」予が休む内待て呉れ昇夫「へエ宜しう御座へやすと扇りを
 揚げ駕籠へ乗せ是れからスタく参りましたが岩次郎よ一緒に驅けられませんか
 岩」暫く待て〜と止め置きまして自分もセエ〜氣息を切て板橋まで來ると丁度夜が明
 けたばかりの處へ這入りました其時分の旅人の往來が絡繰く有りましたゆゑ宿屋から料
 理屋一体は早起で御座い升其の内ムチラ〜早立が見え升此處で駕籠を換へて取急き其日
 の十六里アツ通し熊ヶ谷宿へ來て翌日翌々日と多分の祝儀を遣て駕籠を急がせ是から高崎
 へ出まして高崎から榛名の表て山へ出るよハ安中へ出て道が悪いから伊香保へ這入る道
 小鳥村と云ふが有りまして小鳥村からカキキ又出ます處の手前が水澤で之を曲ると地藏
 越と云て近いけれども餘程道の悪い處で谷川を幾個も渡らんければなりません、今度の昇

夫の小肥満りと肥ッて小力が有りううだから急ぎさうなものだがノロ〜プラ〜参りま
 してモウ水澤村を離れて人家の絶えた處へ來ると甲「オウ〜下しねへ、カラ何うも歩行や
 ア爲ねへ澤を渡ッて向ふへ越したもんだから足の甲へ水が掛ッて滅方よ草臥れたから下し
 ねへ……エー何うか少しお休みあすッて下せ〜一服喫りやすから岩」大分よ遅く成たやう
 だが是から未だ榛名の本坊までの餘程有るかノ乙「ナニ然うでも坐へやすめへが是から
 段々ナマレよ登るんで地藏越へ掛ると小哥共も命賭けですが實よ思お道で坐へやす時々
 狼が出升からナ相馴「アラマア思ぢやア有りまへんかナヨイト岩はアん岩」駕籠の中で
 口を利いての往けせん……餘り口を利くと往けせんヨ相馴「デモ岩はん狼が出ち
 やア仕方がないから狼の出ない處を往きあましヨ氣味が悪うさますから昇夫「何處へ往
 ても出さうな處ばかりで、エー山の峰よ雪が一抔有りやすからア〜と風が吹くとパラ〜
 眞白でソラ山を傍覽じろ判然り白く見えませう岩」雪の降る時分杯よ狼の出さうも無も
 のだノウ昇夫「ナニ寒むい時分よア喰物が無へから矢鱈よ出て來るので岩」成丈け急い
 で行て呉れ昇夫「若しエ旦那何が情願がましい事とやすやうで濟みやせんが小哥等の澤
 と幾個も越して來て丸い石でも有ると旨く其上へ乗て渡れば宜いが一つ足を引くり返すと
 例令流されぬいまでも大怪我ア爲よアありやせん杖を突強て向ふへ渡るよア此寒むい

六十四百

の油汗が出やすから少し心附けて下せへ一蓋飯だ勢よ往き度うは坐へやすから岩汝の再度然ん事やす先刻三の輪村でチヨツとト云から些少でも遣りましたが然う再度無心を云はれての迷惑致す昇夫「迷惑致すって小哥も迷惑で、エー通常の路と違へやすは如才も有りやすめへが此所の間道で向ふの方の跡幅も有るが此處の道幅いねへ處で随分骨が折れる道で坐へやす地藏越ッてねへ、と云はれて岩次郎も少し不氣味と思ひましたから岩向うか早く行て貰ひ度、と又二分進りました現今の五十錢から少ないが其頃ろ道中の昇夫又二分の祝儀と云ての多分の者で坐へやす升岩之を遣るから氣を附けて行て呉ん少し遣り過るやうだから夫丈け骨折をせんければなりませんヨ

第十回

昇夫「エー有難う………は祝儀を下すッたから禮を申せ………有難う御坐へやす誠は頼だち無心を申て済みやせんへエ一蓋飲る口だもんですからッイ何うも往けませんへエまことよ有難う坐へやす昇夫「エー、あよを見てエるんだ開けちやア失禮だアナ昇夫「失禮だッて下すッたもんだから開ても見やうちやアねへかと包を開けて見ると二分で坐へますから昇夫「旦那これいたつマ二分で坐へやす岩「只マどの何んだ二百疋の祝儀の多分のとちやアあいか只マどの何んだ甲「只マでへ小哥等の通常の昇夫ちやアねへ何

七十四百

を云やアがるんだへ二分や一兩の目腐れ金を貰ッてお辭儀を爲てるやうなお兄さんだと思ッてるかへ賽樋め岩「何んだコレ怪からんことをやす人のことを賽樋どの何んだ甲「賽樋よ遠エねへ額が少し出ッ張ッてるから云ふんだコレ通常の者のを乗せるんちやアねへや命賭けで地藏越を爲て狼の居る處を通るんだ篋棒め命賭けの仕事だア岩「再度祝儀の無心を云ふのみならずまた左様の悪口を云ふに大方足弱伴と侮ッてだナ左様な強迫をヤと許さんぞ甲「何イ足弱伴と云ッても娘や噂アを伴れて歩行ンちやアねへや人が太金を出して抱へて置く婦女を伴れて来りやア云はずと知れた墮落ものだ二分や三分で誰が往く奴が有るものかあとから用と追人が掛りやアとも引戻されて喰へ込まなきやアあらねへんだ巨額の手云はねへから出せ岩「ナニ怪からん事を云ふ出せへ甲「ナニ乙「止せ止せ………酒の上が悪いもんでこの野郎の喰へ酔ふと仕様がねへんで………温和と咄しを爲てもお客さまは傍如才有るものか汝のやうな理不盡な事を云ふと下さるものも意氣張に成て遣り度へ物も遣れねへ事よさらア詰らねへ畜生だ………カラ何うもこの野郎の酒の上が悪いんで全休和郎はんが悪い水澤で一盞飲したから仕様が坐へやせんと小腰を屈めか指で頭を掻き乙「ナニ旦那何うか少し色を附けてお遣んあすッて岩「色を附けるッてア、云ふ悪口を云はれての金が出し難いぢやアあいかへ予の宮さまの御用よ因て榛名山への再度往來

八十四百

いたす身の上で有る其方等此近邊も居れば我々どもを心得て居らんければあらぬ筈だ他の者との違ひ不禮を致すと本坊へ參つても捨置れんぢやアないか然う爲たら其方等も此近邊で渡世をして居られまい草ソレ見ろ云ねへ事ぢやアねへ宮さまだとヨ恐怖ねへ宮さまの誠よ大變なものだ伊香保の大屋さんでも旅籠屋でも宮さまの餘澤が掛つてるお影だ……へへ、旦那エ此野郎は謝罪せやすから色を附けて遣て下せへ岩色を附けるッ何程遣たら宜いのだ乙何うか三十兩遣てお呉んねへ岩ナ何んだ怪からん事を云ふ其方等の彌子を馬鹿にするナ乙然んを解らねへ事を云つちやア仕様が有りやせん乎此野郎へ喰へ酔て理不盡な事を云ふんで此野郎の五十か百兩遣せてエんだがうんち重エ咄しを爲ても追附かねへから三十兩お貰エ申そうてエので岩誰が三十兩出す奴が有るか高崎から五まで六里の丁場で三十兩杯と云ふ大金を出白痴が有かエ乙白痴なら何か下てお呉ねへ駕籠の小哥の袴だ柄此處で止やせう岩止つたッて此様處へ置て往と云然あ……理不盡ぢやア有ませんか甲何が理不盡でへ三十兩出つたッて油汗を流てヨ駈落者を擔で地越を爲んだ金を出さねへか、出さあけりや駕籠から投り出して往くヨ岩何うも怪からん事を云ふ、半や蒲子ぢやア有るまいし駕籠から投り出してエ事有りません……左様な事を云ても仕

九十四百

方があいが何うか致すから乙何うも爲なくッても宜い出てお呉んねへ、と扇りを揚げ手を持って引摺出すから相馴「岩はんお金を遣て呉んまましヨ岩三十兩だから遣られませんかとブルブル震へるが惡い野郎と腹立ち紛れよ柄へ手を掛けて半ば抜きよか、ると通常の者なら驚させうが中々驚きません板鼻の龍太、原市の若造と云ふ名代の悪黨で、多分に有金も有りうだし旨く往つたら蘇物も奪つて丸裸体にしやうと云ふ了簡ゆゑ突然板鼻の龍太が息杖を持ってピーと打てかかりました籠形岩次郎の板鼻の龍太の爲めよ小手を打れてアツと跟蹤たが一生懸命で斬り附けるを龍太がブーンと横に拂つた息杖で岩次郎の腰を打たれて前へ倒れると相馴がアレ盗賊う一人殺しイと叫びながらナダレを駈け下る處を若造が後から頭巾へ手を掛けて引止める、龍太の岩次郎の倒れた上へ乗しか、ッて手足を取て押へ付る後から何者か鐵拳を固め力任せでポンッ打つたから龍太の痛いので眼もがら後へ退き龍太おんだウヌ、と云ひながら見ると干草の股引を穿き山あしの脚半草鞋拵へで頭巾を脱り太織の綿の這入た羽織を着て居る男で男野郎悪い事を爲やアがッて斯々若エ衆を此んな所へ伴れ込みやアがッてウヌ此處の人の通る所ぢやアねへ龍何い何處から出やアがッた斯畜生籠棒、榛名の表山へ往くよやア此方が近エんだ、何んで打ちやアがッたんだ男何んだ野郎乃公を知らねへか龍知らねへ何んだ頭巾杯を冠ッてやアがッて、

此野郎から殴れ、と左右から突然けし打ち込んで参ると男「然んならば野郎助けねへぞ、と云ひながら胸鐵を引抜さま斬り附けると腕も牙へ力も有り升から板鼻の龍太の肩先へサッーりと斬り附ると龍太のアツと云て倒れる傍から若造が息杖を揮り足を拂って来る處を飛び上り下りながら若造の脊骨へ一太刀斬込むとアツと云て倒れながら無茶苦茶杖を揮てノマル處を足を踏ん掛けてウーンと若造の横ッ腹へ刀を突き通すと龍太も若造もウーンと呻吟て居て未だ氣息が止らん容子よ彼の男ハ二人も向ひ男「怖がらんでも宜エよ……此野郎ぐれへ此處邊を荒す奴ハ無エだ喰エ込んだかと思ふと直き出て來やアがッて又悪業アするだ性懲もねへ、此野郎が伊香保へでも這入て何處ぞで逢たらと思つてた處だが大概の事なら殿打る位で済が乃公ハ手向エすれば助てい置れぬエ……マア涉心配なせへますナよ若へ涉仁何處へお往おせエます 岩「ハイ、と云たばかり口が利れません夫ハ腰を打れて立つ事が出来ません、彼の男ハ龍太の腰を巻居て居た法被のやうな襦袢で刀の血を拭ひ鞘に収めて頭巾を取りますと五十五六の人で男「何も心配の者でハ有ませんヨ予ハ伊香保の者で御座へやす 岩「ハイ何共お禮の申上やうの御座いません有難う存ます、尊公ハ那地の御仁さまで御座い升か御姓名を承「はり置ましていづれお禮は罷り出ます、拙者ハ是から隣名の本坊へ参る者で御座い升が此若共ハ高崎より乗換た昇夫で御座いまして是まで斯

様な悪い野郎ハい出會せんでした若い者と侮り故意とノロノロ致して何の様も難逢ふか知ません處を尊公のお影さまで助りました何れ坊の主人よりお禮を申上させます 男「ナニ禮も何も要せせん、古く居る野郎共で御座エやして随分旅人を艱難せる事が有から八洲さまへ頼んで縛ッて貰ふと直出て來やアがッて悪業アする悪い野郎で御座エます一人ハ板鼻生れの龍太でエ奴と一人ハ原市生れの若造でエ奴で、予ハ伊香保の福田屋龍造でエ者で御座エますが何も禮杯の要せせん……此様な寒い雪の中を表山まで出るのハ大變だから予が送ッてッて進ませう、とはから福田屋龍藏親分が二人を送ッて地蔵越をして半町ばかり往くと直又榛名山の御門が有り升 龍太「赤門だから直よ知れませす予ハ天神峠へ掛ッて伊香保へ歸るが予が和郎さん方を助けた事を云ッていけませんよ……云と彼野郎を斬た事が知れるから、とナニ斬ても宜いんだけれどモ俠客氣の仁だから禮も來られてハ困ると思ッて止めたので、龍藏ハ二人も別て伊香保へ歸ました、さて角海老でハ大金と出て抱へた相馴が驅落を爲たから大騒ぎで直に判人の源七を呼びよやりました角海老でハ相馴が逃亡致しましたので早速此の趣きを受人の源七は知らせ升と源七ハ直よ飛んで参り 源「旦那誠又申譯のない事が出来まして主人「どうも困った、源七さん和郎も親切づくで、舊同一つ裏も居た者で熱考行参娘でコレコレだが養父が物堅くッて娘を賣る事ハ出来ないと云ふ

が義理を立て遣り度からって和郎が受人も成り内儀さんが人主にあって頼むから當方もマア何うか彼の娘の爲もあるやうと思つて金利も取らず和郎も判代を取らなかつた譯だが雷人の心も善し親孝行な娘だと思ふと予もツイ可愛い花魁だと思つて油断を爲たのが失策だけれども未だ年季も有り貸も有るから此儘打棄つて置いて他の者の教戒もあらねへから據所ろなく源七さんと和郎を乃公の處の土臺を跨がせねへとか強く云へば大門を跨がせねへとかいふんだがさうしての懇意の間柄で愛想盡しもあるから乃公も些どの損をしやう何うか和郎探して来て呉んナ、二階の花魁等も此事が知れちやアあらねへが相馴を一度び歸るやうも爲て呉れ、歸つたからって年季を増すあんてへ野暮の云いねへ……夫は花の香の毀ても擲ても云いねへ餘程花魁は惚れてるのだ尤も番頭新造が從て居る花魁は惚れてれば二階も誠と治まつて宜い工合で悦んで居るが、今度乃公か他の花魁の前も有るから放棄つての置れさい……是の内所だヨ幾日掛つても宜いから探してチヨイでも花魁を伴れて來ないど商賣が誠と爲難いからと懐ろから三十兩の金包みを取り出し袂へ入れて呉れました角海老の主人の慈愛も源七も捨て置からせんから段々花の香を糺して聞きました云ひませぬゆゑ升見屋で目途を付けると敵手の上野の袋谷の大慈院の御用部屋だと云ふから段々聞いて見ると此の仁の主人方を失策り勘當も成つたが舊の旦那の榛名の本坊へ交代に

成つたと云ふを聞きましことだから段々木曾街道筋へ索探を附けると丁度板橋の○吉で斯ういふ風体の者が高祖頭巾を冠つて駕籠を乗り換へたと云ふから源七の必定期は榛名へ往つたんだらうと思ひ一生懸命もあつて高崎まで参りました、山國戸と違ひ田舎を歩行た事有りませぬ丁度三月五日でまた山の峯に雪が残つて居り升から寒いばかりでなく何んだか薄氣味が悪くつて一人では歩行けません、スルト不圖考へつきましたの伊香保の福田屋龍藏親分で之れ以前福田屋龍藏の息男善藏が江戸は居り升の内も浮氣を爲て源七の世話を成り夫れから懇意になりましたので久敷打絶ての居り升が之れへ往つて頼まうと心付きましたから道を變へて伊香保へ参つて見ると元と違つて餘程道も開けて居り升丁度日の暮々福田屋の門口へ参り源七は免みさいまし、免下さいまし、婆、ハイ何處から源七福田屋の親分のお宅へ當家で婆、ハイ當家でがんすが何所から光來をすつたエ源七、エ田町の判人源七と仰しやつて下さると直し知れますエ山田屋の源七てエものです、と云て居る所へ奥より龍藏が出て来て龍、オ、源七さん、サア此方へお這入んおせへ、何うしたエまア誰かと思つた、サアお上んなせへお珍らしい寒いのも能く……コレ湯を汲んで足洗つて進げろといふので直湯が来て足を洗つて上がりました龍「コレ荷物を片附て茶を入れて持つて來う夫から暖けへ飯ア焚け……源七さん湯もでも浴つて暖

第二十回

たまつたら宜らう微湯の成てるが當地の湯丈けがは馳走だ

源七「誠又存じながらは無沙汰を致しました一寸とお手紙を上げ度と存じて居りながらッ
 イ〜は無沙汰も成つて未だ昨年始末も出しませんやうおことで誠は相済みません 龍乃
 公ア方も何んどもハア誠は濟みやせん源七さん厄介も成つた乃公ア息男も彼時限り當地
 へ歸つて来たが和郎の世話で彼家へ這入てチツトばかり魚類を料理へることを覺えたもん
 だから家で料理の眞似事を爲てお客さまへ出すと此りやア旨へ江戸料理だつて大層繁昌ッ
 て頼だ錢儲けが有るヨ夫は彼婦も娼妓を爲た婦女も似ず能く働へて夫婦交情能く生活てる
 から骨を折つて二人で稼が宜エツて乃公の何んも構はず口出しも爲ねへでるのサ源七さ
 んのお變りのねへこと存じて居やしたか和郎も大恩を受けてるからチヨツクラ往て來
 るが宜エと云つても寒い時分より出兼るし熱くあるとまた忙がしくつて出兼るのでツイは
 不沙汰もあつちまつた……和郎さん何處へ源七少し譯が有つて參つたんですが親分今度の
 私から尊公は一生懸命のお願ひあんで實に私の吉原を放逐はれるで……出入先の遊女屋の
 土臺を跨ぐナてエば武士で云ふと扶持の喰ひ揚げなんでも何うか一つ親分此處を助けて下せ
 へまし龍七……源七さん未だ若へから何んぢやアねへか出入の妓樓の娼妓でも

引張り出しやア爲ねへか源七「中々やうんを事ぢやア有りません實に私が受人も成り喚ア
 を人主も爲て角海老へ身を賣つた花魁が有るんですが年の未だ十七で其者が驅落をして行
 衛が知れねへ處が段々踪蹟を尋けると此様名の本坊は匿れてゐるので龍七「シ、シ、即かよ
 く大へ聲を爲ちやア往けねへ源七「大へ聲を爲ては往けませんかへエー龍七「コレおさ
 の彼方の六疊の方の居裡に火い這入つてるか……ウン別は火鉢を一個持つて來う乃公の
 六疊の方居るから此方へ他人を入ねへやうにして呉れ……源七さんサア此方へお入來、
 と釣瓶形の煙草盆を提げて龍藏が先へ立つて往くから後から續いて源七も共六疊へ這入
 ると此處も長爐が切つて有り隅の方より水屋が出来て居り水瓶が有つて直ぐは藥籠へ水
 が差せるやうに成つて居ります 龍七「サア此方へお入來……彼處の人中で然る事を云
 ふと臺所より野郎どもが多勢居るから和郎さん様名の本坊も、大へ聲で云はれると、
 舊伊香保の沼だど云つたのが宮さま持ちも成つてから様名沼と云ふくらぬ宮さまの方よ
 の權が有るんで宮さまの息が掛つてるお影で此伊香保が立往く所が様名の本坊へ娼妓が潜
 匿たあと、乃公ア方でチヨツト饒舌つても八釜しい然る事がお山の者の耳へ這入りやア
 頼だマア乃公ア方へ災難が掛る譯で源七「へエ〜成程 龍七「源七さん實に乃公ア其娼妓を見
 た事が有るぜ源七「へエ〜……私い何うしても其娼妓を取戻さなければ立たねへんで、何

六百五十六

うもソノ角海老の旦那に義理も有りまた能く解た仁で一旦歸ッてせへ呉れ、ば年季を増すやう赤事の爲ねへッて、全体断落をして三年でも五年でも明けると夫れ丈け年季を増すので段々深入りを爲て生涯廓を出る事の出来ねへのが通常の娼妓の年季證文で三回煩ッても其丈け引れるやうな成てるんですが旦那の花魁を最負ふ爲てへるもんだから私も判代と取らねへで世話ア爲た譯ですが何うか一つ願ひ度と思ッて私よハ勝手が知れませんが、親分の威光で赤けりやア取戻す事も出来ませんから態々此所へ来たので龍「ムト………乃公がモウ十年も若けりやア本坊だらうが何んだらうが他人は頼まれりやア打ち毀しちまふが尊公予ハモウ六十だヨ若へ仁のやうな勇氣が無エでねへ理合を云て咄が追附けバ宜エが宮さまを權冠て理不盡ナニ此筆筆端と向ふで云やア此方でもナニ此尿坊頭と云ふ譯なるが然う成ツちやア事が面倒だが何うか乃公が工夫するから源七さんマア緩くり湯までも浴リ飯ア喫て暖マッて今夜の寐なんし源「へエ何うも有難うは坐い升龍「コレ、何か暖かい物を調理へる、何か有ツたらう湯婆でも何んでも宜エから煮ろ、と其頃の未だ喰ひ物が開けません時分で、源七の湯は這入り酒を飲み六疊へ床を展て貰ひ、居爐裡へ火を入れて暖かよ爲て呉れましたが何分寐附れません親分の聲が聞えませんから何處へ出たかと思ッて居ると彼是夜の十時半分と云ふ頃ッツと這入て参り龍「源七さんお寐さすツたかエ龍藏だ

七百五十七

源「ハイ、と目を磨りながら起き上り源「オヤコレの寝分龍「疲れたと見えて能く寐てお在だ源「イエ何う致して中々寐る處ぢやア坐いません心配しながら斯う遣て居ましたが尊公は不在のやうで坐いましたナ龍「エーちツとばかり遠方へ往て來やしたから誠にお待遠で有りましたらうが何う急いでも路が險患いもんで遅く成たが尊公のお影で寒い思ひ爲たけれども思返さだから何んな事でも仕ねエばなんねへが實ハ尊公の尋ねる娼妓を引出す者を伴れて來たアだが乃公の子のやうにする人間だから何よも心配無エです尊公の事を能く言付けたから源「へエ有難う存じ升龍「うか其仁を此方へお入れさすツて龍「此方へ這入れ男「へエ此兒おせエ、と小腰を屈めて這入て來た男ハ年頃ろ三十四五にて色クツッキリ白い鼻梁の通ツて口元の締ツた眼のキリ、と爲た眉毛の濃い宜い男で休軀は小造りでは坐い升差して居た細鐵作りの長刀を抜いて坐石を置くと、跡から續いて三十八九の男と三十六七の男が二、這へて來ましたが一入ハ一つ籠の直で一人ハ何か此頃漸く延びて結ふやうな成たものと見えツツ切たやうな指です龍「此方へ這入んな、此方へ這入れ、と云ひながら源七「向ひ龍「此者の梅吉でエもんです源「コレのお初よお目通りを致しやす小哥は梅吉と申す不識者で親分から兼てお噂の聞いて居ましたが此後ともお見知り置れまして幾久敷い懇願ひます源「若は傍で寧ろ何うも、私ハ山田屋源七とい

ふ不調法もので此度の親分も多無理を願ひました處ろ何うか爲て遣らうと仰しやッて尊公が親分も代ッて遣て下さるといふ事は何分もお願ひ申升梅「マア出来るか出来ねへか知れませんが素首を繼いで貰った親分からの頼みだから命賭けで何處までも骨を折て爲るつもりですが其代り命賭けで婦女ア浚ッて来るよの尊公も十薄ッ氣味が悪からうが命賭けの積りで一緒往てお呉んねへ」源「餘氣味の悪い事がありますか梅へエ……マア些少の有り升源へエ……何分共願ひ升喜「エーヤ後れましたか小野の上野の國人戸無宿の喜三郎てエ至ッて未熟の者出後共お見知り置れて別懇願へます清「エー小野の吾妻の清次てエ騙出者で何分は別懇願に龍「オ、然んまよ丁寧云はねへが宜エ……源七さん出野郎共の事アするけんども行儀が宜いだ、挨拶の下手でも悪いことなら立派な爲るだ……目だ、ねへやうは骨エ折ッて爲れ梅「源七さんおめへさんり當地へは入来なすった道りのももひさきやはんの姿で宜うござへへやすが山の寒ひから能く支度をしてお任せへ源「エ何分有願ひます梅「喜三、和郎腹の空る事も有るめへが夜更しをするからチツとバカリ握飯ヲ拵へて呉んねへ龍「飯を焚いて置いたから暖けへの握つて持つてけ、と是から握飯ヲ拵へお菜をいれて辦當を呑負ひ四人伴れで出掛ると龍「儲り爲つて呉れ頼むぞ梅「エー畏まりました、國戸の源七の梅吉は連れられて段々伊香保の坂を下りまするとドウ

くと谷川の水音すさまじく下り切つてまた向ふへ彼は一町半ばかり登つた所の浮石を細粉よしたやうな砂が有ッて足を踏掛けるとガラ〜と土が崩れるから時々ズル〜と失足します源「ア、梅吉さんとか云ふ源七さん少々お待ちなすッて、エー大變な道で坐い升ナ是れア驚きました梅「随分歩白き難い所で源「随分慮ぢやア有りません斯を昇り難い處の見たことが有りません……聞ですナ鼻ア摘まれても知れません兩方から木が掩ひかぶさッて暗い山ですナ梅「随分暗い處で、雪の一杯だから寒う座いますナ源「未だ是から餘程坐い升か梅「エー此處の二十四町てエます二十四町往けばチツと平地の處へ出ます源「へエー二十四町の中モウ餘程登りましたらうか梅「然うです、一町半も登りましたか源「然うですか私ハ十町も登つたやうな思ひました梅「無手ぢやア登り難からうから少しお待ちませエ、と屢々差して居た脚鐵を引長させました源七の刀の光閃を見て驚き尻餅ヲ搦くと十塊と一緒に落ちて源「ア、ア、ア、梅「何う爲たんです源「だッて和郎さんの刀を抜いて私ヲ斬るんでせう梅「へ、ナニ和郎さんを斬るんぢやアあいの登り難からうと思つたから杖ヲ拵へて渡るんで、と傍に在た竹を斬り宜い頃の長さよして梅「サア是ヲ突いてお往であせへ源「ハ、ア然うですか驚いた尊公が脇差を抜いたから私の驚愕して尻餅を搦くと十塊と一緒に十間ばかりスベリ落ちました中々暗い處で、と杖を突き

あがら漸くの事で二十四町登り詰めますと平らの所へ出ました。暗くつて鼻を摘まれても
 知れませんが「源」エー、少し平坦に成りましたやうで、梅「エー見からの平坦です、左より白
 く見えるのが二つ嶽でエの源へエー……何れも在るか薩摩の解りません、喜「アレ、何
 り見えるのが二つ嶽でエ山で源」元さへ解りません、山の山なんぞの何うして見えません
 梅「オイ、儲かり為や……汝、清次と二人で二つ嶽の麓から別れて彼方を廻つて呉んね、乃
 公「源七さんと此方を廻るから源」左「から二人さん私の此處でお別れ、為ますから氣
 を附けてお任せさい、喜「源七さん左様なら、喜「左様なら、二人は別れて往きました源」
 梅「吉さん、梅「エー源」尊公と私と二人で宜う此座の升か、何か出やア為ませんか、梅
 出たつて源七さん命賭けで源「へー、命賭けと仰しやつての一言も此座いませんが何んを
 者だつて云ひ升ヨ……ウーン、ウーン、と呻ながら段々往たが怖いので、猶ほ疲れ升は是
 小一里も往たらうかと思ふとドブリくと云ふ水音が致し升の途へ出ました梅「エー此
 處のソノ榛名の御手洗でエ大沼で源「へエー斯る高い山の中は沼が有り升か、梅「是の榛
 名の湖水で晝間見る、驚愕り致し升ヨ、縦三里横一里でエますけれど、夫は有りませぬ
 源「縦が三里、へエー、船で渡るのでせう、梅「渡りやア為ませんが、此縁を往くので……
 宜うがすか、エ源「どうも大變な處です、何處まで往つても山あんで梅「然うですよ、と咄

を爲ながら段々沼縁を小半里も往と天神峠の下り口で御座の升源「是の何てエ處です、梅
 シツ……大きな聲で饒舌ちやア往けませぬ、田だから、何と聞くと、袖や山へ籠つて獸
 類を討ちよ來てゐる獵人が幾許も居るから、他人は知れると、面位で源「へエー大變な處で御
 座の升ナ

第廿一回

梅「サア此方へ下るんだ源「ドン、水音が致し升子、梅「谷だから、だから落ると大變で、此方
 へ寄つてお任せせへ源「ア、ア、ア……大入道が、大入道が出ました、源「静か、爲なく
 ツちやア往けねへといふ大きな聲を爲て……大入道ちやア有りませぬ、彼の葛籠岩へ（嚴
 ちんで源「ハア……岩ですか、私の大入道が出たかと思ひまして、ビツッヨリ汗をかきまし
 て……ハア、梅「大きな聲を出しちやア往けませぬ、此處は番屋が在りて、手形が懸いて、ア
 越させませぬ、ゆゑ是から谷川へ下りて、冬だから水が涸れてます、少し冷たいがシャブ、
 這入て袖摺岩の方へ登るんだから、小哥は捕縛、まッて谷川の方へ這入んで、サア捕縛、まッて
 お任せせへ源「大變ですナ……エー冷てへ、冷め度う御座の升ナ、星を切られるてエの
 斯なものちやア有りませぬ……オ、冷め度へ、梅「然う、饒舌ちやア往けませぬ、命賭けで
 源「エー命賭けで、コレは驚きましたナ、とザブ、曹の間谷川を渡りました、雪が溶

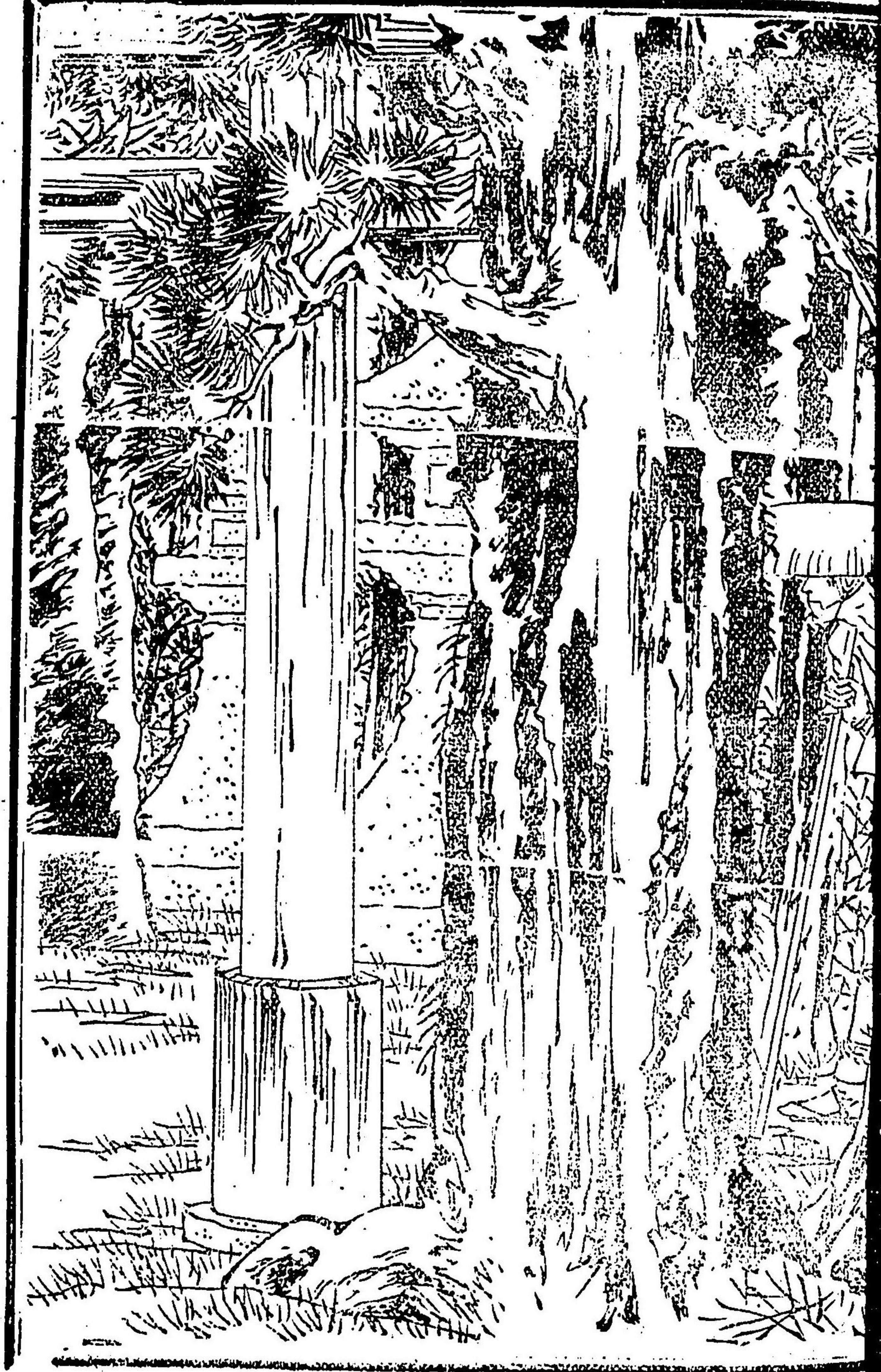


Figure 10
Figure 11

けて落る水ゆゑ足を切られるより痛い是から、漸く神持岩の所へ昇つてホツト息を吐き
 源「ハア―冷め度う御座いましたナ實に酷い事も有るもんで梅「酷いたつて和郎さんの扶
 持の喰揚げと云ふ事の場合だから此位の苦みの爲めければならぬのサ源「私い何ふ云
 ふ譯か、彼の娘が慇懃だから受人に成つたばかりで、誰始めて斯ん可憐い苦しい思ひを
 致しました梅「小哥等、随分是れまで度々爲つた事が有りませう源「へエ―度々爲つて慣れ
 て居らつしやるから何んとも思ひないで笑ひ顔をなすつて居らつしやるので……ド何うか
 少しお待ちすつて梅「ナ何んです源「ア、私の大きな家が真の先へ出たかと思つて驚きま
 した梅「源七さん此方へお入來なせへ、アソレ向ふの高へ所と赤へ門が見えませう、彼
 が榛名の本坊で源「赤いか黒いか私はい些ども解りませぬ……ウン成程坂の上へ門が有り
 升梅「和郎さん子彼所へ往て此榛名の講中の積りで私、神田佐柄木町の講中の講元で御座
 い升が講中が散亂つて方々泊つてますが明日の朝護摩札を持って皆支度させ講中の者
 を先へ立たせませうから何うぞ例の下の座敷の便所の近い處へ寐かして下さいと斯う云て叩
 きささい源「へエ―何處を梅「本坊の門をサ、スルト中から案内を爲ますから座敷へ往て
 寐るよも直に出られるやうにチャント草鞋を穿いて、人の前で穿いちやア往かせませぬ源
 「人は知れぬへやうに獨でするんで梅「然うサ、小哥の刻限を量つて裏子から往きますが悟

られぬへやうに佐柄木町の講元だてエのです源「若しく尊公其方へ往くんですか梅
 小哥「此方から、と別れて往きました、源七「怖くつてありませんが仕方がないから段々
 石坂を昇つて門の處へ來て一生懸命ドン／＼門を叩き源「お頼申します、お頼申します、
 と音信れ口の中で不動さまの呪文を唱へて居り升と番僧「誰公源「エー……私「へエー
 ……神田佐柄木町の講中の講元で御座い升がム／＼ソノ方々にナニが泊つて居り升、ソノ何
 んどか申ましたッけ……ム一坊へ泊つて居り升夫れでソノお札を皆を集めまして明朝ソノ
 早く起して講中を出立致させ升のですが何うかソノ下座敷の便所の近い處へ願ひ度もので
 番僧「御講元さまで御座いま升すか御苦勞さま、と云ひながらギ―イと開き口開けて叮嚀
 よ通しました源「明朝の早う立ちますので草鞋を取間違へると往けませんから、と風呂敷
 へ草鞋や脚半を入れ包を提げて案内に従ひ奥の結構な座敷へ通ると布團が出る茶菓子が出
 る源「私、直に寐度いから寐かして下さいナ番僧「左様ならお休みなさいまし、と床を
 展いて呉れました源七「床を展て呉れましたから先づ横になりましたが暫くして起き上り
 草鞋を穿いて其儘で布團の中へ坐り源「實に驚いたナ今夜の様又驚いた事い無へ、……斯
 ん結構の所へ只ヌ一人で斯う通て置れるんだが何事も無くつて泊つたら堪ぞ宜い心持だら
 うナ……梅吉さんの何う爲たんだらう變だナア、と考へて居ると庭口の戸をソツとコツ

く叩きあがら小聲で「梅源七さんく」と云ひれて小首を傾け暫く考へて立て参り源
 梅吉さんですか「梅」シッ、シー……「チヨ」と開けてお呉んねへ源「へエ何處から聞けますんで
 す梅」便所の止りの戸より下り様と上り様があるから源「へエ」と手探で漸く様を取てッ
 と雨戸を開け源「梅吉さんですか梅」此方へお出させへ源「へエ有難う存じます梅」和郎
 さん脇差を差して来ねへのかエ源「エー忘れました」と立返り取て来てッ「と雨戸を締め
 やうとする梅」其方へ締るのじやアねへ此方の方へ締るんです源「見當が解りませんか
 ら……尊公の何時の間も梅源七さん誠な何んだが婦女が居るくありやした……必定り奥
 の隠れ隠匿して有ると思つたから踏み込んで往き婦女を押へて坊へ掛合ふ了簡だつたが居
 なく成て見れば仕方が無へ源七さん誠な苦勞だが是から日高越をして摺巢峠を越すんだ
 源「エー又是から峠を越すんですか驚きましたナ私此くらゐ驚いた事初めて」梅「ア
 毛和郎さん命賭けで、是から段々日高越を致しましたが實は一通りあらん難所で漸く之
 を越してまた摺巢峠を越す時の難儀の大變で油汗を流しながら漸く峠を登り詰ると夜が
 白んで参りプート明るくなりましたから見ると山の峯より未だ雪が残つて居て誠に宜い景
 色で手洗がスーッと見え正面より榛名の富士が有り北の方より黒髪山に掃部ヶ岳烏帽子
 嶽から視岩が見え升南の方より相馬山から二ツ嶽が見えてはるか向ふより男子山子持山其間

日光山足尾山庚申山が見え升皆峠より雪を載いて居り升實は景色の好いが震ひ揚るやう
 な寒氣で源「好い景色で坐い升ナ梅」好い景色でせう……昨夜通つたの「ア」手洗縁
 庵んで源「何ごとも無つて此湖を見たら嘸ぞ好い景色でせう」と咄しあがら来ると梅源
 七さん此方へお入来、と是から段々細道へ伴れ込んでトウ「二ツ嶽の根方まで参ると二
 ツ嶽の温泉で竹筒で地へ穴を掘るとプーと蒸氣が立ち升所へサンマハラポツチ杯を置き
 まして腰を掛けて肛門を暖めると云ふ痔の湯ですが何うかするとパツマリ湯が出さくある
 から彼地の衰微致す事が度々有り升が其頃も湯が出ず衰微致しましたから山守もなく皆な
 下へ下りて仕舞ひ人の住むべき所でないスルト下の方でプーと焚火の烟が外へ出ますのを
 見て梅「若し源七さん源」へエ梅「向ふの烟の出る所が有りませう源」へエ成程梅「彼家
 必定期婦女が居ると目的を附けて来たんだが和郎さんツットの間に此所の薪の積んで有る
 所へッツと匿れておて下せへ宜いかエ小哥が源七さんモウ宜いから出てお呉んねへと云ふ
 まで出ちやア往かせせんヨ源「へエ……私此木小屋の中へ幾日這入てますんで梅」幾日
 だつて永く待たせませんが呼吸が悪いと半日ぐらゐ待たせるヨ源「へエ半日只這入てま
 すかナ梅」木小屋だから暖けへが外は何んぞ騒が有ても無闇は駈け出すと怪我ア爲ますヨ、
 と云はれて源七の何事か解りませんから震へあがら木小屋の中へ這入り何うなることかと

思ッて居升ると梅吉のツガくと烟の出る軒場まで来て見ると焚火の烟をア〜吹きながら居座の向ふは胡坐を掻いて居る男の年頃五十五六で胡摩搦交りの頭髪で能く見ると八咫鳥の九平と云て音は聞えた悪黨で傍ら居る婦女の髪櫛のお坂で年齢四十八もあり結び髪へ荒齒の櫛を邪慳よ差し亭主の廣袖を引掛け立膝を爲て粗朶を突込んでボウ〜燃して居り升梅吉の九平お坂の居るのを見て愕驚し梅「ム〜九平とお坂の此所は匿れて居たかア〜有難いと申すの此梅吉の前申上げました安山の草三郎が坊へ飯焚き這入りまして身匿しをいたしホトボリが醒るまで福田屋の龍藏親分は隠れて居る草三郎ゆゑ九年此方尋ねあぐんだお坂九平が此所は居るの僥倖事だ、年頃尋ねあぐんだ女房の異父の仇を助太刀して討たせるの此時だと充分思案を定め梅「イヤお早う珍坐います、と聲を掛けられメツヌよ入通りのおの所ゆゑ愕して九平「オウ！肝を潰した梅「イヤ九平さん誠久敷逢はね〜ノウウ九「オ、ウ兄イカ……何う爲て斯所へ這入ッて来たんだ雪の中を梅「ナニ少し據ねへ事でヨ……お坂さん何時もお壯健で若いね〜さか「オヤママ思ひ掛けない安中の饅頭屋さんだヨ、何うしてママ斯んね山の中へ梅「エ〜據ねへ事で……ママは免ねへ、寒くッて仕様がね〜から少し烘らしてお呉んね〜九「サア此方へお出〜梅「エ〜免ねへ……酷く寒いね〜九「寒いッて一昨日もブーツと来て又一冠り冠ッたが又此頃よモ

ウ一冠り有らうかと思ッてるのだが随分堪へ切れね〜ねエ梅「然うだらうね〜九「何う爲て兄イ此所へ来たんだ梅「少しばかり譯が有て長野へ往て燻ッてたが和郎さん等が獄に匿れてるとの思ひ掛けなかつた子、随分忙しい身体だアゼ九「ウン……兄イ何うもモウ往けね〜老ひ込むと妙なものだ若〜時悪い事を爲たのを思ふとゾツとするからモウ〜悪事のフツツリ止めやうッて夫婦赤がら後生氣が起つたもんだから今ぢやア念佛三昧だ南無阿彌陀佛〜三年越夫婦で念佛を唱てるから腹の中は洗つたやうな善人は成つた其お影かママ細ツた素首を纏いで斯う遣ッて爺婆で居るんだ若〜仁は逢ふと子悪事の止めね〜ヨと云て異見をするやうよあるてエの妙なものだ子エ梅「有りやアママ宜い事だ子併し和郎等の本心とも思はれね〜庶言ぢやアね〜か地獄で鬼が笑やア爲ね〜かエ九「一生懸命よノウ婆さんさか「眞實だヨお爺さんが斯な成つちまつて妾も仕方がないから此上後生を願ひ今まで悪い事を爲た罪滅ぼしだと思ッていあけりやア何うして斯る寒い山の中は居られるものぢやアないやアチ梅「ムーン……此所は匿れてるのかエ、姉さんの老込んだと思ッても流石よ八咫鳥の九平さん丈け有ッて酒の樽附けた子九「エ……ナニコレの貰ッたのだ、ママ爺婆で念佛を唱て小さく成ッてるが舊を云へば強勢悪黨だが今ぢやア意久地なしで黙然だ、チツとばかり樽底は残ッてるから之を飲んだ跡で打ッ毀して焚いて烘るが宜いッて

貰ったのサ梅「サウカ……此膳の上は鯉の筒切の喰餘りが有るけれども此位の大きき鯉を
 鯉こくよ爲て喰ふのよ和郎等で受け取れ出来ねへヤ九「エ……ナ何よコ之も貰ったん
 だ、伊香保の大屋さん等が誠に愍然だから何んだ骨でも残ったら爺い婆ア又喰はして遣れ
 ヅてんで見ねへ此通り骨ばかりだが骨でもへパリ附いてる肉をシヤブツても有難へと思ッ
 てるもんだから方々から種々な物を貰ふのサ梅「和郎の後ろに建てる無地金の屏風より山
 水が描て有が餘程善い屏風だが何うして此所より斯な物が有るんだ九「コレカ……ムーこれ
 の借りたんだ梅「フーンこれの呉れめへ何所から借りた九「ナニ、アノムー坊の旦那方が
 山風が強いから爺い婆アの婆いめへ何うせ不用てるから持ッてッて山風を凌げと仰しやる
 からお借りして来て凌いでるのヨ梅「オイ九平さん屏風のなかに子雲メが匿すてへ好いお
 月さまが五六日隠匿つて有るだらうソノ立派な婦女を山越をして信州へ密賣さうてへ手筈
 のチャンと決定てるが此寒氣も態々山の中へ出て来たんだからチツトの小哥の顔も立て呉
 れて屏風の中の婦女を乃公へ渡して呉んねへか九「ナニ……屏風の中の玉てへのナ何だ
 梅「老耄ちやア往けねへ、坊から頼まれて和郎は宜い仕事もあるだらうけれど乃公だつて
 ナンとの色を附けらア無謝貰ッて往うてへ譯ぢやアねへから婦女丈け此方へ渡して呉んね

第廿二回

へ、男子の置ても宜いが婦女丈け渡して呉れねへか九「何か和郎の屏風の中は在るやうよ
 思つてるが何んよも有りやア爲ねへよ爺い婆アで敷いて寐る布團が有るツきりヨ、何か和
 郎聞き違へて来た子梅「夫れア往けねへ様名の坊へ女郎を匿したの今度が始めてだが宮
 さすの構勢で踏込む事も出来ねへかつて福田屋の親分が乃公のモウ年を老たから汝も頼む
 と云ふの其女郎の受人も成た源七と云ふ仁の何う云ふ縁か知らねへが福田屋の親分の子息
 が永へ問だ世話も成た廉が有るので源七と云ふ仁から親分頼み親分から又乃公が頼まれ
 て呉れア乃公親分のお影で細ツた首を繼いで貰へ疊の上で暖けへ飯の喰へるやうも成た
 のだから其の恩返しよ来たんだが和郎の忙しい身の上だから何よも云はずに其婦女を渡し
 て呉れ、何うせうれア坊のやうよは往かねへがチツと位の謝儀の附けるから婦女を渡し
 て呉んねへさか「何んだか知らねへヨ、兄イの何か云はれて来たんだヨ變な疑ぐつて彼處
 も何か居るとか當りを附けて来たとか云ふが何んだか妾よのチツとも分らねへよ、ソノ女
 玉てへの何んだ婦人かエ、何うして斯な雪のある寒い處に婦人なんぞが三日も居れる
 ものか子、妾の世も出られねへから仕方おし居るんだアね、戯談ぢやアねへヨ問違へだ
 ヨ、彼處より何よも居ねへヨ梅「オイ、匿しちやア往けねへ角海老の花魁で相馴と云て
 未だ十七だから年季も永へ上玉だ其婦が騷落を爲たんだ主人が心配して咄とされソノ源七

てエ仁が行立ねへてエので乃公が危険へ橋を渡つて来たんだが渡して呉れねへとチツと面
 倒よなるぜ九「面倒でも乃公ア知らねへ念佛三昧よ成てるものが何うして騙落者あどを隠
 匿ふやうあ危へ事が出来るか出来ねへか考げへて見ねへ……ア、――往昔の悪い事を爲たヨ
 南無阿彌陀佛く梅へ、、匿しちやア往けねへ儲かゝ當りが附いてるんだ若し否と云
 やア仕方がねへ親分への義理よ命賭でも踏込んで婦女を強奪ツて歸らうか夫ども話合で渡
 すか若し話合で渡さねへなら命賭で和郎の白髪首を打ち落して持て往くから然う思ツて呉
 れ九「ナニイ白髪首を打ち落す……馬鹿野郎メ大それた事を云ふナ、乃公を見損ふつた
 か老朽んだツて八呌鳥の九平だ汝等のやうな小僧ツ子が踏込んで命賭で白髪首を落すとい
 ふが乃公の眼から見ると汝の小僧ツ子ださか「お止しヨく、と九平の袖を引く九「エー
 放棄ツて置けく、と長脇差を傍へ引寄せ九青い嘴で餘りボン／＼云ふナ此方が温和
 く云てれば宜い氣も成りやアがツて……設令乃公が誰よ頼まれて匿ツて置うとも汝等の
 やうな小僧ツ子が来たツてオイソレと渡すやうな老爺だと思ツてるけへ……エー放棄ツ
 どけく……指でも差して見ろ那方の首が落ちるか、青い頭から先へ落すから餘り御詫を云
 ふナ梅「九平さんは程まで云ても肯て呉れなけりやア仕方がねへ遣る所まで爲るぜ九
 ヤレく、と胴鐵作りの長刀を膝元まで引寄せると屏風の中でアレーと女の金切聲が爲たの

で九平の肝を潰して立上らうとする草三郎の梅吉の懐から種ク島の短銃を取出して九
 平に差し附け梅「サア立騒ぐとコレだヨ九「マ、待て梅「イヤ待たねへ、サア何うだ九
 「ア危険からマア鐵砲を下し置け、と流石の悪黨も顔の色を變へて坐し附きまして、胴鐵の
 刀柄を握ツて仁王立よ突立たり切り込とも退とも出来ませんスルト屏風の中でアレー
 と云ふ婦女の聲がして無地金の屏風の中でバク／＼すると何時の間にか裏手から這入て來
 た男の大口の喜三郎吾妻の清次の二人で岩次郎と相馴を押へ腰帶で縛りに掛るを見て梅
 オー待ちねへ縛らなくツても宜いや何よ悪い事を爲たんぢやアねへから待ちねへ喜「ム
 一宜いか梅「マア宜いや……エーオイ爺さん、モウ仕方がねへ和郎も他人よ頼まれて騙落
 者を匿て旨へ正月を爲やうと思ツてるんだらう乃公も義理有る親分から頼まれて斯うや
 ツて談判よ来たからよやア、モウ命賭だ和郎も尋常の人ぢやアあし乃公も榛名の梅吉と云
 てお斥し肩書の有る人間だから命の取り遣りを爲やうと云て乃公と和郎と馬鹿な事を爲て
 も仕方がねへから尋常よ悪い事をして濟ねへから縛り掛けてお役所へ引いて首を斬てお呉
 んぢせへツて上のお手よ掛ツて死よやア常り前だが乃公も無謝此婦を伴れて往うてエ譯ぢ
 やア無へト云て金も無へが何うだらう五十兩渡すから大負よ負けて此花魁又けい對人の源
 七さんてエ人は渡してお呉んねへナ、何モハ哥が婦女を伴れてツて宿場へ沈めて宜いこど

どをする譯ぢやアねへ和郎も福田屋の親分より厄介よ成た事も有らう……エーオイ黙ッて
 るの心得が出来ねへのか、出来あけりやア命賭けの仕事をする丈けの話だが然る詰ら
 ねへ事を爲ても仕様がねへが何うするんだ喜「エーオイ爺さん、梅阿兄も氣を揉んで斯か
 へ所へ来たんだ殊よお互よ知てる顔ぢやアねへか相の川の親分の所で一個鍋の飯を喰ひ合
 た中たのよ白髪頭を一本く引こ抜いても仕様がねへ、と云ひれて流石よ負け惜みの九平
 だがグーともスーとも云へません、お坂の恐怖から小聲でさか「お爺さんまけてお仕舞ひ
 ヨ、負てお仕舞ひヨと装を引きましたので九平「ウン、宜い……然う和郎のやうお分けて
 咄しやア否とも云へねへが乃公も義理があつて頼まれた坊の旦那又濟まねへけれど和郎よ
 此花魁を渡すがそれぢやア五十兩の金の屹度今乃公の眼の前へ出すか梅「出すヨ夫れ屹
 度出すとも無謝持て往く氣遣へのぬへ九「うれぢやア直ぐ渡たして呉んねへ梅「マア待ち
 ねへ静かよ爲ねへさか「兄イ等の此爺爺イ婆アを捕めへて騒いだッてお互ひよ仕様がねへ
 何うか爺さんも老る年だから咄合で温和とねへお互よ義理が有て兄イも親分よ頼まれて
 来たらうが宅の爺さんも頼まれた人が有るんだが恩人で義理が有るから仕方あしよ斯うや
 ッてるんだから静かよ話を爲てお呉れ梅「花魁喰驚り爲あすッたらう……夫れぢやア
 和郎等も得心で大きよ有難エ然う事が決れば咄しの早い宜い——花魁和女さん吃驚り爲

ちやア往けねへ、和女さんの人主あり受人よ成ッた判人の源七さんが角海老の旦那よ呼ば
 れてゴウギと迷惑を爲たんで斯草深エ山中へ草鞋を穿いて福田屋の親分を慕ッて頼み
 に来たので實の親分が来る處を小哥を若へから汝往けと云はれて仕方あしよ小哥が来たや
 うを譯だから何うか小哥の云ふ事を聞いて生木を割くやうだが花魁思ひ切て主人へ義理を
 立てお呉んねへ、又岩さんの坊の旦那の方へお歸んあすッて和郎さんの夫れ丈けの奉公を
 爲なければならねへお身の上だてエ事の小哥も聞いてますから、宜う座エ升かエ梅「源
 七さん、源七さんモウ宜いから此方へお入來なすッて下せへ源「ハイモウ宜しう座い升
 か梅「モウ宜いから此方へお入來なせへ源「エー事が納まりましたか、モウ首を出しても
 宜しう座い升か梅「モウ大丈夫で座へやす、と云はれて源七の薪小屋から出て來て
 源「ハア—何も實は斯な驚きました怖いやうお寒いやうお變な難に遇たこと御坐いませ
 ん、誠は何うも梅「マア貴方へお入來なせへ、婦女ア突き留やした、と云はれて震へあが
 ら上ッて来る源七の顔を相馴い見て面目あいから相馴「堪忍して呉んあまし。と云ひあが
 らワーツと泣き倒れました源「大きよ有難う座いしました、皆さん免あさいまし、ハア
 —何うも斯う云ふ所よ匿れて居やうどの私しでも尊公でも氣が附ませんが尊公の憤て居ら
 ッしやるから險い峠を越て突留たんだが花魁何も戯事ぢやア座いませんせ和女さん困る

四十七百

ちやア有合せんか小哥の表長屋と和女さんの阿父さんが和服として和女さんが店へ提灯
 や荒物を並べて賣てる時よの親孝行の湯仁だ感心お娘だど宇の女房と和郎さんの事を譽め
 ナギツてるど阿父さんの病氣が募つて来たので和女さんも看病で内職も出来なくあり燈明
 寺店へ引越してから阿父さんに宜い薬を飲ませる為め身を賣り度とお聞きなすつても阿父
 さんが堅いから賣ること出来ぬ義理が有てエのを小哥が受人又成り暇アを主人主よまて
 和女さんを角海老へ伴れてつて譯し咄すと旦那も感心を娘だてエので小哥も判代を取らず
 旦那も金利を取たんじやア無い何も角もソツクリ阿父さんの手助けよなるやうに年季も短
 く爲たんじやア有りませんか、夫りやア情夫てエものが無ければ勤らねへ身の上だてエ事
 の小哥も廓に居るから存じてますが、阿父さんが死んで借金もあすつたらうけれども突然
 けよ居なく成たもだんから小哥の何のくれへ迷惑を爲たか知れやア爲ません、と云ひなが
 ら岩次郎の方を見向き源「此は仁ですか伴れて逃げたは仁の、下を向ひて、い往けません
 私ハ斯お怖い思ひを爲た事ハ有りません難儀たつて和郎さん谷や川をジャブと歩行いて
 眞實も何うも天狗さまの室の中へ這入たやうな心持が爲て斯お何うも眞實も……梅「然ん
 ば何時まで愚痴を云ても仕方有りやせん、面目無へから下を向ひてるんで……オイ清
 次ナヨイと耳を貸せ清次「ナニ耳を……梅「大急ぎで……ナア清「ウン成程……ウン宜う

五十七百

御座へやす……違ハ無エ成程……夫れぢやア小哥の直に往て来やす、と清次の梅吉も何か
 言付かつて直に二ツ嶽を飛び出しました梅「喜三此處へ往ねへ此處へ往ねへ喜「エー梅
 全体乃公が此花魁をお送り申て福田屋の親分の處へ往て源七さんよお渡し申さおくれアお
 らねへが少し乃公も譯のある身の上だから和郎源七さんと花魁を送つて福田屋の親分の處
 へ往て呉んナ……源七さん今夜ハ福田屋の親分の處へ一晩泊つてお呉んませへ小哥の直よ
 跡から往て緩くりお咄しを爲やすから源「此は仁が常家の御主人で御座い升か年を老たお
 仁、本當に無闇に婦女をお隠匿なすつてい往けません夫ハ御親切のやうだが吉原の法の中
 々六ヶ敷もので却つて害もあります引戻されると隠匿れてエた間丈けハチャンと年季が増
 して夫丈け勤めおけれアありません梅「然んお事ハ云いなくつても宜う御座へやす……喜
 三宜いか喜「さやア源七さん往きませう源「左様から梅吉さん誠よ有難う御座いました
 公のお影で、實よ斯お處で花魁を手入れやうと思ひませんが是で私の顔も立つやうお
 譯で何とも何うもお禮の申うやうハ御座いません……今晚ハ福田屋の親分の處でお待ち
 受けを致し升からお歸りを願ひますエー實ハ角海老の主人から三十兩貰つて居升が往復の
 路用も要りますから二十兩もお禮を致す心得です全体三十兩進げちまつても宜いんですが
 少し何んで御座い升から……サア花魁お往きさい、と出掛やうとするど岩次郎が出て止ま

した

岩「少々お待ちなすつて廊の傍へ、尊公の花魁を伴れて直に角海老へ歸る事なるんですナ梅「さうですども和郎さんの他人が大金を出して抱えて置く年季のあるものを引ッ浚ッて逃げたんだから仕方が無へ、和郎さんの是から直に本坊の本坊が主人だから奉公なすつて辛抱したうへ親戚の方も勘當の免るやうな坊の傍主人から説きをしてお貰へませへ、花魁丈けの元へ返して年季通り勤めれば其處の源七さんと咄合で出来ませうから互へに辛抱して花魁の年季通り勤め和郎さんも務めて親戚の首尾も能くなり花魁の年季も明けてチャンと素人は成たらば互に思ひ合はれた交情だから夫婦に成たら是程の事無いぢやア有りませんか岩「夫の誠は有難い事で傍坐い升けれど花魁の年季の處も段々聞けば未だ七年の儘か有るさうで七年の間だ私に本坊の旦那の處へ奉公して一生懸命勤め辛抱して親の勘當が免るやうな成て身が立てから女房も成て呉れとすても敵婦の毎晩枕ゆる相馴の了簡が變つて他の仁は身受をされるやうな事有りませんか、儘か相馴の金を山に積んで他男の亭主は為さいと云ふ確とした證據を拵へて尊公其受人よかんをすつて下さいませるか梅「其事少し困ったナ、受人の何んのでエの強氣と困ったが和郎

さんが永エ間だ辛抱してゐるのよ花魁が他へ受け出されたり他へ浮氣するやうな心變りのするやうな婦女なら女房も爲ても和郎さんの爲めもありやせんから斷然り思ひ切つてお仕舞ひなせへ、心變りの有るめへが若し變つたら然うぢやア有りやせんか、然る婦女なら思ひ切つてお仕舞ひなせへ岩「思ひ切れと仰しやいますすが只今までの花魁の親切でエもの一通りぢやア有りません夫れは花魁の養父の死去ります時和郎の赤の他人だが和郎の信實を見抜いたから只一人の娘おきよの行末を頼み度い何うか女房も爲て呉れと云ふ遺言もあり升から親の遺言を背くやうな事何んぼ廊も勤めてゐる身の上でも然る事の有るまいと思ひ升「相馴「馬鹿らしいぢや有りませんか阿父さんの遺言も有り升が源七さんよも旦那はんも義理が有て妾ははんも濟まぬから源七さんと一緒に歸つて一生懸命年季を勤めて年が明けた曉よ岩はん妾を見捨てずは屹度女房も持てお呉んおはいませよ岩「ア、云ふ旨い言を云ひますすが彼言が時々變りますんで梅「變つたら變つた時の事よなさいナ岩「ですが尊公彼のア、云ふ事を申て眞實らしく思つて翌日往くと違ふ事が有り升梅「困つたナ……花魁も又岩さんよ咄の爲てへ事も有りませうからアノ屏風の中へ往て少し咄を爲させい、と二人を屏風の中へ押し遣り居座裡へドットと粗朶に燃へながら梅「爺さん一杯飲ましてお呉んねへナ九平「婆さん、酒が有るだらうから燗けねへ、何か

喰物が有るだらう塩物でも焼きねへ梅「ナニ肴の荒でも宜い……アレ彼の通り屏風の中で二人が泣いてるが生木を引ッ割くてエの此事だ、氣の毒だナア九「夫の宜いが早く五十兩の金子を渡して呉んねへ……五十兩の處の確實だらうノ梅「ウン大丈夫だがマア待ちねへ、乃公が此處に居るから婦女を受取て仕舞てから金を渡さねへあど、口が腐ッても云やア爲ねへ……何うだ子誂別の相馴「ハイ……今往くございます梅「成丈け早く爲てお呉れ源「戯言ぢやア有りませんせ何處まで源七よ心配を掛けるんです子早くして下さい眞實よ戯事ぢやア有りませんヨ斯赤山の中で朝歸りのお容どの違ひますヨ相馴「夫れぢやア岩のん煩はあいやうよ身体を大切に時節を待てお呉んばはい、其時よ今云た事を忘れろと肯さまへんヨ岩「予の忘れやア爲ない……ぢやア和女大切氣を付けてお礼ヨ、と男泣きよオロ……泣きながら岩次郎が見送ります相馴も振り返りノ源七よ手を引れて出て往く姿の何んだか馬鹿氣で居るやうな氣の毒な事で座い升梅「喜氣を附けて送て呉んな、源七さん宜う座い升か源「エー大丈夫で昨宵のアノ迄る處で花魁を迂らせると往けませんからと手を押して段々下ッて参り升、此方の爛徳利を藥罐の中へ突込んだから忽ちお爛が出来ました九「サア阿兄一杯喰んねへ梅「ウン有難エ……何よし岩はん此處へお入來ませへ、和郎はんの浮氣をして、二十五の曉までと言ふが二十五もあらん仁だから

今を盛りよ是から辛抱すれば尊公あんザア後立てが坊の旦那で阿父さんが宮様衆だてエ咄を源七さん又聞たが結構お身の上だから辛抱さへすれば舊のお宅へ歸られて随分權妻外妻を置れる身の上だから辛抱せエまし岩「ハイ有難う座い升相馴の了簡もスツカリと聞きまして是れあらと思ひましたから私「思ひ切て手放して歸しましたが七年の年季の處を少しでも減りますやうよ尊公からお御合ひあすッて下さいまし、彼婦も誠よ女郎のやうな心ぢやアありません親の爲めよ身を賣りました位の眞實な娘でアノ位な實意のある婦人の澤山のありません梅「へ、夫の和郎さんの氣よ入た婦女だから……だが和郎さんの惚氣を聞くやうな心持がするが宜い花魁で尊公の花魁の阿父さんを見送ッたどねへエ岩「へエ義父も見送り病中よも多少小遣ひ杯を恵みました事もあり升ので義父が私の心根を感心して只々一人の娘だが和郎よ任せると遺言を致しました其義理があるから此度斯遺言一緒に参るやうな深い交情です九「阿兄イ何を話して居るか知らねへが戯談ぢやアねへ金の何う爲たんだ梅「マア宜い侍ちねへ、乃公ア腹が空ッて飯が喰ひ度、と梅吉が酒を飲んだり飯を喰たりして何時まで経てもグズノとして居升九「阿兄イ眞實よ何う爲たんだ梅「實の此處よ金が無へから安中まで取りに遣たんだ九「エー安中まで取りよ遣た戯言ぢやアねへせ六里も有る處を梅「六里有るッて慣れてるから雜作も無へ表山の方へ出れば遠

いが裏山の方から往たから雜作もねへ何らも有りやしねへ九「雜作も無エたッて雪道だから梅「ナニ大丈夫だよ、と云て居る内よ正午も成ても来ないから晝飯を喰ふ九「眞實よ氣が長へぢやア無へか梅「ナニ今直よ来るヨさか「戲言ぢやア無へヨ婦女を渡して愚弄ぢやア往けねへせ梅「ナニ大丈夫だ、と梅吉も待あぐんで上り端の處へ出て二ッ嶽の根方を見て居ると向ふからトツ／＼と三枚で旅駕籠を飛ばし清次が先きへ立て来ました清「阿兄い何うも待遠だッたらう梅「イヤ大きよは苦勞……何うだエ清「何しろ何うもチエ手問取れるてエの登りが滅方が折たんで梅「ムー然うだッたらう……若衆大きよは苦勞ヨ昇夫「イヤ安中の阿兄いぢやアねへか梅「ムー……若衆何うか乃公が此處は居た事を安中へ歸ッても黙ッて呉んナ昇夫「阿兄い誠よあつかしう傍坐エやす和郎さんの評判ばかり毎日してますが和郎さんが居なくあッてからの百姓なんどの皆を困ッてますが誠よ思ひ掛けねへマアお壯健で、慥かよ姉はんのお送り申やした梅「大きよは苦勞ヨ昇夫「エい何う致しやしてと云ひながらボカリと扇りを揚げると中から出たのの草三郎の女房お恒では坐い升然うか、それで宜い……九平さん漸く今安中から金が来たんだ九「金が来たア、夫れぢやア直よ受取らうぢやアねへか早い方が宜い梅「實の金を取りよ遣たら思うやうよ出来ねへんだ九「戲言云ちやア往けねへ出来ねエッて困まるぢやアねへか梅「金の抵當よ

此婦が来たんだが此婦を五十兩の抵當よ預ける積りだから此噂アを預ッて呉んねへ九「戲言云ちやア往かねへ、愚弄ぢや往けねへせ角海老の花魁を和郎に渡して五十兩よこすてエ約束を爲て置きあがら今よ成て出来ねへから乃公の噂アを金の代りよ受取て呉れろてエ事があるかエ餘り甜た事をするねへ、乃公が年を老てると思ッて馬鹿よするねへ梅「ナニ馬鹿よも何んよも爲やアしねへさか「戲談ぢやアねへヨ人を附け角海老の相馴と云ての大した花魁ぢやねへか、成程夫れ和郎の女房だから和郎の眼よ乙姫さまのやうよ奇麗よ見えるか知らねへが斯んを觀覧した内儀さんを代りよ出して宜いと思ッてるのかエ梅「思ッてるかッて此婦女よ五十兩の價格を附けた事が有るが和郎忘れたかエ丁度今年で九年已前信州沓掛宿の蔦屋の家で乃公が金エ二十兩持て往て何うか此金で負けて阿母よ渡して呉れど頼んでも和郎が此婦女よ五十兩の價格が有るから額を揃へろ五十兩の金を並べなけれア渡す事出来ねエッたアノ時のお恒てエ婦女だが縁有て今で乃公の噂アよ爲てエるんだが和郎忘れたかエ九「エ……オ、アノ……オイ婆アさん「あつねい頭髮の結び髪で水綿の着物は銘仙の藍の小辨慶の袴を引掛け風呂敷よ巻いた物を帯の間へ挟んで駕籠の中からスィツと立ち出て草三郎の顔を見ると嬉しいので胸が痞塞て口も利れずマッ泣きあがら椽側の處へ上るを見て梅「オ、あつね、和女よの濟まねへが手紙一本贈る事の出来ねへ

譯だてエ事の福田屋の親分から聞いたらうナ、つね「アイ、妾の今日清さんが来たんで段々
と清さんからも和郎の身の上を聞きまして能く何も角も解った、去年和郎さんが彼様
事を云てお出なすったからア、情けあい仁ぢやないか可愛い小供や妾のやうな親戚知己の
赤い女房を捨て殊に和郎を子のやうな力と思つてるお婆さんまで振り捨て、往くのの和郎
が云た通り他は馴染の女郎衆が出来たのかア、難面い亭主だと毎日、濟まぬいけれど和
郎を恨んで居たんだヨ、スルト跡で聞いて見ると眞實は勿体ない事を爲たつてお婆さんも吃驚して
さんが艱苦い思ひをしたのを恨んで居たの誠は濟まぬい事を爲たつてお婆さんも吃驚して
其の時から鹽梅が悪い、梅然うだつて……福田屋の親分が譯を咄いたらう、つね「ハ
イ、和郎が明光院さまへ這入てお金を窃取お役人さまを殺したてエ事だが阿兄さん、然ん
な事をする仁でないかい何んでも物の間違ひは相違有るまい何う云ふ譯か人違ひだらう、れ
よしても阿兄の何處も匿れて居るかと思つて附け寒い、附け朝夕共にお婆さんと妾と和郎
さんの噂の出ない事はない、夫れも重坊が阿父さんと呼んで来てお呉れ阿父さんをと云ふ
たんびよ妾の苦痛で泣いてばかり居ましたがお婆さんも譯が解つて氣を直し此頃、壯健
よなりましたヨ、梅「オイ清次道で譯を咄したか、清「エ、咄さうと思つても附が無つたが昇
夫が腹ア空たつて上野原で飯を食てる内、ナヨツと姉はんは耳打を爲やした、梅「脇差を持

第廿四回

て来たか、つね「脇差たつて別は無いから此刃を風呂敷に巻いて持て来ました

さか「アラマア何うも思ひ掛けねへ、成程然う云へば覺えてるヨ何うも見違へるやうに立
派なお内儀さんよおんなすつた子彼の時の未だ十七八だつたから見違へる譯だけれど今
の阿ノ和郎さんの梅「エ、小荷の噂ア……オイおつね金の抵當に出ろ、と云はれておつ
ねの權幕を變へ前へニチリ出しつね「サア爺さん婆さん此處へ出な、九「何んだ、つね、和
郎アノ能くも妾を欺騙して勾引し二人の昇夫も馴合ひで故意と慈愛らしく金を貸し妾を追
分の大黒屋へ娼妓を賣らうと爲た事を忘れたかエ、眞實は何うも阿母さんが遺言して阿兄
さんよ頼んで和郎等二人を九年以來探して居た義理ある阿父さんの仇敵だ、妾の婦女の事
ゆゑ弱いけれど一生懸命に死ぬまでも和郎等を斬り殺ろさなければ阿母さんの遺言は濟ま
ないから覺悟を爲ヨ、九「何んだ、爺棒何を、仇敵てエの何んだ、梅「往けねへ、和郎忘
れたか知らねへが丁度今年で十八年己前の事ヨ、エ、此水澤の踏違へで藤造てエ、鍋屋の
亭主を殺した事が有るだらう、其時のお坂姉への藤造の女房で未だ若へ盛りだもんだから
九平さんと私通いて見ると藤造が邪魔もある處から斬殺して新藤五國光の短刀を竊んだ事
を忘れやア爲めへナ、九「ウーン、梅「夫れ見ねへ此姉が其藤造の娘だ、其處で和郎も逢つた

四百八十四

事も有らうが溝呂木の幸吉でエ奴の妹さんだ、此婦の阿母が死ぬ時頼み又た幸吉が信州で名乗って出る時よも實父藤造の仇敵を是非此の妹よ討たして呉れ阿兄イ何うか此婦を和郎の噂アまでも妹よでもして助太刀を爲て呉れ頼まれウンと受け合つたのが乃公の因果だ夫れから和郎を探しておたの随分永かつたモウ斯うやッて出會したら仕方がねへ和郎だッてモウ死んでも惜しくも有るめへから此の阿魔女よ花を持たして首を渡した九馬鹿を云へ誰が首を渡す奴が有るものか梅然ん事事を云ても仕様がねへ……オ、逃げやうたッて逃げられるものか清阿兄大丈夫です清次が此處居やすから……オイ爺さん婆さん坂だから雪で驅け下る事い出来ねへ後ろの谷で出られねへから戯けず早く死よねへナ九「籠梯メ誰が死ぬ奴が有るものか梅おつね氣丈しろつね」ハイ、とおつねが引き抜きたま突然九平を眼掛けて斬り附ける流石の九平も驚いて身を變しおがら長刀を抜き掛るから梅吉が袂から短銃を取出して九平は差し向ける九平再び驚き九「コレは籠梯の險危へマア鐵砲を下し置け梅おつね早く斬ッちまへつね」アイ、とおつねの踏ん返んで斬り附けるが九平の鐵砲が怖いので斬り込む事が出来ません其隙にお坂婆の亭主を捨て逃げ掛る處を清次が胡摩羅交りの頭髪を捕まへ捻倒し清「此阿魔ア……ナニ大丈夫でと言ふ騒ぎよ驚ろきましたのハ籠形岩次郎で傍で斬合ひが始まりましたから驚いて早腰が

百八十五

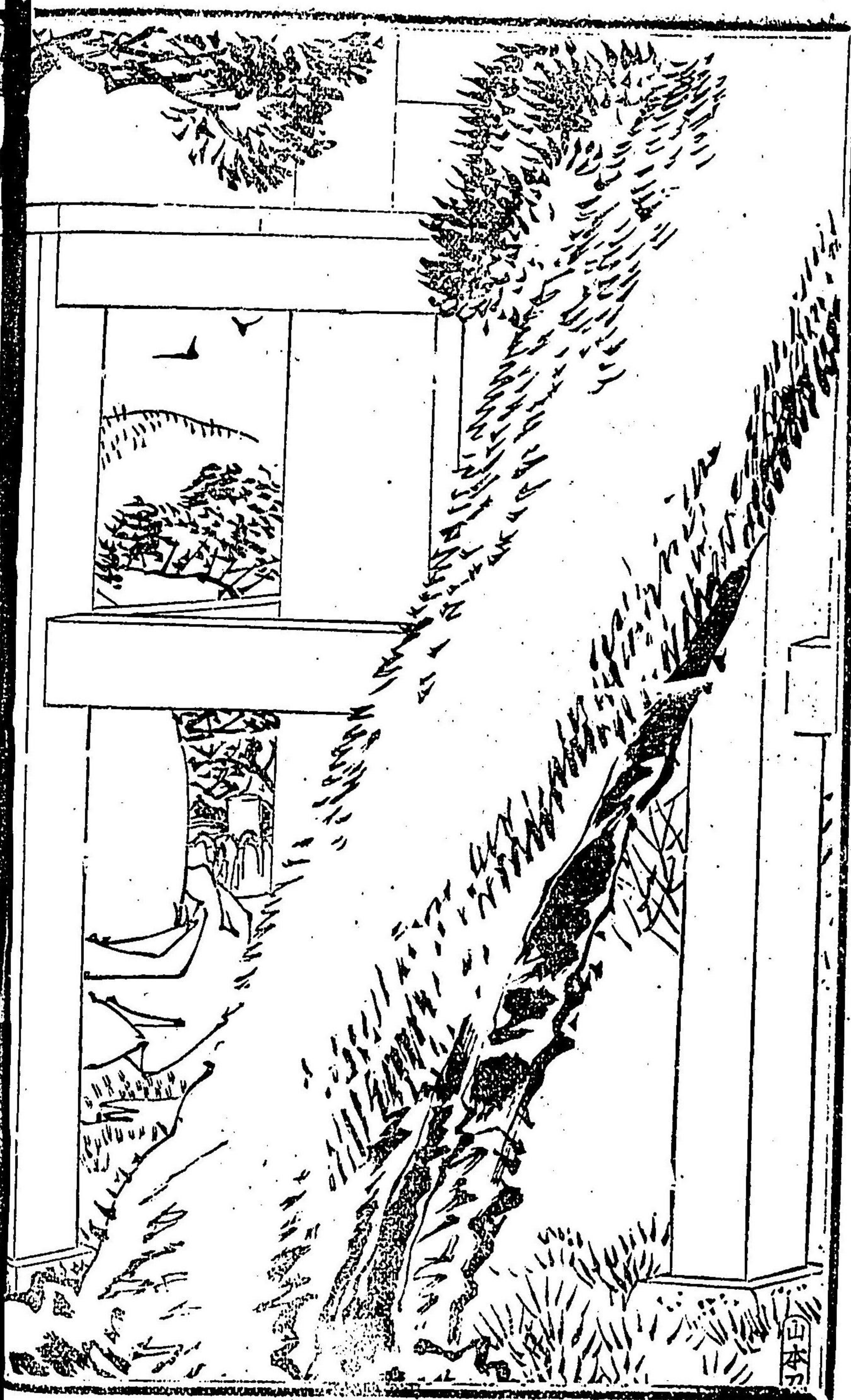
抜けてオドくして居ました八咫鳥の九平の今一生懸命で御座い升が何分にも前前飛道具を持って居るので進む事も逃げる事も出来ませんスル中九平の方少し隙がありましたから婦女ながらも一生懸命飛び込んで斬りました九平の受けやうとして受け損じ腕を斬られヒヨロ、踏んで居る裡へ片足を陥しドンと尻餅を搦くとおつねいあせッて踏み込む途端に越に躓つて後ろへ倒れたので九平が起上りおつねを目懸けて斬下さうと爲たから草三郎が鐵砲の弾金をパチンと引くとドンと一發九平の胸板を射抜いたので九平のウインと虚空を擡んで仰向し倒れる處へおつねの起上ッて踏込みつね「義父の仇敵思ひ知たか、と無茶苦茶よ上から只突くばかりで御座います、九平の身を震わしてウインと其儘相果てましたの天命で御座い升お坂の向うかして逃げやうとしても清次が押へ附けて逃しません處へおつねが参りつね「此婆ア能くも妾を欺かして娼妓よ賣らうとしたばかりでなく阿母さんよ敵儀を掛け義理ある阿父さんと言ふ者が有りながら密通をするのみならずよくも阿父さんを殺したナ、とトウ」お坂も仕留て仕舞ホツと思を吐く岩次郎の眞青もあり早腰を抜かし金屏風の處に坐つた切り逃げる事も何うすることも出来ませんでブルン一震へて居るを見て梅御心配なさるハ麻吃驚りあすッたらう、此奴等の實の小哥の噂アが年頃尋ねる仇敵ですから斬たんですが和郎さんよ決して御迷惑の掛けません併し山道で

六十八百

御難儀で御座エませうから清次と申すもの、坊の石坂の下まで送らして進げやせう旦那が
 得心で隠匿ッてお置きかざる程だから詫言することが早い、夫程御最良と思ふ旦那だから何處ま
 でも通ッて先刻も申ました通り辛抱して居らッしやれば花魁の屹度利郎さんの御新造も赤
 りますヨ……ちやア清次送ッて進げねへ清「エー小哥がお送り申やせう岩次郎さんてエ御
 仁サアお送り申やせう永く此處に居ると掛り合ひもありやすぜ岩「私しも然う言ふ事存
 じませんが何うかお引立ておすッて清「阿兄い腰が抜けたんだ此仁の……サア氣又りあさ
 「い岩「へエ〜清「マア湯でも一杯飲ッて氣又りあさいつね「若し和郎さま妾の此處も良
 「い氣附けを持って居升から此藥を召上れ、と云ふので岩次郎の藥を貰ひ之を服し稍く雪の中
 「を清次も送られて本坊へ歸りました草三郎の女房おつねを伴れ福田屋の親分の處へトッて
 「參る此方での先づ芽出度と酒肴を取て祝ッて居る處で梅「へエ只今源「オヤ、サア此方へ
 「お這入ンかさい先刻から待ッておましたので龍「サア梅、此方へ這入れ、今日の誠も何う
 「も大きき骨折で有た源七さんが乃公がよ禮を云ふてや云ふてや、何んどハア斯あマア有難
 「エ事ハ無エ迎も誰が待たッて彼所だど見約を附けても婦女ア引出す事ハ誰も出来ぬへ彼
 「事ハ梅さんで受け取れア出来ぬエッて悦ぶッたッてハア一晩泊ッて明日駕籠を仕立て通し駕
 「籠で江戸へ伴れてお歸んなさるてエから駕籠を言付けて置いたが源七さんが何か和郎よ禮

七十八百

を爲てエと云ふだから乃公が何よ心配しなさるあま云てるだアが……時ハ九平の野郎が居
 たッてノウ梅「エー彼奴等二人が匿れて居やうどの思ひやせんでしたか思ひ掛けなく二人
 が居たので急に噂アを呼びに遣ッて子……おつね此方へ這入れつね「親分誠もあ久う龍「
 オ、久敷逢のなかつたが能く来た、何うだつたつね「ハイ何うも今日と云ふ今日の斯ナ
 日本露れの爲た嬉しい事ハありません、兄いさんから道々聞きましたか夫れも是れも皆
 親分の丹精で實母の遺言が立ちまして誠も有難う御坐い升龍「梅の心配てエものハ一通
 りざやアねへ、主人を思ふのも宜いが大概もしろ汝身を仕舞たら何うするのだと毎度云
 ふだ、餘りハア旦那を思へ過て難儀イばかり爲てゐるだが夫程も旦那を思ふ位の眞實もの
 だ和女の斯う云ふ眞實の亭主も持て仕合せのやうだが一ツ處に居られねへやうを誤も成て
 懸然うだッて然う云てるだが何んでも和女の胤を成長して然うしてマア奥行の爺さま
 の跡を繼げるだ、ヨ一おつねさん姉妹で跡を氣丈やるだヨつね「ハイ妾の一生懸命も成て
 亭主の死んだ昔しと斷念め兄さん成り代ッてお婆さん孝行を盡します龍「梅、九平と
 婆アの死骸の何う爲て来た梅「夫れありよして来やしたか寒い時分だから狼が喰らまい
 ませう龍「然う喰ふだらうから放棄ッて骨も何も何處かへ脚へて持てくだらう知れた
 ち知れた時の事ハ悪い者が斬られたんだから幸ひだど悦ぶ位だ、八州さまの手も係らねへ



八百八十八

位くらゐの悪わるだから却かへって悦よろこぶ位くらゐの事ことは何なにも心しん配ぱいの無なへ誠まことな使つかい事ことの無なへからマア一杯いっぺい飲のみめ永ながく此こゝ處ところも居ゐられぬへ梅うめへエ實じつのおつねを乗のせて來きた昇かどや夫や阿あ兄にいかと云いわれた時ときもヤアギョット爲なした、ナニ子こ清せい次じが氣きが利きかねへんで途ち中ちゆうから昇かどや夫やを返かへせよ宜よろかつたんですが……彼あいつの昇かどや夫やが安やす中ちゆうに歸かへって饒しやう舌げらさけりやア宜よろいと思おもつてるんですが是こゝれも仕しかたがねへが何なにしろ噂うわさアの所ところ望のぞみも遂ついにに幸さい吉きちの遺い言ごんも立たちやして小ち哥やうのモウ心こゝろも残のこる事ことの有ありませんから直ただま八はち州しゆうさまへ名な乗りて出でて尋たづね常じょうにお繩なはを戴いだかうどの思おもひましたか夫おとこより一いっ層そう花はな々々敷しき八はち州しゆうさまの手て係からねへで江え戸このお町まちの手て係かりてエと思おもひやすが甘あまく匿かくれ終しまして江え戸こまで往いれ、バ宜よろいが……實じつの大おほ沼ぬまさまを殺ころしたの小ち哥やうでい無なへです龍りゆう夫おとこの宜よろいがモウ少すこし名な乗りて出でるの待まちちろ慌あわて、此こゝ方ちゆうから出でねへでも宜よろい、相あひの川かは又またの五ご郎らうのへ暇いまひあがら往いつて一つきも匿かくれて顔かほを見みせて遣やれ、汝われの眞まこと實じつも黙かわ然さうあ奴やつだ旦那だんなさまの爲ために罪つみを重かさねたんだから繩なはを掛かけて出でし度たぎも無なへだ乃おれ公きみも然さうだがあつね姉あねへの噂うわさを思おもたらうと思おもふからモウ少すこし待まちちろ汝われが方ちゆうから出でねへでも始はじめ終しまり知しれずニヤア居ゐねへ八はち州しゆうさまの手てだつてお町まちの手てだつて何なん方ちゆうでも江え戸こへお差さ立たてある身みの上うへだから、ナア喜き三さん喜きエー阿あ兄にいと一いっ緒しょに名な乗りて出でる約やく束そくですが此こゝ處ところ等らが宜よろい時とき節せつだから出で掛かけやせう、阿あ兄にいより小ち哥やうの一いっ歳さい二に歳さい年ねんが上あだからソロソロ出で掛かけやせう餘あまり命いのちを惜おしんでると氣きが利きかねへから龍りゆう夫おとこれも然さう

八百八十九

だナ……マア源げん七しちさん此こゝ橋はし名なの梅うめ吉きち始はじめめ皆みなあ子こ盜とう賊ぞくの肩かた書がきがあるんでがんすヨ源げんへエーお泥どろ棒ぼうさんで居ゐらッしやいますか龍りゆうへ、何なにもオの字じを付つけねへでも宜よろいが梅うめの主人しゆうじんの爲ために盜とう賊ぞくを爲なした男おとこで、堅かたくして十五年ごじゅうごねんも安やす中ちゆうに居ゐたが又また主人しゆうじんと遇あつて主人しゆうじんの爲ために惡わる事ことを働はたらけたので、何なんたる人ひと間まかと思おもつてるだ喜き三さんや清せい次じの野や郎らうの彼あれの太ほん統とうの盜とう賊ぞくで他人たにんの物ものを取とりやアがッて甘あまへ物ものを喰くたり何なんかするだアが梅うめの決けつして然さん事ことの無なへ野や郎らうだから懸か然ぜんうだ源げんへエー斯こんなマアの繩なは切きな仁にんかお泥どろ棒ぼうとい知しれあいもんですナ、泥どろ棒ぼうをする仁にんの何なんんだか大たい變へんに聞き達たつてるやうな仁にんかと思おもつてましたか然さうでも傍そば坐まいませんナ龍りゆうナニ行い儀ぎも作さ法ぽうも義ぎ理りも人ひと情じやうも辨わへてるんだが料りやう來らいでがんす子こ併し決けつしてお掛かけよの爲ためやせんヨ源げん「就つきまして親おや分ぶん先せん程ほどもやました運とらり私わたくしの角かく海かい老らうの且また那なから戴いだいて参まゐりました内うちを梅うめさんとか仰おつしやる傍そば仁にんよ何なんうか龍りゆう梅うめ、源げん七しちさんが和わ郎らうと頼たのだ見み介けも成なつて濟すまねへから三十さんじゅう兩りゆう實じつッて來きた内うち十じゅう兩りゆうの前後ぜんごの跡あと用ように要いるから汝われがよ二十にじゅう兩りゆう遣やりてへッて何なん程ほど止とめさせても肯きかぬへだ梅うめへエ思おも召めの証あかしも有あり傍そば坐まへやすが錢ぜに金かねを貰もらつても明日あしたも用ようと聲こゑが掛かれバ繩なはを掛かつて引ひかれる身みの上うへゆゑ義ぎ理りも絲いと瓜うりもありやせん、小ち哥やうの福ふく田た屋やの親おや分ぶんよの二度にども命いのちを助たすけられ大たい恩おんのある親おや同どう様やうの仁ひとの頼たのみゆゑ致いたしやしたので和わ郎らうさんから三さん文ぶんでも禮らいを受ければ懸かんぞ嵌はまッて人ひとを殺ころしたやうで宜よろく有ありやせん

第二十五回

源へエー感心な仁さまで御座い升ナ、宜しう御座い升へエ私しの線香を一駄買ッて歸ります、と源七の悦び別れを告る中、岩次郎を本坊へ送り届けて清次も歸ッて来ましたから三人一緒は大戸から信州相の川又五郎親分の處へ暇乞ひを参りました、おつねの福田屋の親分は送られて安中へ歸る、相馴の方も事が納まりました是が三月で三月から四五六七八と六ヶ月間梅吉三郎清次の三人の信州の相の川は居りましたスルト相の川の附で草三郎を尋ねよ来た親子仲れの者が安中へ往たと云ふ事を聞きましたが迎も逢へる時節でありまいどの思ひながらヒヨツとして實の母が壯健で尋ねて来たのでないかと孝心の草三郎ゆゑ設令ひる纏ふ掛るまでも一目逢て旦那さまの爲めは土浦の牢を破つた事を物語ッて死に度と云ふ心があるから夜越しに出で間道を抜けて小笹道へ掛ッて来ましたが山道の少し風が出ますとブーツと煙のやうな雨が顔へ掛ります其中は段々強く成ッてボツリ〜と大粒もありザア〜と降て来たから三人とも驚いて大樹の本へ這入り雨止みをして居り升る、行装が旅商人風で半合羽を着たり廻し合羽を着て深い三度笠で鯛鱒を一本づ、打ち込んで居升が旅慣れた溫和やかな行装で御座い升、世間を忍ます身の上だから人が来てもヒヨツとして八州の手配りでも爲て有るんでいあいかと憶するの當然赤事でスルトゴツ〜と音

がして尾花が動きまますから三人あがらハテナと思ッてる所へゴツ〜と出て来た二人の人の行装の袖のヘギ〜の筒袖を着て山袴と云ふタツツケのやうなものを穿き八千草で編んだ山崎頭巾を冠り手造の草鞋を穿き腰よ大きき囊を下げ脊中よ大きき赤籠を背負ひ其の中よ小さい鎌が這入ッて居升是ハヤシヤ附子の實を探りに往きました者で二人がゴツ〜出て来ると大樹の所よ三人居るので平常人の通らぬ所ゆゑ二人は吃驚り致しました梅、エー土地の御仁ですか、是から信州の番掛までの餘程有り升か子、退分へ近く出るよの儘か番掛へ出ると思ひましたか、輕井澤の方が近う御座い升か子、男、左様で御座りやす是からマア二里半ベエ出れば少し道イ悪いで御座りやすが番掛の方へ出た方が宜う御座りやす梅、其方が大方近いと思ひましたか、夫ハ有難う御座りました……大層降て来ました子、小哥其の道を間違へて頼だ所へ踏ん込んで仕舞ひ何方へ往たら道が有かと辯悶でる所へ雨が降て来たので斯所よ立てるので、喜、貴公一服戴き度が其方の御仁火か有るから貸して下せへあ、モツト此方へお寄んなせへ雨甲が掛ると火が消えるから乙、ヒエイ〜、此所の滅多よ人の来ねへ所だが何うして此所へ入這て御座らッしやツた、言葉の容子でハ江戸の御仁のやうだが珍らしい事で、甲、尊公方の此雨でハ番掛までの出られぬへが小哥が宅の直だが少し小哥の宅で雨止みをあすッたら何うで御座りやす梅、然う願へば誠に有難へナア……と暫

らくコソく咄をして梅吉が懐へ手を突込んで二朱の金を取出し(其頃の二朱の大したもので)紙に包み二人の男に向ひ梅「此金の誠少しばかりだがお二人で一杯お飲んさすッとお呉んさせへ甲「ヒエー是の何うも何とも何うもヒエー恐れ入ります梅「イエ何うもホンの心ばかりで御座へやす雨が降って往き所の無へ所を乃公の宅で休んで往くと仰しやツて下さるのハ地獄で佛てエのハ此事で斯亦有難へ事の御座へやせん何のあくとも搦飯丈けの持つて来やしたから辨當を喫へてエので甲「和郎の宅の遠いから小荷の所へお伴れ申やせう乙「夫れぢやア嘉兵衛どん貴公の所へ願へやして小荷の此所でお別れは爲やす、と一人の横道へ曲つて往て仕舞ふ跡は残つた一人の男の年齢四十三四もありませんや山家よ似氣あき人品の良い男で籠を背負て男「サア参りやせう、と先へ立ちましたから三人の跡から従いて澤を渡り段々来ますと一軒葺葺家根の宅があり庇の所は石が乗つて居り大きな居城裏の上は煤竹自在が下り籠籠が掛つて居ます爐の傍は年頃三十八九もある内儀さんが頻りと焚火を爲て居ります男「今歸つた女「オヤお歸りか、今日の歸りが遅くあらうかと思つてたが宜く早く歸つて居坐らつしやつた男「ウム……斯を破壊れてる汚ねへ宅でホンの雨露を凌ぐ丈けで居坐りやすが何うぞお上んをせへやし梅「免れさせへ喜「免れさせへ清「免れねへ梅「頼だ厄介を願へやした女「コレのお客さまで居坐らつしやりやすか、

梅「お休みなさりやして男「斯所何んともハア仕様がねへ、何も進げる物も無へがマアお茶でも進げるが宜エ……大層降て来やしたナ此雨は中々止みまじねへ小荷どもハア日和イ能く見て居りやすが此何うも淺間山を雲が巻た時よやア屹度降るだ中々休みまじねへ梅「ソイツは困つたナ……誠中兼たが今夜一晚當家へお泊めあすつて下さる譯はア参りやすめへか小荷等の旅商人で決して怪訝の者で有りやせんが、尤も多分のお禮は出来やせんが何うか一つお願へや度へ……此金のホンの心ばかりで居坐へやすがお内儀さんへ女「ヒエー然んさ汚心配をなさりやして恐れ入りやすが……阿父さん何爲やう男「折角下すつたもんだから戴け、ナ……ヒエー何一つ進げるものも居坐りやしねへヒエー女「餅でも焼いて進げませうかよ男「夫れが宜からうか、夫れから飯まア早く焚いて宜いか稗みどが這入と喫り難いから何んでも米の飯を焚いて進げる、モウ少し早エと菌飯が宜いんだが、と艶辭を並べて居る内は汚飯が出来ましたが醬油が臭くつて喰られせん、けれども夫婦の待遇で此家は泊る事なりました居座裡の向ふ夫婦、此方より三人が坐り梅「眞實よ今日の問道へ這入つちまつて雨が降つて来て何う爲やうかと思つてた所だが和郎さんが通らねへど道は分らず困つちまつたんだが誠有難う汚坐へやした男「何う致しやして只今の又た多分のお金を下さりやして何んとも恐れ入りやす江戸は生れた仁さ

さてエもの、の伶俐で智慧が有るだから銭も儲かるだらうが斯な汚ない家へ泊るよやア二百も旅籠を出せば二つ返詞で泊めるものを二朱の一分のてエ金を無闇に惜気もなくお出しさざりやすてエもの、是の何うも江戸へ生れた浮仁の金を儲けるが上手かれども江戸の銀の儲かる所か斯う云ふ所へ居る者の容易に儲ける事の出來やせん又要川も爲ねへが子梅、其代り世間知らずで氣樂でせう子男、イエ矢張世帯も遅れて何よもても儲からねへから間でも有れば椰子の質でも探て來たり寒くなれば鐵砲を擔いで、獸を射ちに出なればアあらねへ詰らねへ身の上で浮坐りやす梅、和郎さんの所地の仁ですか、男、イエ小哥共此地の者での有りやせん噂の福島の者で小哥も福島屋、奉公を爲たもので松浦さまの由家來藤沼さままでエお屋敷に奉公してエたので梅「ム……ッ」藤沼さままでエの浮遊去よ成て子息の圖太郎さんとか云ふ仁が當主よおなんすつたのでせう男「へエ、旦那さま能く存じてハテマア悪い事の出來ねへもんだ……ムウン何うして存じて居坐らつしやる……詰らねへもんだが何うか喫って下せへやし、何うして旦那存じて梅、何よ、旦那殿、いた丈けで男「只今も馬鹿と伶俐との違ふてエ事を云ひやしたが其圖太郎さままでエ仁の非凡仁さままで一度今年で八年か九年もありやすが實に魂消て何ともハア云ひやうねへで居坐へやす其姉さまを藤沼さまと云て、城中で標致の宜い評判で有たが、殿へ奉公よ上ッ

て殿さまが一度手をお付けよあると殿さまの榎妻よお松てエ奴が有て此奴焼餅たつて焼餅たつて何んでもハア殿さまがお女中達の尻を撫るとか肩を押すどかなさると直に榎妻が其女の鬢の毛を取て引倒したり鼻を捻ッたりするやう亦然う云焼餅だからお藤さまを焼け火箸で突ッ殺したアだ、えッ、ムルト何うもッ、阿母さまの口惜がりやうてエもの、ハ一通りぢやアねへ、殿さまから氣の毒だつて埋葬料を下すつたけれども何んだつて和郎さん十七八よある娘を焼火箸で突殺されたのだから新造さま泣いてはッかり居らッしやり私も殘念な事だと思ッてる内よ月日が経過と圖太郎さままでエ若さまが十二の時での坐りやすア、口惜い姉さまの仇敵を討ち度か權妻を殺して、藤沼の家が潰れる何うか家の潰れやいやすと工夫をして大事の道具を壊して故意と阿母さんよ不孝な事を云て勘當され、若公しておた莊助てエもの、所へ往て何んでも榎夫よありてエツて、勘當の届けとさせて若さまの鐵炮を覺えてトウ、ハ殿へ忍び込んでお松を鐵炮で銃殺したハ十二の時での坐りやす梅「成程然る咄を聞いた事が有りましたヨ、男「ムルト尊公其莊助てエものが魂消て是の放棄ッちやア置ねへ、乃公が代りよ名乗て出れば仔細の無へと名乗て出やうとする恒川さままでエ其若さまの伯父さまよ當る仁が有るてや梅「ム、男「ソノ仁さまハ劍術が上手立派お外生と云はれる身の上で有るからうれハ圖太郎前が名乗て出て詰らん咄

六十九百

だ乃公の親兄弟も主人もないから乃公が代つて出るから手前跡も残つて阿母さまも孝行して主人も忠義を盡せ殿の害もある婦女を銃殺したのだから却つて殿さまの忠義だ乃公が代つて名乗て出ると英邁旦那さまで方々へ恒川が銃殺したといふ張札をして逃げたから跡を追驅ると何う云ふ譯だか何んどか云たッけナ女溝呂木の幸吉でエ男さうく溝呂木の幸吉とか云ふ泥棒が濱浦の權妻を殺したつて名乗て出たので其者が汚所刑に成て事濟み成たんだけれども小共の由来を知てるんだがハテナ主家の坊ちやまが殺したのと恒川さまが名乗て出ると云たのが泥棒が名乗て出て何う云ふ譯かチツとも解らねへがお役人も得心でとうく汚處刑に成ちまつたが智慧のある仁の違ふ者で千村喜又てエお役人の計へで恒川さまを出しても圖太郎さまを出しても往けねへから役も立たねへ泥棒を罪に陥せし宜い何うせ彼の權妻の死ぬ方が殿様も悦ぶと云て然う計らつて仕舞つたと後日で知れたが其權妻の阿父さんの家老役だつたが其者が死ぬと殿様が其事を聞いて圖太郎の非凡ものだ姉の仇敵を討ちてへと云ふ志の魂消たものだつては加増に成て圖太郎さまが藤沼圖平さまの家督を継ぎ今で立派に成て居らつしやります梅へエー然ですかムー男夫婦は引替へ氣の毒さの越中屋のお綱さんエ娘さんが恒川さまの娘造に成てたアだが恒川さまが權妻を殺して逃げたつてエのお綱さんが氣が狂つちまい旦那さまの何んで

七十九百

も上方へ往たよ違へねへつて夫ればかり云てると此節名高へ一心行者さまが汚獄さまの尻りも汚所禱をする段々氣狂が鎮靜いたてエの一心行者さまが方便で恒川の疾も死んで仕舞たから訪ひ吊ひをするが却つて亭主の爲になると云たので氣が落着き生涯婦婦を立てるつて親子で居るだ、お嶽講の彼家へ泊るので大層お繁昌サ梅へエー然うですか男、これから氣の毒さの尋ねて来た親子伴の巡禮が恒川半三郎さまの家來の親だつて何んだか知れねへけれどもハア五十八九もあるか子婆さんと二十一二にある標致の宜い娘と二人で尋ねて来て恒川さまの家來の草三郎でエものが居りやすかてエから知んねへと云ふと折角尋ねて来たよ草三郎の行衛が知んねへかつて泣へてたヨ梅「うんなら母と妹と……ナニ然うですかエ、ヘエー巡禮の姿に成て其者が何所へ往きました男、那處だつて、何んとか云たッけ……ウッ然うか、作次郎でエ安中の馬丁が来て草三郎の十五年も安中で饅頭屋をしてゐて律義ものと譽めとやされてたが何う云ふ譯だか明光院でエお寺さまへ盗賊よ這入て金エ三百兩竊んで八州さまを殺して逃げたのでお尋ねものよ成てるが乃公の草三郎兄いよのお侍に斬られる所を助けられた恩が有るから和女ほどの標致が有れば何所へでも世話アして片付けて遣るから一緒は往くが宜エ幸ひ馬が有るからつて年を老た阿母を馬に乗せて若エ婦女を伴れて往きやしたが欺騙事でも無へやうだ眞よ草三郎でエ仁の恩も感じて

伴れ立て往たやうでがんした梅、ウー作次郎が……思ひ掛けなく斯う云ふ所に汗ッたあア、
 梅「喜三、願へが屈いたんだア、何うか一目阿母は逢ひてへと思ふが此事を聞いてちやア
 片時も此所居るの思だ少しも早く安中へ往きてへあア喜往きてへエツて兄イ迂潤り
 往けねへちやアねへか梅「設命お繩は掛り引れて安中を通つても往來中でありと立てる所
 を一目見て死に度へ喜「夜夜中然んる事を云ても仕様がねへから寐やうちやアねへか、と
 コソ〜小聲で咄を爲あがら床は就きましたたが草三郎の中々寐られせん其内夜が明けま
 したから多分の手當を爲て此家を立出でると下り道ゆる樂ですが丁度背掛宿の長倉八幡と
 云ふコンモリ樹木の繁茂た處にお堂が有りませす其處の前を通つて往くと左右一杯の尾花原
 で坐い升秋の末よの野の花の景色の宜敷う坐い升の身丈を越します桔梗女郎花杯が
 咲いて居ます、ア〜と少し朔明るくありましたたが霧が深く下りましたので一寸先の見分り
 ません何んでも八州へ廻遊ていならんと憶しあがらも他は道があいから據なく此道へ出
 て参りました梅「何うかして安中へ踏込んで一目阿母は過てから名乗て出やうと思ふが何
 うか工夫して呼び出して貰つて何んか森の中でも一寸咄を爲てへのだ喜「中々逢へねへよ
 逢ふまでが往けねへ、と云て居るとナンリン〜と云ふ鈴の音が致しましたたが新田屋さん

が……のちやア有りませせん、其頃だから木曾の嶽参りの歸りで昨夜の沓掛へ泊つた早立
 ちの旅人で菅の妻折笠の前の山形よ一心と云ふ字が印て居ります妻折の方の大槻東京の講
 中で少し華美で田舎の方の雪卸しよ成て居ます、衣服の行装の白の汚れた行衣で段々白
 のが赤み走つて居升のは砂や何かで汚れるから襦袢よいお命印と云て黒や朱で種々の印
 を襦袢よ押し貰ひませす此印を澤山押し有るのが自慢で乃公のお山を十三度したとか
 二十三度したとか云て見得よ汚れた襦袢を着ます其上へ白い襷を掛けて端折を高く取り白
 の帯を締め白の半股引よ白の脚半甲掛で金剛杖をついて居り升度々参ります仁の古いのを
 ついて居ますが新規は往たものはアラ、ギの金剛杖を戴きお山へ残らず罪を置いて來たと
 宜い心持さうに勇ましく歸つて参り升、行者が先へ立ちまして跡から請中が三人ばかり参
 る其跡から宰領が兩掛を擔いでギン〜遣て参りました喜「オ、御嶽の歸りだ梅「乃公ア
 御嶽見ると、悪い事をして御嶽山の地を踏んで罪を消して來たとか悪い事を爲たの
 を懺悔し身が軽く成てサバ〜したと悦ぶ事を聞いてるが乃公ア悪い事をして〜
 して〜匿し終せて良い子の顔アしてへるのが面目ねへナ喜「然うよなア梅「ア、御嶽請
 の衣服を借りて往きやア知れねへナ清「然うヨ是れ知れねへが御嶽請の突いた金剛杖で癩
 の胸を突くと癩が癒るとか御嶽請の穿いた草鞋を頭へ乗せると癩が癒るとか狐が落ちる

云ふ位だから盗賊の乃公等が御嶽講の着物を着れば身体が利かなくなつて歩行けなく
 ちやア大變だぜ梅「身体が利かなくなつて歩行けなく知らねへけれど只マ一目實母逢ひ度へと
 云ふ其廉で神も免して逢はして呉れぬへものでもねへから勿体ねへ願へだが三人の有金と
 着物を先方へ遣て頼んで見やうぢやアねへか喜「ナニ遣らなくつても宜い若しグズく云
 やア強奪ても宜い梅「夫の悪ぢやアねへか神さまの印の据つてるものを然んる事をする
 夫れこそ身体が曲つて仕舞はア喜「逢へねへ梅「喜三汝へ往て頼め、と云てる内々チン
 ンくと段々近く成て参りましたからツカ〜と油煙みの茂みから出たから御嶽講の
 人々が驚きました雷が深くつて先が解りません鼻の先へ三人出ましたから先達「何んだ
 梅「無ぞお驚きで坐へませう講中「ア、一驚いた俺の此處で二度驚きやした往きよ
 の馬が首を出して驚かされたが和郎さん等の何んです梅「私共は何を隠しませう三人が
 ら窃盗で座へやす講中「何んですとへ私共の山をして路用の皆を使ひ果して仕舞
 ひ只行衣ばかりで着替が一枚有る切りですから何うぞ免あすつて梅「へ、イエナニ
 追刺に出たので有りやせん私共の今も知れねへ身の上では用とお役人の聲が掛つて十
 手の光りを見ればお繩掛らあけりやアなりやせんが只マ一人阿母が有りやして二十年此
 方逢ひません處ろ思ひ掛なく安中宿へ尋ねて往たてエ事を聞きやしたから一目逢て死度

と斯う思ふんですが三人あがらお尋ね者ゆゑ迎も安中へは踏み込まれねへんですが御嶽講
 の行衣で参ればよもや盗賊が行衣を着て居やうと思ふゆへから役人が迂濶りしてエる處
 で阿母又逢て直に名乗て出るんで座へやすが名乗て出る時又拜借した行衣の残らず風呂
 敷へ包んで御嶽講のお泊の高崎の大黒屋でなけれア山田屋でエ事の大黒屋知て居りやすから
 行衣丈けの儘かよ山田屋までお返し申升が夫まで何うか誠よ勿体至極も無へ譯で座へや
 すが行衣をお貸しあすつて下せへ、小哥共が御嶽講の行装を爲て参れば役人が迂濶り爲や
 うかと思ひ升就きましての此處は澤山の座へやせんが二十兩金を差上げますが何うか私
 共の此着物と取替て頂戴エ致してへものですが願はれませうか講中「へエー、へエー……
 彌兵衛さん宜う座い升か乙「私しの腰が立ちませんで立つも引くも何うする事も出来ま
 せん只マ斯うやツた切りで丙「折角のお頼みですが尊公方の存じない事だが幾度もお山
 をしめければ行衣のお金印を戴く事の中々容易なものぢやアありませんから之を進げる譯
 ない参りません勿体あう座い升ヨ罰が中つたら何うなさいませ梅「エー罰の中事承
 知で座へやすが僅かの問だから何うか願へ度もので甲「行者さんよの濟みませんが何う
 爲ませう行者「エー貸して進げろ〜幾度も入用を掛けて戴く大事を行衣を替てる
 此上なく誰も借がる事だが悪い事をする内は誠がある親目に逢て名乗て出度いと云ふ

今の言葉も少しも虚言のさい言葉も曇りがなく真に名乗て出る事を私に見抜いて居るから同行の人願んで貸ませう……久し振で逢ましたナ梅「へエー誰公さまですか行者」十六年己前の八月千住の大橋で和郎が役人を取り巻れ仕様が無く私に飛び込んで向島の石屋の岸木から逃がして遣た事が有たが私を忘れたかエ梅「コレハ……彼の時の一心行者さまで行者」魚平「どん夫れアノ時の魚平」へエ成程……夫れさやア追剥などをすると肯ませんぞ和郎未だ盗賊を爲てゐるのか眞實は怖ねへ仁だ……アノ時又行者さまが改心しおければ親も逢へぬへが謹慎くすれば十五年経過ば親も逢へるよ仰しやツたが丁度十六年目で梅「へエー實は行者さまどの生神牛佛で阿母も逢ひさへ致し升れば直に尋常は名乗て出ます 甲「仕方がある人の通らぬへ中よ早く着換あせへ」と皆行衣を脱いで渡すから梅吉始め二人も悦び之を着換へました乙「大變だ不行衣を遣て和郎の着物を俺が着るのか 梅「誠は有り難う御座いましたと笠を冠り行衣を着て襷を掛け端折を高く取り金剛杖を突き梅「是れでの役人が見ても盗賊との氣が附くめへ……お蔭さまで有難う御座いました久振でお目も掛つて……魚平さんの眞實の御嶽講もありましたらう 魚平「和郎方の着物を着たから俺どもい盗賊も成て仕舞た眞實も戯申じやア有りませんヨ 梅「明日も名乗て出る身の上ゆゑ行者さまの念佛を戴きますれば三人ながら成佛得脱致し升行者」アイ念佛は唱へて進

せるから立派に名乗て出なさい梅「へエー有難う御座い升」借榛名の梅吉實の安中草三郎の喜三郎清次を同伴て相の川より大笹道を越ます時又山人の家泊り圖らずも實の母親が妹を同伴て安中へ立ち越えたと云ふ事を聞きまして草三郎が何うか安中へ往き母も巡り逢て已れの慾の爲め又賊を働いた事でもなく主人の身代りもした事を母も聞してから名乗り出度い心得で御座い升がお尋ねもの、身の上で殊に政府のお役人が鐵砲で彈殺されたので嚴しい調べもあり出口へ充分の手配りが届いて居ますから逆も容易に往かれんと思つて居ます所へ前申上げました通り一心行者の講中が参りましたので此行衣を借りて姿を變へ横道へ切れました上州信州掛けまして高崎から先の御嶽講と云ふと其頃の大して有難がりましたもので御嶽へ往つて来た仁を御嶽山くくと云ひまして神さまのやうに取扱ひます尤も往復りとも精進で宿へ着きますと先づ水行を致しまして講中が大勢揃つて拜みを唱げられから御膳を喰べます朝の起きると先づ水行を致しましてまた拜みを唱て食を致して立ちます、御嶽の戻りよお山から突ひて来た金剛杖で癩の起つた婦女さどの胸の所を押すと立ち所よ全快ります又お三の池で紙を浸して乾し揚げたのを水の中へ入れまして之れを戴くとお三の池の水を戴くも同じ事だと云ふので之を飲むと忽ち瘧疾が落ちると云ふ位のものゆゑ御嶽歸りのものを御嶽山くくと云て御嶽山大権現の如く参詣したものを大事

よ致しませす又た御嶽講が通りませすので信州の潤澤ますから誠は皆神さまのやうと思つて居
 ます、盗賊が御嶽講の行衣を着る氣遣ひのさい御嶽講の着た行衣を借りると狐附が落ると
 云ふ位ゆゑ悪人の身へ行衣を纏へば不動の金縛りで動く事が出来ないと云ふ位は仁が存じ
 て居ませす其行衣を草三郎が着て白い襷は白の半股引脚半甲掛草鞋穿きで金剛杖を突ひて鈴
 を首へ掛けてナンリン〜と三人同伴で碓氷の根方まで掛りませした草喜三ア何うも碓
 氷の越せねへ何う考へても餘程迂回りよあるけれど跡へ歸つて原中の野地を突切つて和
 見峠から初戸谷越を爲なければならぬ喜然うよノ碓氷から往つちやア危険へから仕方
 がねへ初戸谷を突越さうとは是から初戸谷峠は掛りませした彼の邊の原で坐いませして所々
 ノ野地が坐いませす土かと思つて足を踏み込むとズブ〜と五六尺も這入るやうな深い處
 が在りませす其間を金剛杖を突き立て〜稍々の事で初戸谷から根小谷村へ出て來て根小谷
 から元宿へ出ませして元宿をば下つて尾坂から菅原と云ふ所へ出ませして是から妙義山の根方
 よか、り妙義山を越して奥灘村から八廣村二間在家と段々下碓邊村へ下つて參りませした
 只今でい彼地へ温泉場が出来ませして大分繁昌致し道路も廣がって居ませす其頃ノ未だ開け
 ませせん下碓邊へ掛つて來ませした山から霧が吹き出してポツリ〜と車が落ちませして眞暗
 に成て來ませした喜晴るかも知れねへが兄イ何も少し氷破れの方だノウ草喜ナニ却つて曇
 々てる方が歩行くよア仕末が宜いカン〜日が照つてると何んだか何うも衆人よ見られ
 るやうな心持がして往けねへが曇つてれば人も通らねへからてうど宜いが今は降つて來るだ
 うらヨ喜喜ナニ大した降も有るめへ山霧だから暫時も晴れるだらう草安中まで出越して
 馬丁の作の所まで行きやア解るんだと話を爲るが下碓邊へ這入るとコンモリとした繁茂
 ノ赤い鳥井が有り升から草三郎の斯う云ふ繁茂ノ手配りが有て役人を忍ばせヒヨツとして
 張り込みが附いて居やアしないかと怖々ながら差覗くと森の中は槻造りの朱塗りの堂があ
 り升

第二十七回

此の朱塗の堂の村方の鎮守で諏訪明神の社で御座い升龍ノ立浪の彫物の極彩色で有り升堂
 の前ノ石の手洗鉢が有りませして此方よ苦むした石燈籠が三四基並列つて立て居ませす人も居
 ない容子で座の升から生垣づたへ普門寺の門前をナメレよ七八丁下りませすと碓氷川で
 其頃よ丸木橋が掛つて居ませた之れを渡つてつ先上りよ雜木山を二丁半ばかり參り升
 ると原市の手前の松並樹の所へ出ませす三人とも疵持つ脛で何うも自分の首よ掛けて居る鈴
 の音よも心をいたため實よす、きの穂よも憶する身の上で御座い升から人蔭が見ませすと後
 へ身木を退げて容子を見ませすスルト向ふから年齢廿歳の上を一歳も越したかと思ふ婦女が

此の朱塗の堂の村方の鎮守で諏訪明神の社で御座い升龍ノ立浪の彫物の極彩色で有り升堂
 の前ノ石の手洗鉢が有りませして此方よ苦むした石燈籠が三四基並列つて立て居ませす人も居
 ない容子で座の升から生垣づたへ普門寺の門前をナメレよ七八丁下りませすと碓氷川で
 其頃よ丸木橋が掛つて居ませた之れを渡つてつ先上りよ雜木山を二丁半ばかり參り升
 ると原市の手前の松並樹の所へ出ませす三人とも疵持つ脛で何うも自分の首よ掛けて居る鈴
 の音よも心をいたため實よす、きの穂よも憶する身の上で御座い升から人蔭が見ませすと後
 へ身木を退げて容子を見ませすスルト向ふから年齢廿歳の上を一歳も越したかと思ふ婦女が

結び髪は黄楊の三日月形の櫛を挿して粗末を簪しを挿してチヨツと根を留め單物の上よ半
 天を引ッ掛け締め古るした腹合せの帯を締め前齒のかけた下駄を穿き小包を提た婦女が
 ツカ〜と急いで草三郎の側へ参り袂を引女「モシ〜」草「ア、一吃驚りした女「尊
 公等の御嶽山での御座いませんか草「エー……小哥等の嶽山へ参詣して今妙義山へ参ッ
 て是れから安中の方へ出るもので参座へやす女「夫の誠は宜い處で参目に懸りました妾ど
 もの母が永らくの病氣で坐いましては近所のお仁も種々仰しやッて下さいますからお
 醫者さまを願ひまして診て戴きましたたが全癒りませんで何うもキャ〜差込みが参座い升
 年を老ての煩ひで誠は心配でございますから妾の信心をいたして居りますすが嶽山の金剛
 杖で胸を押して戴きましたりお三の池の参符を戴きますと瘡の根が切れると聞いて居りま
 す誠は恐入りますけれども妾ども此の坂を上ッて少し跡の方へお戻り遊ばすとちきで参
 坐い升が何うか功徳は三の池の参符を戴かして参加持を願ひ度もので坐い升が願は
 れませうか草「アイ……エオイ何うだ喜三「喜「参符を戴きてエたッて……参符の往かね
 へ夫はお加持だッて……此事のチヨイと困ッた子……誠は折角のお頼みだが講中が先へ出
 越して待ッておやす小哥等の此方へ廻ッて妙義へ参詣したもんだから大き遅くおッたの
 で急いで追分の大黒屋まで往かねければならぬへ同伴が待て居りやすから誠に何うも折角

のお頼みだが此所でソノお別を申すやうな事はナア清「エー何うもねへ同伴が待てやすの
 で講中が大勢安中へ出越して宰領も荷を擔いで先へ往ッて居りやすからお氣の毒だがお加
 持の所へ今後通ッた時又女「今後と申す来年でなければ参詣の有り升まいが何うかお
 助け遊ばして嶽山の参行装で只病人の枕元へ坐ッて下さればお加持をして下さいません
 でも母の安心致しまして嶽山が光來たと云ふので大き力付て全快致す事も座いま
 せう何れも参座いませんが湯漬け位ぬの進げますが入らしッて下さいませんか草「エ
 ーそれぢやア往うと此所で往かぬと云ッたら悟られやアしあいかと憶する氣が有り升か
 ら仕方なく草「姉さん同道に往まじやうがマア和女先へ立ッてお往で女「ハイ有難う存じ
 ます有難う存じますお影さまで助かります此所で尊公等もお目も掛りましたのモ矢張り日
 頃信心する嶽山の利益益で座いませう草「エー夫の信心さへすれば必らず利益の座
 座へやすから子……喜三「清次「喜「エー草「心配するナ乃公が相年又成ッた妙義無宿
 の白藏てエ野郎の此妙義山の山妙院といふ法印の子で法印でエもの何うするものか聞
 いたら妙手附きを爲て参神言を云ッて因を結ぶ事を白藏がして口授を断る法をして見せ
 たが乃公の未だ年の若ねへ時分だから確平り覺えて居ねへければ形ち丈けり些どばかり
 覺えてるが法印の法衣の袖の中で因を結ぶてエから何うか胡摩化して宜い加減に袖の中で

遣れば知れやアしめへ……女「サア何うぞ此方へ参往おすつて下さいまし草」エー其方で
 すかど是れから娘は同伴られて三人が坂を上つて横手は這入ると補陀落山普門寺の門前で
 前が生垣は成つて後ろの少しばかりの桑畠があります寺の森の側の萱葎家根の小さい家
 で汚座います娘の傍の棚井戸から盥へ水を汲んで参りまして女「サア御足をお洗ひ遊べし
 ませお草鞋を脱りませうか草」姉さん然う心配して下せへますナ誠は頼だ汚厄介で女「何
 う致しまして……阿母さん阿母さんアノ途中で御嶽山は御目懸つて宜い鹽梅はお加持を
 爲て戴くやう願つてお伴れ申たからお悦びヨ母「オヤマア夫の何うも思ひ掛けない事で
 誠は何うも有難う存じます夫も皆お和女が信心を爲たお蔭で御嶽山のお歸りの御仁にお目
 に掛つたのだヨ……マア何うも勿体ない事でサア何うぞお急ぎで御座いませうが何うか此
 方へお上り遊ばして下さいまし早くお茶でも進みサア何うぞ此方へ女「誠は汚穢らしい御
 座い升床が展りつ放しよ成て居ましてと云ひながら二枚折の屏風を取て向ふへ片附します
 ると汚穢ない三布布團を展き其上は年頃ろ五十八九六十近い老婆さんが長煩ひで瘦衰へて
 居ます胡摩鹽交りの髪が領よか、り見る蔭の有りません枕元は縁のとれか、つた盆の上は
 薬茶碗や蓋物の中は梅干と甜物が這入て麓埃が溜つて居升から不潔いあんのとつていひや
 うの有りませせん老婆「サア何うぞ此方へ草「ハイ」是の何うもボツツ降り出して来た

容子で老母「イエ大した降も有り升まい此所らでの山から烟が出升と直に雨が降りますけ
 れど晴りますと直は道が乾き升から御寛りと成さいまし……ハイ」有難う存じ升る加持
 を戴き升に何う致したら宜しう御座い升草「水初穂を一杯汲んで来て下せへ女「ハイ畏
 まりましたと暫くまて水を汲んで御盆の上へ載せ燈火を打ち掛けて持て参り女「これで宜
 しう御座い升か草「エーお三の池の御符の彼方より澤山有升が此所より只々二枚ばかり持
 合して居ますからと云ながら懐は這入て居ました鼻紙の端を破つて取出し汲だ水の上は載
 せまして手を合せ是から指を開いたり閉たりして蟹から天皇虎やア、く見たやうなものを
 拵へたが判然り覺えて居ませんので体裁が悪いから袖の中でムク、手を動かして居るので
 すが素人より薩張り分りません老母「有難う存じ升有難う存じ升妾も随分神信心を致しま
 して佛参りも致たもので此座い升が湯獄さまの利益のまた別だから汚穢講の御歸りの御
 仁に御祈禱を爲て戴けば何んな病でも全癒ると皆さんが仰しやい升もんですから此娘が驛
 の宿屋さん杯へ往て願ひましてもお山としてのお歸り掛けで御座い升から皆お急ぎで下
 下さる仁の御座いませんが公等の妙義へお廻りよ成りましたのが妾の仕合せで入した事
 でも御座いませんが此程の誠は食が思ふやうに喰られませぬので此娘が心配致しまして
 誠は何うも有難う存じます草「此御符の矢張り乾して置いて又水を汲み替て御符を入れて

飲めば一粒萬倍でも三の池の水を戴くと同じ事だてエますから此の水を戴いてれば段々全
 快よ奇りませう……急ぐからモウお暇よ為やうぢやアねへか 老母「何んぞお進げや度か……
 ……それと皆様の未だお若い仁で入らッしやい升ナ、と云ひながら熱々草三郎の顔を見上
 げて 老母「オ、草三郎か 草「へエ……オ阿母さん 老母「オ、草三郎か……ナニヤあつげ
 ヤ阿兄だヨ 女「オヤ阿兄さんかエ 草「チ、妹か 草「誠は面目次第も浮坐いませぬ面目次第
 も有りませぬ 老母「ア、一草三郎逢ひたかつたど三布布團を這ひ出て草三郎の膝へ絶り付
 き 老母「阿兄逢ひたかつた草三郎も嬉し涙を拭ひ 草「私も何うかして阿母さんよお目よ掛
 り度と云ふ願ひが届いたんで浮坐い升が此處でお目よ掛らうとい存じませんでしたしたが能く
 マア壯健でお存在下さいましたハア一是で私ハモウ何も思ひ置かずは浮坐いませぬ 老
 母「ハッ……十九年此方何うぞ爲て逢ひ度い……と思ひに思つた甲斐有てマア手前よ
 此處で逢はふとの實よ今日が日まで思はなかつたが見ればは嶽山の行装も成て居るハ改心
 して今の信心氣でも出た事か此娘が二歳の時別れた妹だが斯る人あるまで草三郎ハ
 何う云ふ了簡違ひで人を殺し窃みをするやうな悪道に陥たかサア其事を聞かう 草「へへ
 一阿母さん然う大きき聲で仰しやッて下さると世間がおりますから何うかお静か願ひま
 す實ハ其事を申し上げ度いバツかりで十八年此方阿母さんのお行衛を探してエたので……喜

三ア清次乃公が是まで苦勞した甲斐が有たナア 喜「妙だナア阿兄ハ何んを嬉しいか知れ
 めへ 遺「阿兄が是まで和女さん逢ひ度ッて寐ても寤めても生母の事ばかり云てる仁だか
 ら自分の了簡違へで盜賊を爲た譯ぢやア座へませぬ 草「大きき聲で盜賊……と云ふなヨ
 ……阿母さん尊公の巡禮も成て福島へ私を尋ねてお往かすつてまた此方へお來でなさいま
 したが永い間だ何處も何うしてお在なすつた私も心よ懸て探しましたが少しも目的が附き
 ませんでしたが那所へ往て入らッしやいましたと問はれて老母の嬉し涙で物をも云れず暫
 らく沈んで居りましたが袖よて涙を拭ひながら 老母「餘まり餘まり思ひ掛けないので
 言はふと思つて居た事も皆お忘れして仕舞ひましたコレ草三郎前が十六の時阿母さんの遺
 言で劍術の師匠の恒川さまへ手前の身の上を頼んで一人前の侍よ爲て下さいの確を引受け
 ……と云てお伴れをすつて手前が十八までの誠無事奉公とし劍術も段々上達すると云ふ
 手紙が来て和郎の手紙の假名交りで贈りから羨しも解り安心して居る其年の十一月の
 下旬は浮重役の久保田といふ人を殺しお金と澤山盗んで捕縛れよなり半屋の住居を爲て居
 る事を聞いて妾の吃驚して仕舞ふと其事が何時か名主さまのお耳に這入り然んか悪人の親
 達を村に置く事出来ぬから只今出て往けと村を追ひ捕はれた時より丁度此のおつ
 けが四歳の時仕方なく借金の方へ畠から居宅まで取られて仕舞ひ妾の此娘を背負ひ小包み

を抱えて村を出離れ段々沓掛宿まで往くと雪も逢て妾の心配を爲たせいか急に病が起つて来たから沓掛の蔦屋と云ふ宿屋へ泊つたあり翌年の三月始めまで妾の煩らつて居たが稍く病氣も全快たゆゑ夫れから此娘を呑負て恐しい碓氷越を爲て常陸の土浦へ尋ねて往くと恒川さまのお行儀も知れず手前の牢破りを爲て逃げたと聞た時ア、一マア武士の家も生れた只一人の男の子が盗みを爲て人を殺し刺さへ牢破りをするどい矢張り妾の前生の約束づくで斯う云ふ事も成たのだらうから一層の事一思ひも身でも投げて死な度と思ひましたけれど此おつげが有るから死ぬも死なれず罪滅ぼしの爲め又貧乏をかけ同行二人と云ふもの、乳呑を抱いて四國西國を廻つて居たのも永い間の事であつた

第二十八回

母「夫から此娘が成人仕ますと縁致も人並よりも勝れて美いと皆さんが仰しやつてヤレ娘を呉れるノ權妻も遣せノ藝者も爲るのど仰しやる仁も有つたけれど此娘の何んか事を爲ても阿兄さんよお目も掛らぬ中り妾の亭主を持たないと云つて觀音さまへお参りを爲てもお兄さんの行儀が知れますやうよと願つて夫まで阿母さん壯健で居なければなりませんヨ兄さん逢へば屹度譯が分りませう然んか悪事をするやうな仁ぢやア有るまいと筋みをするものを兄弟も持つた此娘だから事が解らなければ此娘も他へ片附ける事が出来ないと

思ひまして永の歲月旅難も難儀を致しましたスルト上方の御仁でありましたが不圖お目も掛つた仁から信州の福島にの劍術の名人で恆川半三郎さまと云ふ御仁があるよ云ふ事を聞き妾の飛び立つ程は嬉しく思つたから直ぐも福島へ往て聞いて見るとまた恆川さまの行儀の知れず尤も其時は草三郎の安中で堅氣の商賈を爲て居たがまた盜賊も成つて今のお尋ねものだと聞いた時より妾の越中屋の前で腰が抜けたやうに成つたのを介抱して呉れた馬丁の作四郎さんといふ御人がマア來い乃公が助けて遣ると仰しやつて此地へ連れて來られたが他へ往き處もない鞆子のものを此の野尻の觀音堂の願念さまと云ふお比丘さんの處へ其の作四郎さんが伴れて往くと其お比丘さん誠にお有難い人で草三郎さんの中々筋みをするやうな人ではないが何よか深い譯の有る事だらう和女は妾が過すから心配しなさるナ普門寺さまの境内の中へ在る疫餘けの觀音さまの以前の野尻村に在つたのを此お寺の墳墓場の中央へ立立まなりましたのハ方一非常の事であつた時も焼けぬやうな御堂を建て其處へ移しよ成つたけれど朝夕の香花や供儀へものを献る者がないからおまへたちが其の役をして下さるならと仰しやつて照念さまから二人の食物を送つて下さるから何一つ不足もあく暮して居ると此間秋間道から和郎の女房のおつねと云ふものがたづねて來て妾の草三郎の女房で居坐います此兒の尊婦の爲めよ孫で居坐いますから逢つて遣つて下さい

と云つて可愛い兒を伴れて来たがアンナ可愛い兒や女房を棄て、何んでオ、大盗賊も成つたかと云ふと其のおつねどのが夫も是れも皆ナ旦那さま故の事だと精しい事を聞いてから妾の手前を悪いと思ふ心も止まりましたが何んぼお主を思へばとて人を殺して物を取るやうよ大程まで義理立を爲ると阿父さまが云つた譯で有りませぬが何う云ふ深いマア因縁かどつて毎日〜妾の觀音さまのお堂へ往て何うか悴よ一目でも逢はして下さいませしと無理な願がけを爲て居ましたつげ眞實に阿母さまの毎日和郎さんの咄の出奇い事ありませんでしたが能マア尋ねて来て下さいました山嶽山の講中へお這入なされる位でハッパ改心したのでせう妾の他兄弟のあし爲ますから何うぞ何時までも阿母さまの側は居て進て下さいませし、眞、アイ、……阿母さんア、一親子でエもの實は深い人情のもので座へ升ナ私のやうな不孝の子を和女さんの十八年此方片時も忘れる暇もなく西國廻りを爲て乞食も成ても尋ねて下さる夫程の親の恩を一日も送らずに私にまた先へ出て行くやうな事もあるので傍座います何れも角も存じなれば精しい事をやさんでも宜うは坐い升が常陸で久保田傳之進主従三人と殺したのも實に旦那さまのお身代りで旦那さまの金がなければお勤めが出来ねへ程の心配な事が有るので私に道やらねへ事とひ思ひながら十八の時に分別もなく百五十兩でエ金を盗んで立派に名乗て出ましたが妙義の白藏でエものと合半よ

成り其者から阿母さんの村を引拂はれたてエ事を聞きまして何うぞ阿母さんよお目も掛り旦那さまのお身代りも出たので自分の慾も妨取た譯でない事を一言お聞せやたうへ直よ名乗て出やうと存じて白藏も誘はれ罪を重ねて牢破りを致し漸く還れて安中へ参り十五年の間堅氣に饑頭屋を爲てエた事のお聞かされば直き解ります何う云ふ因縁か又旦那さまのお目も懸ると三百兩の金があるけれど御立たねへど仰しやるので金の才覚をして旦那さまを江戸表へお立たせ申たからモウ望みの有りませぬ衆人は阿兄だノ親分だノ堅へ仁だノと云れる度よ身を切れる程よ苦辛から直よ名乗て出やうと心掛ました何かして阿母さんよ一目逢てから死あうと思はせませぬ惜くもねへ命を匿れ忍んで居ましたモウ斯遣てお目も懸つた上の直よ名乗て出ます私が十六の時では坐いました阿父さんが臨終よ忠孝全からず恒川を主人よ爲たらば親の無へものと思へど二三度繰返して仰しやつたのが私の精神へ染み込んで主人の爲めよはと思ひ過ぎてツイ斯る身の上になりました是も皆な約束事では生い升今ぢやア阿母さんのお側へ居て堅氣も成て孝行を盡し度も出来ねへ身の上で御座い升から足で御得心あれは直よ名乗て出て尋常よ政府の御處刑を受けますから何ぞ草三郎の疾よ傍處刑も成て世は無へものと思召して斯る柔順しい妹が有り升から何うか此妹のおつげよ良い養子をあすつて養母何うぞお長生をなすつた上で死水の此妹も取て貰ふやう願ひ



ます私に直にお暇致します母「ムー夫でハナニが御嶽講の妻も成て居るから改心したものと思つて居たが矢張り神心も成たと思せかけて講中の浮仁を騙して御嶽講の仲間へ這入たのか勿体至極もない……講中の御方さ此昔の妾の息男で御座い升がママ尊公等まで騙して實は……さまの御罰が恐ろしい御座い升眞平は免さず下さいまし喜阿母さん然ん赤湯心配もやア及びません小吉も此縁講でも何んでも傍座へやせん矢張り兄哥の黨類で悪事を働へた喜三郎でエもので此者の弟分の清次でテもんで皆な尋ねるものですが兄哥が和女さん逢てから死よてエと云ふ處から共々惜くもねへ命を生き延びるので二人と云ふ矢張り盗ツ盗で御座へやす母「オヤマア何うもマア能く御嶽さまのお山が出来ましたねへ尊公等のやうな悪事のあるものが喜ナニ山へ往た隠ぢやア御座へやせん背掛で御嶽講の行装も成たので御座へやす和女さん逢ひ度安中へ這入る事が出来ねへので兄哥が頼んで此行装を譲つて貰つたのだ母「ムーン……喜阿母さん村婦の汚れた金の受あいと云ふ篤實い御嶽さまで御座い升が此の金の少し隠が有つて名乗り出る時の墓も為やうと思つて饅頭屋を爲ておた時些とばかりツ、小遣を貯めて置きました三十兩で別にお足しよありますまいけれど三十兩一資本と云ひますから何うか此金で廉い田地でも買つて村方の人と頼んで阿母さんのお小遣ひの足しよあすつて下さるやうに願ひます母「ムーン……成程

名乗つて出るのの立派な事だがおつねも逢ひたがツて居るしするから孫やおつねを照念さすの處へ願つてチヨイと呼んで逢はせるやうな爲たいものだノおつね「夫ぢやア妻が内証で然う云つて参りませう喜阿兄イ阿兄イ喜阿兄だ喜阿間道は姉はんや可愛い坊やが居るがねへ……此處は斯う遣つて三人團圓でゴメく爲ておると村の人でも来て事がばれ露見するさ往けねへから清次と二人で實の上野原の觀音堂の椽の下へ金を埋めて置いたから掘り出して来て阿母さんの小遣ひの足しよもし喜阿も爲てエが阿母さん傍んだ金ぢやアねへヨ大丈夫だ係り合ふならねへ……觀音堂の椽の下へ埋めて置いたんだけれど迂濶りやア往れねへが此の行装で往さやア氣が附かねエ觀音堂もおこもりをする休養で今夜のうち又堀つちまひます遅くも明け方までよい持て来るが直さへ往つて来やすと喜三郎清次の二人の支度を致し笠を冠つて顔を隠し金剛杖を突いて安中へ出て秋間道より木島峠を越して神山から中室田へ出て上野原の觀音堂へ金を掘りよ参りました跡へ妹のおつねがねへ通知せましたからおつねが重太郎と云ふ喜三郎の兒を伴て來ました下野原村の觀音堂尼も尋ねて來ましたゆゑ此處で夫婦親子諸共お別を致し喜阿も遣れる道はないがあらう事あら江戸の旦那さまが安泰も成つた處を一目見て何うか八州の手に掛らねへで江戸のお役所へ立派な名乗り出度うは坐い升と世間を憚つてヒソソく咄を致して居りましたが

話も盡きず秋の長い夜で傍坐い升が退々深更て來ましたモウ彼是子刻半ども云ふ時分門の戸をトク／＼と叩き小聲で喜阿兄イ此家かエ此處だッけノウ家が間違やア爲めへノウ阿兄イ草オイ……歸ッて來たんだ開けて遣んナ締りがしてあるからつげハイ……只今開けますヨとおつげが立上りました

第二十九回

草其侍の衣服容貌の何うで幾歳位の人だ喜然うヨ……幾歳位へだッけノウ 漣然うサ何んでも四十四五よもあるか子人品の良い美しい男で身丈の高へ立派な侍で半合羽を着て脚半甲掛草鞋穿きで村重りのする程金を持てるので草鞋が切れるんだ餘り氣が悪く成たから小者が跡を附けると二三百の金のあるのを知ったからヨ草ム……夫の頼んだ事を遣て呉れたノ……コウ喜三ア清次一寸此處へ來て呉れ喜エー草此金のノ實の去年乃公が明光院で盗んだ金だ喜ム……草何時も咄す乃公が大恩を受けた恆川さままでエ仁が江戸よ居るお嬢さまの身受けをして恩人の家を建てると云ふので三百兩無くツちやア侍が立たぬへから腹ア切るとまで仰しやるのだ乃で舊惡のある乃公が衆人よ阿兄いだノ親方だノと云はれて煙の上よ居るのの針の上よ座ッてるやうな心持だからモウ此處等が惡事の年明けだらうから名乗て出る了簡でぬる所へ恩人の旦那様が腹を切るとまで仰しやるから三百兩

を盗んで主人よ差上げ直よも何纏よか、る氣で恆川様よ持たして遣た其金を和郎達がマア何うして盗みやアがったのだナア喜其事ア知らぬへ和郎の旦那ア知ねへ草此野郎困った事だおアとんだ事を爲て仕舞たナ旦那さまを和郎等二人が欺かして殺しやア爲ねへかエ 漣殺す處か乃公等が殺され損ちッて逃げたのだ草貴様江戸から伴れて來たお里てエ 婦女の何うした喜其侍が殺して侍の行衛知れずよ成たてエ事を後日で灰よ聞たが……大變な事よ成たナ旦那様の何なすッたらう草何うあすッたらうッて彼の金を盜賊よ取られて仕舞へば恩人取手屋の家を再興する事も出來ねへ又たお嬢さまの身受けをする事も出來ねへから腹でも切て死なうかど安中よ在らした時分の了簡を出して輕躁な事をされると仕様がねへおアハア……和郎等何うか工夫して恆川さまを尋ね探してお目よ懸り此の金をお返し申て呉れねへか喜返へせッて此事の餘程六ヶ敷いや小者が盗んだッて迂闊り踏ん込めバ……宜い何うせ阿兄と一緒よ名乗ッて出て遅かれ早かれ斬れるんだから恆川さまよボカリと斬られても五分だから清次と二人で危險へ橋を渡ッて恆川さまを尋ねて此處此金の渡すが和郎の何うする草乃公の和郎等と違ッて江戸までの往れめへと思ふが又和郎等よ逢へめへものでもねへお互よ喰へ込んでまた江戸の傳馬町で逢へるかも知れねへが何うも乃公の此道で八州の手よか、りううだ併し夫の素より覺悟ヨ乃公の方の殿しいから和郎等

の姿を變へて悉皆りお返し申て呉れ喜「大丈夫だ命よかけても此金の悉皆りお返し申そう
 然んから矢張り此御講の行装で往けり知れやアしねへど是から二人とも支度を致し暇
 をひとして訣別を告げ立出ました跡の親子兄弟が泣きの涙で見送りました草三郎の喜
 三郎清次より一日遅くして江戸の方へ出立致しましたが此おつねと云ふ婦女の感心なもの
 で御座いまして重太と云ふ年の稚い兒は奥石重兵衛の家督を繼せまして自分尼も亦り草
 三郎の妹おつねと二人で夫草三の菩提の爲め彼の厄除觀音堂の傍に船御光の石佛六体を
 建立致しまして現に磯邊の觀音堂に廻り居りますおつねの母を見送りましてからおつねと
 共彼の照念尼の許に参りまして念佛修行を致したと云ふ事では草三郎の後生の爲めで
 御座い升お話二つは別れまして恒川半三郎の喜三郎清次の跡を追ひ馳けまして上野國東口
 千鳥村の薬師堂を詮索致しましたが頼と手懸もかく段々奥深く参りました小川村まで來ま
 した頼と容子が解りませんから小川村の名主倉田平四郎の許へ参りコレで頼は大金
 を取られた處ろ其賊が千鳥村の薬師堂に匿れたと云ふ事を手懸り在って承知致し参りまし
 たが頼と盜賊の行衛が解りません何卒お力添へを以て詮議をなすって下さいと頼むと開け
 ん山國で尋ねる者の立派な侍ひゆゑ其頃の侍と云ふと憶した時分で御座い升から早速力ら
 強の百姓共を呼集めて平「然う云ふものが村へ這入って村の者が速致致します事でごさ

い升、殊に此の村方の夏でも頼と戸を締めて寐た事ありませぬ別して盜賊の這入りま
 せん所で御座い升の然う云ふものが這入ってのあらんからツレ、と云ふので是れからが
 ヤく騒いで土地に慣れた百姓が諸方を探しましたが頼と行衛が知れませぬ其内彼の邊の
 九月の上旬から雪の降る事ゆゑ立つ事が出来ませぬ倉田平四郎も恒川半三郎の立派な侍で
 いるし斯う雪が降っての逆もお立ちよのあれから私宅にお在下さいまし、と云ふの
 で是から恒川の倉田平四郎の厄介も成って居ると廊下の欄間も六尺棒が掛って居り又鎗や
 弓矢が有ります平「エ、此村方での名主の少しづつ、劍術を心得て居なければなりません
 お武家さまの劍術の心得有るの當然で御座い升が何うか劍術を教へて下さる譯は有りませ
 んやすまいか半「未熟で御座い座るが御座いなら一木立合ひませう、と是から名主の倉田平
 四郎と立會ひますと可なり出來りうな腕前で平四郎も覺えがあり升から恒川の柳生流の腕
 前も感心して先生と云つて此村方の名主始め百姓共も劍術の稽古も参りますから頼と
 出る事が出来ませんで遠く其年も果て翌年まで居りますと段々弟子も殖えて参り先生と
 と云はれて慕はれるの引かされて小川村も承らくの間居りましたが段々身土を明し
 半「予の逆も斯う云ふ山國に果る譯は有り往ん一日も早く江戸表へ往かなければならん義理
 が有り殊にお恥かしいが予の娘の實のソノ愚家の爲め辛き苦界へ沈んで居るから娘の

身受けの金を才覺して呉れた金子を取られて見れば家來の忠義も水の泡よあるから一度び江戸表へ参らなければならん 平「左様お譯でハ誠にお残り惜り座の升が據ろありませんと是れから百姓が大勢集って餓別を拵らへましたから路用は差支へないが江戸表へ往つても娘を身受けする事も取手屋の家を再興する事も出来ません、責めて完く災難で盗取れたと云ふ譯けを致し度いと懸立ちを致しましたのが八月八日では座います百姓の皆を送つて参りまして 甲「傍機嫌宜しう 乙「傍機嫌宜しう 半「永らく厄介にありました再び當地へ参ります 平「傍機嫌宜しう左様なら再度のお入求をお待ち申しますと別れました恒川半三郎の段々坂越を致し沼田の大竹屋へ一泊し翌日の早立ちで十一里廿一町の道を歩行き倉ヶ野の大黒屋へ泊り其翌日の道を急いで鴻の巣泊りと志し彼家から十二里三十一町餘座の升處の道を丁度日の暮れに参りまして漸くの事で鴻の巣の手前の箕田村と云ふ處は濃邊の網の守本曾の觀音堂がござい升當地から参ると右側でござい升其向ふ掛茶屋が有ります掛茶屋の方より人が掛け交せんで觀音さまのお堂の樹の下に腰掛けが有りまして其處へ腰を掛けると向ふから茶や何かを運んで呉れますので旅人も之へ参つて休息して居るものがありすが幕方の事ゆゑ多分往來もございませぬ 半「婆アや茶を一杯呉れな 婆「ハイ只今進げやんすマア此方へお掛けなせへましヨ 半「此地から鴻の巣の宿まで山

あるまいナ 婆「ハイ此地からハア五六丁参ると直きでござへますヨ 半「左様かな、と云てゐると側に居た旅人が 旅人「お客さま此方へ廣くお掛けなさいまし私ハ参りますから 半「ハイ御免下さいましお邪魔でござい升旅「ハイ〜…オヤ尊公ハ恒川様でございませんか 半「アイ…オ、是の何うも思ひ掛けあい植木師の喜平次か 喜「是のマア何うも思ひ掛けない何うなさいました…江戸へ往つてござい升か、誠に見違へるやうにおなりで昨年思はずは嶽歸りの時よお目も懸つて何うも此所でもたお目も懸らうとハ存じませぬでし

たが能くマア江戸へ 半「ハイ彼の時よ和郎から取手屋の事を聞いてから急に予ハ取手屋の事が心配もあり娘の事や角や案じて實ハ金才覺を爲て取手屋を再興して遣り度と思返したから然う心得て金才覺をして立た處が昨年の八月二十一日の夜災難も逢て金を取られ其賊を追ひ駆けて會津の近所まで参つて只今まで雪も降り込められて居て今度漸く出て来た譯なんだが貴様の何所へ往くのぞ 喜「エ、本庄宿よ普庵さまのお墓がございまして今度新規にお墓が出来上り私もお賽籠箱を建立致しましたからお参りも来ましたのですが且那さまモウ年を老ると齒が悪くあり美味物も喰へず美しい着物を着度もあし態があくあり

ますから只今での婆アと二人で信心一三昧で暮してゐますが且那も存じの金太を養子として汚事任せて私の隠居役も庭の飛び石を据ゑたり何かする次いで尊公信心も凝つて一心

不亂も成て来るとマア悪い事の出来ない虚言の吐けぬへ、と思ひますのでマア段々凝り固まる譯でのありませんが随分間さへござい升と彦嶽さんへ参ったりも墓参りでもする氣も
 あり升半「夫の誠な事だ然れでの貴様の是から本庄宿へ参るのか 喜「イエ私今夜
 鴻の巢の伊勢半へ泊らうと思ひます 半「鴻の巢へ泊ると、夫の幸ひ予も今夜の鴻の巢へ泊
 る積りだ 喜「左様あらは一緒に参つて繰々お話を致しませう 半「夫の幸ひ事だから取急
 いで参らう、無理な道を歩行いたので大分足が腫れて居るが急いで参らう 喜「イエお茶代
 の宜しうございます私が拂ひますから、此所へ出たのがござい升江戸まで参る内よまた
 旦那願ふ事もあり升……婆アさん此處へ置くヨ 婆「御緩りませへまじよ忘れものぬへ
 やうは氣イ附けてお往であせへまじ 喜「サア往させうと心嬉しいからイソソ〜じながら
 鴻の巢へ参り伊勢半と云ふ宿屋へ着きました

第三十回

喜平次の種々酒肴を誂らへて馳走致し升半「然う種々誂らへての往かん……是まで酷い山
 の中へ居たので生魚あぞの頼と見なかつて久し振りで飲むと何うも酒も甘いナア 眞誠
 よ何うも思ひがけない事で何時も婆アとお噂ばかり致して誠まどうも尊公さまのやうな御
 運の悪い御仁の無へって何時でも申て居り升去年歸りまして婆アも私が榛名さまへ往く秋

間道てエ所ろでコレ〜の家旦那が居らしつてお目懸つたと云ひましたら婆アがア、
 云ふ立派な御仁さまが田舎へ居らッしやる位から爺さんや乃公の眞實な良月日の下へ生
 れたんだが旦那さまの誠なあいとしい事だつて子と御噂たら〜で居ました……夫ハマア
 頼だ御災難で金子でも澤山取られなさいましたか 半「されば三百兩取られました 喜「ム
 ー三百兩フウ〜半「予の迎も三百兩杯と云ふ金才覺の出来なけれど忠義な家來も草三
 郎と云ふものが有つてまだ和郎よの精しい咄を爲さかつたけれど予の家よの僅か三年ハか
 り奉公をしたもので十六才から十八才まで居たが差して目も掛けないよ予を主人と心得て
 予の爲め種々心配して呉れる事い實一通りでなく、何んノ彼のと苦勞をして呉れる其
 草三郎と申者の安中よ堅氣の商賣を爲て居たので予が其者よ助けられて安中よ八年居た處
 が和郎よ聞いた取手屋の事や娘の事を草三郎よ話すと草三郎も共よ心配して呉れ七所借り
 處でいなく二十四所借りを爲て成丈け軽いものと心附け小判で三百兩才覺して呉れたから
 實は辱けぬ事これで取手屋の再興をした後よの少々宛でも返金しやうと夫を樂しみよ來
 る道で詰らん者よ欺されて大師堂の堂守が共謀で其悪人の爲めよ三百兩の金を奪はれたか
 ら賊の跡を追ひ駈けて上野の東口まで参つて居つたのだが早速聞き度いの取手屋の何う
 成つたノ 喜「へ取手屋さまの御死去よありましたがお嬢さまてエの矢張り吉原でお娯

妓でゐるをなせへますさうで、一遍逃亡をしたと云ふ噂を聞きまされたが夫から歸つて来て年
 季が増したてエ事で、何うかソノ約束を爲たへ、敵手と申ても何んですが夫れも義理附
 くでお逃げなすつた事で御座いませうが江戸へ引戻されて矢張り角海老も勤めておるさ
 ざるてエ事を聞きまされた半「ムー左様か年季中は何よか深い約束でもした男が出来て居る
 亡命するといふ不埒至極の奴だフムー……何れもア、云ふ處へ入れると往かんナ然う云ふ心
 よなるからノウ主人に對して濟まんぢやあいか、矢張り引戻されて苦界へ沈まんければあ
 らん猶更年季を増すやうな事よあるのだ夫れ何も仕様がよいナア男「エ一修免下さいまし
 半「何だノ男「エ一宿帳を附けよ参りました、應ぞお疲れさまで居らッしやりませう半「
 アイ宿の亭主か男「イエへ、小僕の宿の手代で御座い升「エ一お名前を一寸記しよ参
 りましたへエ半「拙者の江戸表の浪人者で恒川半三郎と申す男「へエ浪人さまでエ一修
 住居の何所さまで半「暫く上野國東口の小川村の名主倉田平四郎方居た浪士恒川半三
 郎と認て呉れ男「へエ浪士恒川半三郎さま、宜しう御座い升……エ一尊公様の喜「エ一
 小川の江戸の根岸で植木師の喜平次でエ者で男「へエ植木師の喜平次さま……エ一何
 うか筆墨代を頂戴致したうございます喜「旦那宜しう御座います私しが存じて居ますから
 四文づ、遣れば宜んだねへ男「是の有難う存じますお休み遊ばしませと、立上りまして隣

室の障子をガラリと明けました男「エ一修免職人「何んだ男「エ一宿帳を附ます職「宿帳
 てエの何んだ男「お名前を記します職「あまへつてまだ飯も喰はねへの……半醉ぢや
 アねへ男「へ、尊公方のお名前を記しますので職「然うか名前を書いてエのか、乃公ア
 左官の留てエのな男「へエ……お所の何處で留「京橋因幡町だヨ男「へエ京橋因幡町、左
 官の留さんと仰しやいます留「ムー……マア宜しや留で澤山だ男「へ、何うも澤山と申
 す譯まい参りませんへエ留五郎さまとか留吉さまとか留太郎さまとか宿帳の義で修免の升
 から仰しやつて戴き度もので留「世間で友達が乃公の事を留ッ子くしてエが宜い加減は認
 て置きやア男「宜い加減と仰しやつても……尊公の自分の名を存じないのですか……
 ……へ、左様なら留吉さまと致して置ませう……尊公さまの乙「乃公ガラ鐵てエんだ
 ヨ男「ガラ鐵……へエーガラと申すのが苗字なんですかナ鐵「何んだか人がガラ鐵ては
 ア、鐵砲洲のガラ鐵てエのな男「へエ鐵砲洲のガラ鐵さま……へ、筆墨代を頂戴致しま
 す鉄「幾錢だ百かへ男「イエ然んあまい戴きませんあ心持ちで宜しいので鐵「サア此錢を
 持て往さねへ剩餘の入らねへ二人で百遣るから……早くして呉れ湯へ這入て飯が喰ひてへ
 男「へイ承知致しましたお休み遊ばせと若い者の立去りました其のうち泊りも遣々ありま
 して段々深更に参りましたが半三郎の植木師の喜平次と咄も盡きませんで少し遅うなりま

したから床を展らうと致します處へ梯子段をトン／＼と三四八上ッて来たの八州のお改めでガラ／＼と障子を開けた容子半「何んだらう喜「何よか怪訝の者でもあつて八州が探索も参つたので湯坐いませう半「左様かな喜「時々斯う云ふ事が湯坐い升といふうちよガラ／＼と向ふ座敷の障子を開け二人伴の八州の役人の先へ立ち揃方が四人宿役人が弓張提灯を點けて男「サア此方へ八「貴様等の何んだ男「へ私共の藝人で湯坐い升へエ江戸表の藝人で湯坐い升とワナ／＼震へて居る八「何イ藝人だ何んとヤす藝人で何藝だヤせ藝「へエ兩人とも落語家で二人で旅稼ぎに出ましたので湯坐い升八「ム／＼名何んとヤす藝「へエ三笑亭可孝とヤす八「此方の何んと云ふのだ藝「へ私共の林家正藏の門人で林家正賀とヤす八「ナンダ正賀だ妙荷だらう……宿帳の夫よ相違あるか……何處から何所へ往くのだ正「恐れ入ります八「恐れ入られんでも宜い何所から何所へ往くのだヨ可「旅稼ぎを爲たいツてんで江戸表を立ましたので八「有體云へ可「誠と恐れ入ります實の師匠の從者を致しまして芝の神明の松本と云ふ家へ出て居りますと少しの事で師匠が叱言をヤましたので羽織の這入ッて居ります文庫を忘れたら師匠が一體其方のヌ／＼だどヤまして酷く苛言をヤましたからハア、斯も八餘敷い師匠の傍へ居ての辛抱の出来あいと存じまして腕を組んで涙を流しました八「然んを事を聞きやア爲ねへ何處

から何處へ往くのだヨ可「夫から土手倉の晝席の歸りよ正賀の處へ寄て正賀は逢ひますると矢張り師匠が八餘敷いから旅稼ぎが爲たい江戸へ居れば前座だが旅へ出れば眞が打るから旅稼ぎをしたいとヤ升から二人で相談を致しまして出ましたので湯坐い升八州「夫でい何か師匠の家より厄介な成てたのか可「へエ皆を師匠の宅より居ます八「食客か可「へエ宅弟子で湯座い升が思ふやうに修業が出来ませんと云ふ朝水を汲みまして湯飯を炊き夫から豆腐屋やなよかへ買物も参ります已刻半まで参れば宜いのでへエ恐入ります八「然んを事の何うでも宜しいが何か悪い事でも爲て来やア爲ねへか可「イエ別段悪い事の致せんが只だマ／＼イ師匠の羽織を一枚……八「悪い奴だ羽織を持逃げしたのか可「不斷脊負て居り升悪いので八「不斷脊負たま、持ち逃げをしたか……夫ぢやア完く落語家は相違あいか八「へエ只今証據を御覽に入れますと云ひながら紙入れの中は湯座い升落語家の帳面を取り出し可「へエ上書と大寶恵としてあり升大寶恵と認ておぼえと讀みますたらちめ……金明竹……夏ごろ是等の話の餘程六ヶ敷う座い升八「然んを事を聞かせん夫で宜から早く江戸へ往け可「へエ有難う存じ升、役人の其所を立ち出て向ふの座敷の障子をか／＼と開けたから中へ居た商人の男と婦女が驚いて跳ね起きました此婦女の芳町の藝者で男の小日向水道町のせり呉服屋で有升が以前他は奉公して居ましたが道樂盛

りといふ歳頃で藝者を連れて伊香保へ湯治に往た歸りで寐て居まする所をガリと障子を
 開けられ慌て、起たので女の單物の膝がまくれて緋縮緬の湯巻を現はし孫小僧を半分出し
 て居ます番頭「お改めで座いますヨと云はれ男の震るしあがら男「エ恐れ入りま
 す八「貴様の何處の者で男「へエ……誠暑の強い事では坐います八「暑などの何うでも
 宜い何處の者だヨ何處の者ナンダ男「真平は免遊べし申し八「何よも謝罪らんでも宜い宿
 所を聞くんだ男「へエ小日向水道町で私「の先主人の瀬橋の呉服屋で取手屋久兵衛と申す
 家よ小僧奉公よ參つて居ました其家が潰れて據なく親元へ歸り親呉服を致して居ます
 が決して多分の儲けの致せせん成丈けお願くしてお得意さまの殖るやうに神妙に商賣して
 居ますが只一軒お利錢をまだ進げませんで旅へ出ました八「然ん事何うでも宜い何ん
 て二名だヨ男「矢張り取手屋を名乗て居升る取手屋榮次郎と申す八「ウム……コレ其方
 の何んだ藝者か娼妓かエー何んだ榮「へエ是の私「の妹で八「何よ妹だ……何處から伴れ
 て来たムー然うちや有るまい宿所が遊てるだらう何うだコレ妹かどうだ婦女女「誠とよ何
 うも吃驚り致ましたノ……だから妾が一緒は寐て居るの往けなと云て離れて居たのよ
 淋しいからッて段々傍へ寄て来たんで……ア、何うも熱い事八「名を云へヨ何處の者だ
 女「妾のアノ芳町……榮「オイくくと袖を引く女「アノ芳屋の小よしと申す八「芳町か

榮「イエ芳町での座いますせん小日向水道町の芳屋と申す宅のおよしと云ふもので座い
 升八「およしでも小よしでも宜いが藝者の名だ藝者を伴れて何處へ往た榮「彼方へ参りま
 したと云ひながら後の方へ指さしをする八「只彼方で解らん何處へ往たんだ榮「一寸伊
 香保へ参りました此婦が身体が悪いので養生を参りましたので真平御免被下いまし八「謝
 罪て計り居ちやア譯が解らんソノ妹てへの幾歳よなるぞ云はれておよしの操手を爲すが
 らよし「實のソノ何んで座い升けれ共二才も三才も若く云とく方が徳では坐いますから
 八「正直云へヨよし「眞實の二十八かんで座い升榮「オイく〜和女の二十八だへ小
 よし「二十四だてへのの虚言かへよし「眞實の二十八だけ共阿母さんが二十四だつて然
 う云へッてエから和郎さんよア廿四と云てたノ八「其處で然んな事をグズ〜云はなくて
 も宜い……其方へ幾歳だ榮「私「の二十四では坐い升八「ナニ二十四だと此妹の其方の妹
 だてエぢやねへか妹の方が年上てへ事が有るかエ榮「へエ誠にお熱い座い升八「其方バ
 かり熱いのだ此方の熱くも……んともねへ……湯治に往つた歸りか早く江戸へ歸へれ〜
 榮「有難う存じます此平の免被下いまし、役人の其處を立出てまた此方の座敷の障子をガ
 フ〜〜と開け中へ這入りました

八「大分大勢たナ、と聲を掛けられ中へ居た三四人の百姓体のもの驚いて皆慙慙と辭義を致し甲「拙者義は下野國都賀郡エ一金井村から三里廿四丁這入りました寶木村と申す所の百姓兼左衛門と申す八「ム、宜しい……其方の宿所の其處だ甲「此處へ居升るの拙者の舎頭で座申す熊七郎と申して今年三十一才又相ありますへ實に此者義又付きまして此度江戸表へ出るやうな事なりましたので、其次は居まするの同村の下へ居まする所の喜左衛門と申すもの、其次は居るもの又八郎と申して是の皆同家の者ゆゑ同道して罷り出ました全く江戸へ參るので決して怪しいもので御座へません八「其後の方は退つてゐるもの何んだ乙「へエ決して怪しいもので御座へません乙「怪しいもので御座へません八「怪しいものでなければ此處へ出る乙「左様かお智めを受ける覺えの座へません拙者義の仔細有て江戸表へ參るもので御座へ升八「ム、仔細を聞かう乙「エ、神田明神下同朋町萩原貢と申す所の陰陽師方へ罷り出ます拙者の陰陽師の身の上で御座へましてソノ土御門の流れを汲みます所の免許を受けますもので御座へ升然るを設令政府お役人といへど咎もあさものを嚴しう何うもソノ通常の百姓同様にお取扱ひなさるといふ些と何うもお心得が相違致さうかと心得ます八「大層な事を云ふナ土御門の流れを汲む陰陽師だ云へば其方の免狀が有るだらう、免狀を所持致して居るか乙「へエ……免狀の御座へません

八「免狀がなくて土御門の流れを汲むといふ何んだ乙「イエ是からソノ明神下の萩原貢方へ卜占の稽古を參り升るので八「是から稽古をするといふのは陰陽師も無いもんだ筈ナ、と云てると其の隣室に居たの職人の二人伴れで留「オ、鐵「ウ、留「お改めた鐵「お改めたッて先刻もう認止たぢやアねへか留「お役人のお改めたヨ鐵「面倒臭へぢやアねへか乃公ア面倒臭へから此處に布團を冠つて居るが和郎宜加城云て其りやアナ留「知れると八釜しいぜ二人で這入たのを知てるだらう鐵「今一人の相買ひも役たとかかんと云やア知れやアしめへあんとか甘く胡摩化して呉んねへ、と和郎の中へ滑り込込だ處へガラ／＼と障子を開けて中へ這入り八「貴様等の何處のものだ留「誠宜い天氣さまで八「天氣の事杯を聞きしな何處のものだヨ留「江戸京橋因幡町で八「職人だナ留「エ、左官長八の弟子でへエ八「長八といふの積業か留「へエ八「其方の名いあんといふのだ留「へ、留「子と申す八「留「子といふ名が有るか、宿帳の留「書と出て居るでいかいか留「エ、彼のソノナヨイとソノ宿屋の番頭が教へたので八「フ、自分の名を人々教はる奴が有るものか詰らん事を云ふナ……其方一人か留「へエ小荷一人で誠は何うも淋しう座へやす八「虚言を吐け宿帳の兩人認いてゐるが連れの名いあんといふのだ留「へエ……八「ガラ鐵と認いてゐるが其者の居らんか何うした留「一寸宿へ一盞飲りやすもんです

から娼妓買ま往き度ッて先刻抜けて参りやした八「全く一人か留へエ八」コレ其處よ
 モゴ／＼動いて居のいなんだ此處へ出る鱈「免免させへまし眞平は免免させへまし八」一人
 りださずて……政府を偽ると許さんぞ留「イエナニソノ……少し拙梅が感くツて腹が痛へ
 ど中升のでへエ八」早く寐て仕舞へ、と云ひすて、立ち出で其向ふの座敷の障子をガラリ
 と開けると中へ居た二人の者の夜具を後へ跳てチャンと座りました八「兩人共何者だ甲」
 へエ小哥の太戸の喜三郎「清」吾妻の清次でお手向への致しやせん、長刀が前へ轉出出して
 あり升喜「旦那方エ誠は厄介で、今度の神妙は致しやすからち手當を願やす八」オ、喜
 三郎は清次か神妙は致せ「清」エー神妙は致しやす、長刀の其處へ放り出して置く位ゆる決
 してお手向の致んやせん尋常はお繩を戴きやすからち差立を願へやすモウ娯樂を見る事ア
 出来やせん、度々旦那方の厄介は成りやしたか此處等が丁度悪事の年明きで座へやせ
 う八「其方等を探して居たのだ喜」然うで座へやすか夫の賊に苦勞さまで……宿の金
 藏親分、誠は何うも親分は無沙汰は成て済みやせん少し太戸の方へ往て、夫から信州の相
 の川へ往て匿れてエたので久振りでお目懸りやした、と云ても毎度手向ひをして逃げ
 る奴ゆへ懐中は短刀を呑で居のせぬかと思ふから容易に踏み込みませんのを喜三郎清次
 の二人の見て取てクルリと脊中を向け自分で後よ手を廻したから八「神妙で有るぞ、と

云ひかから忽ち繩を掛けて二人とも引ひて仕舞ったのでバタ／＼と其家の大風の吹い
 た跡のやうなホット音息を吐きました何が何うも寐られませんかからガ／＼して居る内は明
 け方近くありましたから半「何うだエ喜平次喜」イヤ何うも寝きました私「少しも寐られ
 ませんでした盗賊を追て宿屋の折々斯う云ふ事があり升盗賊が居りませんと宜しう御
 座い升がイヤ何うも實は忌で御座います何うでんですから少しも早く立ちませう半「ム
 一随分可笑しい事も可笑いテ壁越しで聞えるからチ……喜平次「荷物を此方へ出して呉ん
 ナ、と手許へ引寄せ蓋を開けて品物を入れやうとする」と柳行李の中に三百兩の包み金が有
 り升から驚き半「オヤ是の何うしたのだらう喜」へエ「お金有り升半」ム「金有る
 が……喜」是の隣室座敷で捕れたアノ賊が逃れ道が無いと心得て此中へ投り込んで参り
 やアしませんか掛り合ひあると大變で御座い升ヨ、といひながら能く見ると包み金が三
 個有り升下は何か書いた紙が敷いて有り升から恒川の引出して見ると太戸の喜三郎吾妻の
 清次より恒川半三郎さまへと有るからハテナと手を取り揚げて見ると

申遺候

一 私共儀昨年八月廿一日吉見村大師堂に於て三百兩を盗み取り暫くの間信州路に身隠し
 致し居り處ろ尊公さまは難儀之趣き草三郎より細か承りしに付封金之儀は遊金仕

此金子の決して後届けぬ及ばず神は誓てお掛り合ひ等ぬ致さずは素より尊公さまの正所持金よへに其儘お持歸り相成は様願上は草三郎義も江戸表へ参りは目録係りし時節も可有之いどの傳言有之い
 と書いてあるので半「ム」昨日盗んだ賊の隣座敷に居た喜三郎清次とすす雨人で有たかハ
 アー大賊よなるもの亦善も近いと云ふが草三と同じ種類で有て草三より予の事を聞いたものかム……喜平次何うしたら宜らう喜「訴へちやア往けませんから願って持て往く方が良策で訴へちやア往けませんと喜平次が升ので其儘金を持参して江戸へ参りました恒川半三郎の鴻巣の伊勢半といふ宿屋で前年失なひました三百圓の金が圓らずも自分の行李の中は座いしましたから實は夢の様な心持ち喜平次も慌びまして是から取急いで江戸表へ歸りましたが外は便る處も座いしませんから喜平次の宅に居て喜平次を以て段々探して聞きますと角海老と云ふ事で座い升ゆ京町一丁目の角海老樓へ参つて相馴の身受の相談もありましたが判人の源七と云ふ者が人主も受人も成て居升から此方へお咄しがあければ往んど云ふので是から源七方へ参り咄しを致し親元身受けと云ふので主人も解つて居ますから百三十兩で身受けをする事もありました尤も發交兵衛がいまは眞實の親でない實の父の武士であると云ふとを遺言しましたから存じて居ますが容貌は知りません

からなまか儲かぬ証據が有るかど云ふので半三郎が相馴も逢て段々話しを致しますと清瀧と云ふ鏡と新藤五圓光の合口をうへて捨子と致したと云ふので相馴も二品を出して見せましたから此方でも親子と云ふとが解り事なく芽出度身受けで御座い升是から先づ取手屋の家を再興せんければならぬので御座い升が残り金が不足でござい升から心配致して植木屋の喜平次も種々金策を致すと云ふ成りましたスルト坂本二丁目一軒明家が御座いまして表間口が四間奥行が六間半有りまして小さな土蔵が有ると云ふ其頃の賣家の廉い事有りましてたらうが一時家賃を拂つて店借りでも宜しいと云ふので之を借り店を開くので御座い升が呉服店への慣れた者が居なければなりません丁度前より居りました和平と云ふ番頭を探し又小日向より前々奉公を致して居りました榮次郎と云ふ手代が有り升から右二人を相手として先づ問屋から代物を仕入れて参ると取手屋の家再興と云ふので取引を致す問屋でも概び代物を送る事成りましたの全く相馴の孝心の徳で御座い升が固より商人の娘ゆゑ十露盤も存じて居りますから店へ出ましては問屋で十露盤を持て掛定を致す事有りませす末に段々覺えて尺切れあどの相馴が自分尺を取り廢く致して賣れば賣れるゆゑ店へ出て商賣を致して居り升が年齢十八で九幡赤い手櫛を掛け半元服のおきよが出て商賣を致しますから世間の評判の大した事で學つて覽み参ります甲「何うだへ往たかへ坂本の呉服屋の

角海老の花魁だてエ事だが十七八で何うも滅方だぜ往たかエ乙「何んか塩梅だ 甲「何んか
 鹽梅だつて着て光の様な替を差してスーッと澄して赤い羅宇の烟管を持つてらア 乙
 「ムーン……虚言を吐けへ 甲「前日は然う云ふ風休だつたが今のスーッと變つて堅氣も見
 せやうツてんで木綿ものか何かで竹の節の若衆は結てめくら編の股引懸掛だ 乙「空言を吐
 けおどとさま〜」のを云まして往て見ろ〜と陸續参りますから實もどうもお客が絶間
 なく来るやうお事で座の升中より相馴の顔も見惚れて涎を流し反物を濡して 撥なく五
 反も買はなけりやアあらんと云ふやうなドットと繁昌致します事だ恒川半三郎の商人の店
 より居られませんか半「何うか予丈けの別な静かな處へ隠居させて呉れんかきよ」阿父
 さま打明けてお咄を致しますが實の取手屋どのが死する前も高價の薬を飲したり葬式の
 事何や角や親切な爲て呉れました眞實な絆れてソノ藤形岩次郎と云ふ上野の湯川部屋と深
 くあり一緒に廊を逃げ出して棲名の本坊へ匿れて居ますと角海老から人が来て妾が江戸へ
 引戻される時ソノ岩さんと云ふ人と深い約束が爲て有るんで殊も死去た養父の遺言も大
 恩うけた岩次郎さんを見捨てるな末の女夫よあれと云ひ歿した事もあり升からどうかソノ岩
 さんの所へ店を出した事を通知せ度もので座の升半「ムーン……イヤ其方の適意な男なれ
 ば何うかして配偶して遣り度のは親心である殊に久兵衛の病中何や角や親切な爲て呉れた

第三十一回

義理合ひも有れば早々書面を出したら宜らうと是から手紙を認め使は持たせてやりました
 藤形岩次郎の處へ遣りました手紙の主意は何うか前々の事もあるから何うぞ添はして遣り
 度と云ふ親からの頼み状で座の升ゆゑ岩次郎の飛び立つばかりは實に早送坊の旦那へ話
 を致しますと素より贖負のことゆゑ旦那「適意な婦女の爲め今まで苦勞を爲た事だが先
 方が然うして養父の家督を継ぎ家再興したと芽出度事だから貴様さへ宜くば御が宜い支
 度も爲て遣るまた今まで永々奉公を爲たから何のやうも手當を爲て遣らう、と坊の旦那
 も得心のうへ通じ駕籠で江戸表へ参り始めて恒川半三郎も面會致し植木師喜平次を媒始に
 して三々九度の献酬を致しましたから一度は芽出度い事ばかりで座の升恒川半三郎の取
 手屋の後の處ろは萱葺家根のチヨツとした古い家がありましたから之を借りて机は懸れて
 書物杯を致して居ります、商人の暮の忙しう座の升から夜も深更うあります、きよ」妾
 の岩さんと阿父さんの處へ往てお飾りを爲て来るから頼むヨ、と見世の番頭や小僧も云付
 て半三郎の處へ参ると半三郎の大きき悦び半「ア、芽出度今年ばかりの吾家でお据りを飾
 つて春を待つと云ふ此位心嬉しい事のあいア、一能く来て呉れた岩次郎殿も同道かサア
 く此方へお遣入り、と親子三人睦しく咄して居り升此日の暮の二十六日の晩で座の升

スルト門口から這入て来た婦女の身丈の高いデツプリと肥ッて居る色の黒いと斬たら黒い血が出やうと云ふ程でお尻の大きい事の人力車の母衣を脊負たやうで首と臍とが一箇よ成て居ます赤ツちやけた髪よ入れ毛をして丸髷よ結び小包を抱え上りの銘仙の半天を羽織りまして「汚免なせへまし、汚免なせへましきよ」ハイ誰公で居坐い升エ女アノ坂本三丁目を取手屋さんの汚免居所の此家で居坐へますかきよ」ハイ常家で居坐い升が那方から汚免光來いしました女アノ子當方よ妾が育てたお嬢さんのおきよさんてエ汚免が来てお在でなせへますかエきよ」ハイ誰公エ、と云ひながら匿子を開けて見ると十三年以前國へ歸つた乳母のおそよと云者ゆゑきよ」マア何うも懐かしいぢやアあいか乳母やアそよ」アレヤマア誠よ何うもマア成長く成てハア何うもチヨツクテ外で逢たッて知んねへやうで居坐へますヨ、當家かエきよ」マア此方へお上り能くお光來だチエサア此方へお上りそよ」ハイ誠よ意外に無沙汰よ成りやした……ハイ何時もお變りも居坐へませんでハイ妾も國へ歸つた處が兩親が死去て難類の世話で何んか着でも亭主を替て相續を爲ぬへばなんねへどの勘めよ據なく破れ鍋よ綴蓋の臂の運びで妾子を爲た處が續いて赤子が二人り出来たんだアから小兒の世話や何よや角やで出られず夫よ身上を讓られて見りやア田地を無じちやア濟まねへ責めて物置きの一ヶ所も餘計よ建て馬の一匹も殖してエ何んだア角だアッて用が

繁多もんだから濟まねへ事との思ひながら誠よハア無沙汰を爲やして申譯が無へで居坐エ升がお目よ懸らねへがおきよさんの嘸成長く成たらう今年のハアモウ幾歳よあるハア島田よ成たらうと和女さんの事を忘れた事有りませんが斯かハア立派な仁よおなんささるどの思ひやせんだったきよ」能くマア妾が坂本へ移轉た事が解つたねへりよ」解つたッて妾ハア始め新橋のお宅の積りで尋ねて往たら微祿して宅イハア仕舞て淺草反園の方へ塾足して宅イ潰れたてエ話を聞きましたから魂消て何うしてハア彼んか身代が潰れたかッて夫から探したが何うしても知んねへだスルトチヨイとした處で聞きますと田町の判人さんの處へ往ッて聞くと解るてエ事だから其處へ往て聞くと斯々云ふ講で和女さまが養父さまの家督を繼いで斯うだてへから何んさハア何うも親孝心者だッて養父さまの爲めよお娼妓よ成たてへの何うもマア出来ねへ事だマア然んな辛苦エ處へ這入てねエ實よ何うも一ト通りあんねへ苦艱をなすつたてエ事だが願エが届いて立派な隠居まで拾へてねへきよ」アノ阿父さんお嬢の妾よ乳を呉れた乳母やアでありよと云ふ者で居坐います半チ、誠よ久々で逢たノウ何時も壯健で何うも見違へるやうお良い内儀さんよ成たが子を忘れたかヨそよ」アレ……恒川さまだヨ誠よ久敷く逢はねへッて何うもマア魂消たチエ大層老爺さまよ成たチエ半」何んだ老爺さまあんで……前年取手屋で逢た時よ知らん張



りで居たが打明けて話すのの今日が始めだけれども此きよを生み落とすと聞もなく母の亡き
り乳があいので浪人の身ゆゑ養育てる手當もなく濟まん事とい心得ながら此娘を本日宿の
森町へ棄たの久兵衛どのが拾ひ上げて育て呉れて居るところへ予が植木師も成って往ッ
て其方逢ッたッけナ

そよ「アレマア夫の知んねへが然う云はば乃公が此お嬢さまが二才の時抱へてると少し
貸せッて如郎さまが抱いたが遺溺でもすると往けねへをら手を出して乃公へ返せと云たら
お嬢さまが忌だッて尊公の首へシガみ附いた事が有たが和郎さまの吾兒だから知てるだら
うけんども嬢さまの精神が通知せたアだ子何うも乃公もハア彼の時から品の良い仁だと思
ひやしたッけ半「ムー……きよの知らんが久兵衛どのの予の兒と云ふ事を知居て育て、
呉れた大恩が有り殊も取手屋のお影で路金を貰ひ遠い處へ暫く参ッて居たが漸くの思ひで
立ち歸り久兵衛どのの家を再興し實の娘も逢ひ樂屋の身の上も成て久兵衛どの位牌も香
花を手向ける事も成ると云ふの能々深い縁と思ッて居る處へまた手前も廻り逢ふどの誠も
妙だナとよ「マア何うも魂消たチハア「マア死去た旦那さまの應葉の影で御悦で御座へ
ませう……知んねへ事だが旦那さまの御葬式も参りやせんでしたから今晩の當家へ御座
介も成て明日お寺参りも参り度う御座へ升がハア「斯喜しい事の御座へやせん……お嬢

さま未だは亭主の出来ねへのかエ半「きよの亭主の此岩次郎と申すもので……此婦のソノ
きよの乳母だから何うか親昵も成てお呉れ岩「是の何うも始めて前後とも幾久敷く何うか
うよ「ハイ……和郎さまがおきよさんの亭主かエハイ何うもハイ是の何うも美しい男で何
んとハア女子のやうな仁だねへお嬢さまを一對並べたやうな美しいお夫婦を側へ置て斯あ
嬉しい事のあかんべエと思ひやすが何うも誠も不思議な事で妾のハアおきよさまも乳を進
げたりよと云ふもんで御座へます幾久敷くは心安く願エます小供が成長くなりやしたら江
戸へ出て参りやすから厄介で御座へませうけんども何分お願へ申しやす何うもハア何時は
婚禮で参坐へました……何んぞ祝ッて進ねへばなんねへが乃公ア方での何うかすると二
股大根を贈て祝ふだ二股大根の婦女の股のやうな形だッて祝ふ事が有り升が今後来る時よ
ッノ二股大根を何ふかして探して持て来ませう半「イヤ大根あんぞ持て来あくッても宜い
……何しろ一献爛るが宜いうよ「和郎さまの何處からは入婚させへました半「元ど宮様衆
の息男で藤形岩次郎と云ふものだが養父の宮様衆で根岸の秋田とか云ふ者ださうでうよ「
ハイ……然うでは坐へ升か未だお若へからは兩袖共お揃ひで参坐へませう半「イヤ「縁
切でッノ其秋田へ買はれて此者の生母と云ふ者の今行衛知れずも成て居らううで實に何
うも兄弟もあいな心細い身の上だが不圖した事からきよも馴染んでノウとよ「エイ、阿母さ

まも無へで岩予の宮様衆へ貰はれて坊は奉公を致して居ったが今で斯う云ふ身の上も成たの仕合せお身の上だけれど予の生母の元と常陸の北條の伊勢傳と云ふ料理茶屋の娘で其所で予の生れたから田舎漢だが和女も常陸かエうよ「妾のハア小山在で湯坐へますか」ら遊へますが北條の伊勢傳エ……夫れぢやア何んで湯坐へ升か尊公の母さまの名のお里さんどの仰しやいませんか岩「ム」是の妙だ何うして和女の知て居るうよ「知てるッたッて是のまア何うも魂消たヨ」岩「何が魂消たうよ」何がッてハア和郎さまの阿母さんがハイ、……和郎さまの幼少へ時分の名は傳太郎さまと仰しやいませんか岩「ム」是の妙だ能く予の幼名を存じて居るそよ」存じて居るッて妾の爲めよの主人さままだヨ」岩「ム」夫れ何う云ふ譯でうよ」何う云ふ譯だッてアレヤイマア何うも尊公の阿父さまの此所は恒川さまがお在で座へ升が常陸の土屋能登守さまでエ九萬五千石のお大名の家で八百石お取りあすつた久保田傳之進さまでエ方の所へお里さんが權妻奉公も召て丁度妾が奉公爲てエる時分は尊公が出来たんだよスルト尊公が五才の時で行ッけ九片のお節句の如だ旦那さまが早出の登城先で尊公の阿父さんを斬殺したものの此處はお在る恒川さまの湯家來で草三郎でエ草履で恒川さまから暇が出て湯座へましたが旦那さまの立派な役柄を勤める身の上で有りながら人は斬られて死去ぬやうで駄目だッて家の遺され祿も取り上げられら

まッたので湯座へ升が旦那さまへ壯健あらばお里さんの立派なお妾さまで奥さまのやうな成て居られたんで湯座へませうが然う云ふ譯で仕方なく手當も無エので北條へ往ッただアヨ」岩「ウーン……」

岩「是の何うも……思ひ掛けない、夫れ全くの話かエそよ」全くも全くで無エも妾のハア其時中働奉公をしてエたが若氣の心得違エでソノ悪い奴で佐伊泉勘次郎でエ奴も騙かされて丁度旦那さまが斬られた晩よ小山村へ墮落するやうおわけは成りましたがマア何うも思へ掛けぬへ處でお目も掛りました何うも子世が世から尊公の八百石取ッてお側にお用お取次を勤めて奉公人を巨多使つて居る湯仁の若さんが此處へ来て同じ士屋さまの湯中恒川さまの處へ湯養子に來るでエの矢張り縁が有るんだ子岩「ム」夫れで予の實父を殺した者の阿父さまの處へ奉公を爲て居た草三郎と云ふものかエそよ」左様で湯座へ升よ岩「フーン」残念至極……阿父さま私自身の上り始めて聞きました私しの常陸の料理屋の家へ生れた者さばかり心得て居りましたが大名の家で八百石取りました立派な侍の息男へ生れながら是まで生父の殺された事も知らず二十六に成ッて始めて此生を聞きました私しの實父の仇さが討ち度う座います半「親の仇さが討ち度いと云ッても仇さの行衛が知れまいがヨ」岩「イ」知れん事の有りませんへエ阿父さまに奉公をいたして居った草三

郎あれば尊公も顔を存じて在らッしやいませう 私も其奴の面体の知ッて居ります半「エ
 一 面体を知ッて居るとか 岩へエおきよと一緒アノ二ツ嶽に匿れ居ました時よ 榛名の
 梅吉と云ふ者が来て伴れ戻されましたがア、云ふ場合ですからおきよを引渡し私ハ坊へ
 送られて参りましたアノ梅吉と云ふ者の元と安中よ居た草三郎と云ふ者で餓頭屋を爲て居
 たが悪事が有ッて入の坊へ這入り梅吉と改名して身匿しを致して居ッたお尋ねもので元ハ
 常陸の土浦の城中よ居た中蔵小助で有ると云ふ事ハ坊の旦那からも奉公人よも聞いて居り
 ます又た二ツ嶽で九平と申者が梅吉と話を爲る時よも草三阿兄と云ふ事を聞きましたが其
 時の實父の仇とも知りませんから禮と云ッて別れましたが誠は残念で座の升……阿父さ
 半私ハ親の仇を討ッた跡でハ久保田の家再興が出来やうかと存じます半「成程りれハ出
 来ませう 岩尊公沈着いて在らッしやいませう私ハ幼年の折ハ屋敷を出まし
 たから更ハ劍術の心得も在りませんから阿父さま何分お力添へを願ひます阿父さまは劍術
 の名人だから何うぞお助太刀 願ひます生父の仇を討ち屋敷へ歸れるやうよありますれば
 設令元通り八百石よなれんども二百石や三百石よの新規お取立にありませう又重役から
 願ひ立なれば阿父さまも元々通りは歸参よなませう然うあれば此取手屋の家へは夫婦
 養子を爲ても家名さへ立てば宜しいから 私共ハ常陸へ歸り和衣ハ侍の女房で修造造と

云はれる身の上よあり阿父さまも御家名が立ち斯お嬉しい事ハ有りません……何うか阿父
 さまお助太刀を願ひ度うは座の升梅吉と云ふ者の顔ハ私ハ存じて居り升るきよ「ア實
 眞ハ不思議ぢやアないかアノ梅吉が岩さんの阿父さんを殺した仁です……眞實ハ仇を討
 た廉であたがが屋敷へ歸れ、バ妾ハ御様お嬉しい事ハありません……阿父さん然うな
 れば双方の身の出世殊々家の立事ですから何うか岩さんよお力添へを願ひます 岩阿父さ
 んハ草三郎の顔を知ッて在らッしやるし上州へ往て探せば知れるよ違ひないが若し知れあ
 ければ役人の手を以て尋ねれば知れぬ事ハ有りません草三郎を分て詮議しても仇を討ちます
 うよ「アレマア妾ハア迂闊り云たが仇討ちが始まるとハ知んぬへ併しマア感心な事だヨ和
 郎さまが實親の仇を討ち度うエ心が子エ 半「流石久保田傳之進殿の御用丈け有て仇討を爲
 たいと云ふ 志しが如何よも尊い仇を討てハ屹度歸参が出来から歸参の願書丈けハ予が
 認めて遣りませう又仇を討ッた時ハ訴へ出る處の奉行所へ差出す訴へ書も予が認めませう
 ……「チヨット親箱を取て呉れ、と親箱を取寄せて半三郎が眼鏡を掛けスラ……と認めまし
 たハ一封ハ常陸の土浦の家老早川源太夫へ届け出ます處ろの願書今一通ハ助奉行所へ届る
 願書で此二通を認めて岩次郎の前へ差出し半「此書さへ有れば宜しい 岩阿父さま何うも
 有難う存じます斯云ふ事ハ何も有も心得ませんから心配して居りましたが此書さへ有れば

誠まことに心こころ丈夫ぢゆうぶで有あ難がたい事ことで座ざい升しやう

第三十三回

半はん「ソノ早川はやがわと云いふの慈あま悲なある仁にだがモウ餘程よほどの老体おいだいだから殊ことよ寄よたら没ほつしたかも知しれん
 が没ほつしても其子そのこの子こが常陸たのちを立退たちひく折せよ二十七あつ八はちで有あたかと思おもふから其仁そのにんの存命ぞんめいで居ゐられ
 るだらう若もし其者そのが往いかねの鳥山とりやま新左衛門しんざゑもんへ願ねがへば宜よろしい、其書そのさへ有あれば仔細しさいい
 し岩次郎いわじろ殿どの此方このほうが助太刀すけだちを爲して仇かたきを討うたせるが仇かたきも出會でた時ときも眞劍まけんの立合たちあひの容易やすうあらん
 事ことだが寺侍てらざむらい同様の事ことだから劍術けんじゆつの心得こころえ有あるまいが、此刀これが持もてるから持もつて見みなさいと
 取出とけた立派りつぱを大小だいせうで半はん「サア此刀これの彦四郎ひこしやう定宗じやうしゆんの大刀おたな兼副かねふの關せきの兼元かねもとで有ある此品これの子こが
 死去しよき後のち又またの岩次郎いわじろ和郎わらうも進まげやうから予わしの遺物いぶつと思おもつて下ください丁度てうど幸さいひ重かさねも厚あつくチト重おも
 いが持もてるなら持もつて見みなさいと、スナリと引抜ひきぬいて岩次郎いわじろ持もたせる 岩いわへエ持もつてます持も
 てます……ナニ一牛懸命せうけんめいも成なりましたらば此刀これを振ふり廻まひす位くらゐの何なにんぼ刀やが無くなくつても出で
 來きます半はん「ム一夫ひとの感かん心しんだが振ふるのの容易やすうな事ことで有ありませんヨ併しかし一牛懸命せうけんめいも成なたら振ふ
 れるかねエ、と云いひながら岩次郎いわじろの手てを持もち添そへさせて半三郎はんざうがウうンと自分じぶんの左右さゆうの肩かた
 を斬きりましたから岩次郎いわじろもあきよも吃驚びっくりして半三郎はんざうも取廻とりまりさよ「阿父おとうさま何をささるん
 ぞう氣きでも狂くるましたか自分じぶんで自分じぶんの肩かたを斬きつて何なにうあすつたノ半はん「イヤ」決けつして歸かへりナ騒さわ

いぢやアあらん靜しづまるが宜よろいと云いふので側そばも居ゐたあそよも驚おどろいて見みて居ゐる内うちも兩方りやうほうの肩かた
 らブブツと血ちが吹ふいて流ながれますうよ「マア何なにうも何なにんどハア騒動さわどうへ事ことも成なりやした……尊あや
 公た其その様ようを振ふり廻まひさねば宜よろいよ危あや険けんへ負傷けがアするたつて兩方りやうほうの肩かたから血ちも出でてマア何なに
 うも半はん「乳母によア決けつして騒さわいぢやアあらん一通いっとうり申まうす事ことが有あるから心こころを靜しづめて今いま半三郎はんざう
 が申まうす事ことを聞きかれヨ、と正ただしく座ざし割膝わりひざを致いたして胸むねを据すへ兩手りやうてと膝ひざの上うへに置おき兩眼りやうがんを閉しぢ
 ニツ三ツ息いきを繼つぎヒタリと座ざを占しめると忽たちち總身そうしん土氣色どけしきも變かりり面色めんしよくも違ちがつて參まりました
 半はん「是これ傳太郎でんたろうどのお聞ききなさいハツ／＼今いまを去さる事こと十九年じゅうきゅうねん以前いぜん和郎わらうの生父おや久保田くぼの傳之進でんしん
 を殺害せつがい致いたして立たち退ひいたの予わしの家來けらい草三郎くさざうで有ある實じつに此恒川このつねがわ半三郎はんざうで有ある 岩いわへエ
 ……オ阿父おとうさまうれの處ところで御座ございますせう、處ところで御座ございますせう半はん「イヤ……何等なんらの義ぎか知ら
 んけれど和郎わらうの親おや傳之進でんしんが予わしを惡にくんで勤務つとめの出來でらんやうも致いたすのみならず衆人しゆじん満座まんざの中なか
 で御辱おんじやくを與あたへた事ことも度々たびたび有あつて憤恨ふんこん止とみ難がたく九月くわがつ節句せつきうの早出はやでを待受まちうけ片並樹かたなみぎと云いふ處ところで三人
 共とも殺害せつがい致いたして逃にげ去さる時ときも家來けらいの草三郎くさざうが未まだ其折そのせりの十八じゅうはち才さいで有あつたが何なにうか私わたくしを身代みしろり
 よ出だしては新造しんぞうも旦那だんなさまも俱ともにお屋敷やしきへ歸かへつて居ゐて下くださいと申まうすから夫それハ何故なにがか尋たずね
 ると草三郎くさざうが申まうすよ「私わたくしの心得こころえ違ちがひを致いたし金子かねず五十兩ごじうりやう盗ぬすみ取とつた賊やくで御座ございます升しやうから迎むかへ
 る命いのちならお身代みしろりも成なつて鷹匠たかざむらい町の役所やくじよへ名乗なをり出でると申まうして出でたなれど予わしの帶刀おびを爲なす身み

の上で有りながら知らん顔を爲て屋敷も居られんから舅ども話合いの上で予の女房のおりえを伴れ家來藤藏方を便り上州の水澤へ参つて藤藏の厄介も成て居る内は翌年の二月十一日は妻が産氣附いて出生を致したの此れあるおきよ幼名を貞と名づけましたが産後の難みでナアコレきよ和女の阿母さまの直に死なれたゆへ和女は面目ない不實だと思ひだらうけれど浪人の身の上で和女を育てる手當もなく己むを得ず本庄宿へ棄兒に致した時其場で直に取手屋どのの拾はれ和女を育て、呉れたのみならず其後予まで取手屋どのの助を以て信州筑摩郡福島の新浦の家來藤沼とす者が有る其處へ参つて八年程居たが又取手屋どのの和女が懐かしふ思ふゆゑ江戸表へ参らうとする途で再び草三郎と邂逅し安中の宿の秋間みちよ草三郎の助けを受けて八ヶ年月日の経過の早いものスルト不問して植木師の喜平次が榛名山へ参詣し参り秋間道へ廻つて予の處へ休みコレくと取手屋の事を聞きア、一斯る大家が微祿致し養父の爲めよが辛苦い苦界へ沈んだが何うぞしてきよを身受けして養父の手許に置いて看病させ又一つよの細くも取手屋の家を建んければ義理が立んど心得たゆゑ命才覚とい存しても三百金からの大金ゆゑ今の身で誰有て貸して呉れ人もないから實に當惑致し一層腹でも切て死なうかと思ふほど心配して居ると草三郎が忠義赤奴で五日の中よ七所借をして三百金を才覚して呉れたから其金を持って再度取手屋

の家を建てこれなる娘を身受けして和郎も娶せ予の隠居の身と成りました
 半「今斯うやツて何一つ不足もない身も成たの皆草三郎の恩義あれハ譬へ家來よもせよ和郎の實父の仇討よ此恒川がどう助太刀が致されうや、家來草三郎を仇と心得て予よ助太刀を爲て呉れ頼まれた時の苦しき……また此程より血を分けた親子のやうよして一つ所も居り予を離れども知らず孝行を盡して呉れた志しの誠は辱けたいが今此彦四郎定宗の刀を和郎も持ち添へさせて予が兩肩を斬たの則ち和郎の實父傳之進を討た處の刀で有る此刀で予の首を斬り介錯して予の首を打ち落せば其麻を以て此願書を早川へ差出して久保田の家を再興致して呉れ……シヤが仇の娘と思召さず和郎も何うか親兄弟もなきよゆゑ傳太郎との末永く夫婦も成て道て下さい夫ばツかりが和郎への頼みで有る併し傳太郎殿十九年目で實父の怨を討ち本意を遂げて嗚呼満足で有らうナ、と始め終りの譚を聞き岩次郎の男泣きよ泣き流みまして暫らく物をも云へません」阿父さま情けたい事も成たぢやア有りませんか岩さんの阿父さんを尊公がお殺しあすつたか知りませんが何か夫よの能々の譯も有りませうから一旦斯う道て親子と成て見れば亦た相談づくで何うでも話の付くものを尊父自害をなすつて岩さんを親殺しし陥すやうよあすつてお呉んなすつて困るぢやア有りませんか、ヨリ考へて見てお呉んさいましヨ妾もツイ此間まで眞實の父の有るを知

らなかつたんですが、養父さんの臨終の時、和女の實子ぢやア、あゝ拾ひ子で和女の眞實の阿父さん、恒川半三郎と云ふ侍、だと云ふのを聞きまして、から何うかして、お目も掛り度いと思つた願ひが、屈き親子斯う遣て同一所居られるやうにありましたから、何うぞして是から孝行を盡し度と思つて、おた甲斐もなく、良人の實父を殺した、誓同志の縁どの斯な情けないといひ有りません……何うぞ岩さん能々お譯で有りましたらうから、阿父さんを悪まず早くお醫者さまを呼んで来て、療治を爲て、阿父さんの助かるやうに堪忍して、進げてお呉んなさいませし、半「フーン……騒ぐナ……コレ其方も、武士の胤で、いかに婦女と云ふ者の良人の爲め、よの親をも討つ事が有る、殊に生れ落ると間も、あゝ棄てたれば、縁を切たよりも、未だ、子の縁の薄い事、有る其方の取手屋久兵衛の娘で、子の娘で、いかにぞ、子の取手屋久兵衛殿、助けられ、旅費まで貰つて、信州福島へ立退いたものゆへ、何角の恩返し、の爲、斯く致したのも、全く死なれた久兵衛どのより、受けた義理が有るから、だ「フーメロ……」
 侍顔を致すと肯んぞウエ……久保田徳之進の管を、眞人が討つと云へば、其方の爲め、よの眞の變なれば、此なる兼元の小刀を持って、乃公を斬れ、サア早く斬らんか、サア……介錯致せ、と云ても、何う介錯が出來ませう、岩次郎の只俯向いて泣いて、泣いてばかり居る中、恒川半三郎の小刀を引抜き、諸肌を脱ぎ、横處へ充て、刺める間も、あくウーンと、腹一文字、割切て、喉を貫き、其儘に相果てましたから、乳母

の、おうよも、聲を擧げて泣き倒れる此騒ぎ、驚いて喜平次も出て参りますと、此の始末ゆへ、拾ひ置きせん、檢死を受けんければ、ありませんから、檢死を願ふと書置きが有り、升る事ゆへ、二人のもの、よの各めもなく、稍々野邊の送りを致し、升る事もありました、是から土浦の早川へ、届ける願書を持って、おきよと久保田傳太郎の兩人にて、十浦へ参り、早川源太夫殿へ、面會致し、段々の次第を話すと、源太夫どの、此書面を見て、一恒川半三郎の誠の侍魂、ひ感服で有る侍たるもの、よの然う有り度きもの、だ切腹して相果た、い、感服の至り、だと仰し、やッて直、此段をお上へ訴へました、處ろ殿様も、於ても、感心と思召され、直、久保田の家、の五百石、よお取立、よ、おかり、恒川の家、も、再興致す事、よ、おかり、ました、さて、おきよ、傳太郎の二人、の土浦へ、歸る事、よ、成りました、から、お手屋の坂本の家の番頭、和平榮次郎の二人、よ、相續致す事、に、おかり、ました、前、お上、上げました、角海老の相馴、勤めを致したもので、座い升が、親孝心の徳で、久保田傳太郎の、お新造、といはれる身、よ、おかり、ました、他、日、よ、小供が、出來、ました、から、其、男、の子、を、以て、恒川半三郎の家、を、相續、致、させる、事、よ、おかり、ました、相馴と云ふの、お遊女、よ、色氣、が、有り、まして、頼、だ、好、い、名、で、座、い、升、角、老、の家、で、大、井、と、云、ふ、の、が、お、職、の、名、で、人、卷、藤、宮、比、相、馴、花、越、な、と、云、ふ、の、皆、頭、達、で、五、の、指、は、歌、へ、ら、れる、遊、女、の、名、で、座、い、升、一、鐘、ゆ、る、太、田、小、店、と、違、ひ、店、を、張、る、杯、と、云、ふ、事、の、有、り、ませ、ん、川、家、が、遊、女、屋、か、と思、ふ、程、で、座、い、升、丁、度、文、政、三、年、三、月、の、十、八、日、の、事、で、

夜の彼是れ現今あらば九時少し経過たと云ふ時分で角海樓の門へ立ちました侍の黒羽
 二重の紋付の羽織は黒手の黄八丈の細い綿の小袖を着て肌着千筋の仙臺半の袴を穿き結構
 赤い身装紺色袴は茶柄の大小淵頭い赤銅七子と色書で花鳥の彫物手よの黒骨の扇を携へ
 黒足袋雪駄穿きの立派な袴への侍が内をのぞき込みながら侍御免ヨ、御免ヨ若へい
 湯光來ささいまし侍「角海老樓と云のの管家かエ若へい」管家で湯座い升がどなた様
 で侍「ム一予ハソノ田舎侍ひで頼と江戸表の容子も知らん者だが遠からず此度び國へ歸る
 ので實ハソノ國へ土産は吉原見物を爲度いと思つて参つたが素より始めて来た者だから何
 う云ふ風よして遊女屋へ上つて宜しいか頼と解らんが角海老樓と云ふのの名高いと聞いて
 参つたのだがノ若へい」名差のお遊び有難う存じますへ、お浮かれておらつしや
 いますか侍「イヤ浮かれるので有りませんが國へ土産はソノ名高い遊女を買つて見度いと
 思ふが田舎士ゆゑ嫌れるで有らうけれどもム一ソノ和郎の所は相馴と云ふ遊女が有かエ
 若へい」湯座い升侍「其妓を何うかして買つて見度いが若へい」茶屋の別
 湯馴染の湯座いませんか侍「茶屋と云ふのも別は知らんが……アノ日本橋の通り二丁目
 は山本と云ふのが有るノ一若へい」彼の葉茶屋で湯座い升侍の町はお馴染の茶屋が有り
 升るならばお茶屋からお光來を願ひますんですけれどもお馴染が湯座いませんければお振

りで宜しう湯座います侍「別は茶屋の……照降町の豊田と云ふのが有る若へい、其家
 も葉茶屋で侍「左様なら宜いやうは頼み度い併し多分は金の使はんヨ二十兩も有たら遊べ
 やうか若へい」湯座い升……お上り遊ばせ……何うぞ此方へ入らつしやいま
 し、と是から若い者の案内を以て二階へ通ると丁度花魁が坐敷に居ましたゆゑ坐敷へ通し
 て臺の物を運び萬事若いもの頼んで事を致し升侍「何よも知らんから宜いやうは頼むヨ
 若へい」藝者をお揚げ遊ばせ、と是から内藝者が二名遣入りました、何も知らんで花
 魁して坐つて居る容子が物敷云はず偶々云ふ事が何うも何も知らんと云ひながら味ひが有
 て容子の好い侍「だから相馴花魁の初會から少し隔惚で居る所へ番頭新造が側からおヒヤ
 りましたので坐敷の容子も至極宜しく是からお床に成りました侍「先刻のアノソレ若衆の
 名は何とか云たツけノ一番新」何んぞますエ和郎はんお湯でも飲み度いの侍「ナニ先刻ア
 ノソレ予を案内して万事切盛をして呉れた頭の禿て耳の裏は小さい痰癩の育た男の名は何
 んど云たツけノ一番伊助どんさますか侍「伊助か、彼を何うかチヨット呼んで貰ひ度ノ
 一番宜うさます直は小供よ呼びよ遣りませう、と暫くして若者の伊助が参り伊へい、
 何か御用でござい升か侍「イヤ少し頼み度い事が有るんだよ、ム一淺草田町二丁目とかす
 たが此遊女を扱ふ判人で源七と云ふ者が有るかエ伊へい」源七の丁度只今下の内所に

参ッて居ます 侍「夫い妙だチヨット逢ひ度が呼んで呉れんか伊へ、判人湯川まけて
三階でござい升侍「ソレの何んぢや伊へい是のしやれで侍「イヤチヨット逢ひ度い事が
有る遊女の事で少し問ひ度いのだア……ムー相馴と云ふのの今此處へケバくしい行装で
予の傍に並んで座ッて居て予は烟草を吹ひ付けて出したが相馴かニ伊へ侍「年の幾
才位ある伊へエ……花の香さん花魁の年の幾幾才だニ花「年を聞れると困るんで
すがアノ花魁の何んですヨ……マアチー眞實の年の二十一かんとすヨ侍「ムー左様か……
源七が下居るならば何うか一寸呼んで貰ひ度いノイ伊へエく畏まりました、と何ん
だか解りませんからト……と下へ下りて参りました

第三十四回

若い者の伊助が下へ往ッて源七は知せると源七の侍のお客さまが逢ひ度いと云ふの何
んだが薩張り容子が解りませんから早速二階へ上ッて参る、此方での新造が寝衣を着換へ
させ萬事支度を致し床の上は坐ッて居る處へ参り源「へエ花の香さん誠は沙汰、花魁
早くお上り花「オヤ源七さん這入んなましヨ何んだか客人が和郎はんに逢て咄と爲てへ事
が在るッてサ源「お客さまのお侍、さまださうで……エー免下さいまし花「和郎はんチ
ヨイト源七さんが来たんぞますヨ判人の源七さんがサ侍「チヨイト此處へ呼んで貰ひ度い

ものだ、と云ふので源七の何んだか解りませんから怖々ソット次の間から本間の屏風の外
へ参りました侍「チヨット此處へ這入て貰ひ度源「エー御免下さいまし、と屏風の中へ這
入り源「エー私山田屋源七と申す判人で御座い升が何か御用でへ、丁度内所へ参ッ
て居りましたから取敢ず参りましたが何う云ふ御用で何かお調べ者でも御座い升か侍「イ
エくマアスーツと此方へ這入てお呉れ……アノ予が敵婿は出た遊女も番頭新造も二人
あがら少しの間遠ざけて貰ひ度い、と云ふから何んだか解りませんが其通り花魁は話すと
相馴「オヤ酷いヨ、と云ひあがらスーツと他家へ出たやうも見せて次の間へ這入て居り升
る源七の中仕切を閉て屏風を立て廻して聲をひりめ源「何か御用で侍「モット此方へ寄て
呉れ花魁は知れての宜くないから源「へ、何か何うも尊公……へエー何うも花魁の代り
は判人の恐れ入りしましたナ尊公の高い布團の上は在らしッてモット側へ来いなんぞどのへ
、何うも……侍「少し話があるのだア、と云ひあがらフーワリと源七の手を取て二ツ
布團の側まで引寄せました源「尊公御申儀をすツちやア往きませんお國の薩摩さまで在ら
ッしやいますか侍「イヤ予の田舎侍だが雨婦のモウ那所へ往きましたか源「次の間は居ま
す中仕切を立て置きました何が何時までも私「此所は居て花魁は悪う御座い升叱られま
すからまた何んで、と出よか、るを押へ付て侍「アレサお待ち、と云ひながらスーツと黒

の羽織を脱いで後の床脇へ投げ附けまして小聲もあり侍、源七さん誠と暫くお目よか、りやせん何時も御壯健で源へ、何か御申戯りつかり侍、和郎さん小荷を忘れたか、伊香保の二ッ嶽で逢た榛名の梅吉で御坐へやすが何時も御壯健で源、ウ、梅……へエー何うも些ども知れませんでした、梅あの時、の大きき無理な事をいひました、源、何う致しまして誠に、お噂、マ、で居ました其折、何うもお影さまで大事を花魁を尊公が命賭けで案内して下さいますして恐ろしい思をして下すつたから取戻される事、成りましたお影で今夜も斯う遣て常家へ出入が出来るやうにあり相變らず外の遊女屋方へもお出入りの出来るやうに成たの、の皆、梅吉さんのお影だと時々當家の旦那もお話をするんですがア、花魁ぢやア随分苦勞致しました、が今での結構な事、お成りあすつて親元身受け、なりました、が實、アノくらい怖い思ひを爲た事、ない、と云て未だ、アツとも忘れやアしません、がそんな大結髪で在らつしやるから知れませんが、エ誠、何うも其折、の世話様、成りました、福田屋の親分、の壯健で、坐い、升、梅へ、エ壯健で……源七さん實の相馴、花魁、逢ひて、エと思つて来たんだ、が花魁が違つてるのだ、聞くのも体裁が悪いから聞かず、容子を見て居た、が何んだか譯が解らね、へんだ、が今和郎さんが云た、親元身受け、て、エの、何んです、源、實父が身受けを爲たんで、梅、ム、實父、て、エの、浪人、も、んだらう、子、源、エー、能く、知、て、ら、つ、し、や、い、ま、す、常、陸、の、恒、川、

半三郎と云ふ土屋さまの、の家、で、金、持、て、來、て、立、派、な、親、元、身、受、け、な、り、ま、し、た、梅、オ、い、さ、う、か……夫、の、マ、ア、宜、か、つ、た……此、頃、か、エ、源、去、年、で、坐、い、升、梅、ム、夫、れ、で、の、マ、ア、浮、兩、人、が、ら、ら、壯、健、で、在、ら、つ、し、や、る、と、見、え、る、源、エ、の、兩、人、と、も、お、壯、健、で、梅、取、手、屋、と、云、ふ、吳、服、屋、を、舊、の、や、う、に、立、派、な、立、て、ま、し、た、か、エ、源、立、派、な、立、て、處、ぢ、や、ア、有、り、ま、せ、ん、士、浦、の、お、屋、敷、へ、歸、つ、て、元、の、や、う、に、立、派、な、士、も、成、た、て、エ、事、で、梅、エ、恒、川、さ、ま、が、源、ナ、恒、川、さ、ま、ぢ、や、ア、有、り、ま、せ、ん、お、一、緒、に、二、ッ、嶽、へ、逃、げ、ま、し、た、岩、さ、ん、て、エ、仁、が、久、保、田、源、在、衛、門、で、い、ない、ム、……デ、傳、之、進、と、云、ふ、仁、の、子、息、さ、ん、で、其、者、へ、和、郎、さ、ん、娘、を、娶、せ、て、夫、婦、な、成、た、て、エ、事、が、解、つ、た、も、ん、だ、か、恒、川、さ、ま、の、仇、敵、だ、て、エ、の、で、自、分、で、腹、を、切、た、の、が、去、年、の、十、二、月、二、十、六、日、の、事、で、梅、エ……腹、を……ム、然、ら、う、か……夫、の、マ、ア、頼、り、な、事、で、併、し、何、う、云、ふ、譯、で、切、腹、に、な、り、ま、し、た、子、源、さ、ん、だ、か、譯、の、知、り、ま、せ、ん、が、恒、川、さ、ま、が、切、腹、し、た、事、は、付、い、て、お、屋、敷、へ、歸、れ、る、や、う、に、遺、書、が、有、て、其、書、面、を、お、奉、行、所、へ、送、つ、つ、た、へ、成、た、と、か、云、ふ、事、で、夫、か、ら、取、手、屋、の、家、督、の、番、頭、さ、ん、が、引、受、け、て、お、店、の、立、派、な、立、て、居、ま、す、若、夫、婦、の、立、派、な、恒、川、様、の、お、葬、式、を、出、し、た、後、で、お、國、へ、歸、り、お、侍、も、成、た、て、エ、事、を、聞、き、ま、し、た、梅、オ、夫、の、マ、ア、芽、出、度、か、つ、た……源、七、さ、ん、夫、れ、ぢ、や、ア、子、の、モ、ウ、何、も、思、ひ、置、く、事、の、有、り、や、せ、ん、實、の、充、分、な、張、込、み、の、附、い、て、る、忙、が、し、い、身、体、で、此、危、険、へ、江、戸、へ、踏、込、だ、の、恒、川、さ、ま、の、容、子、も、聞、き、度、し、相、馴、さ、ん、と、云、ふ、花、魁、の、恒、川、

様のお嬢様だてエ事も知てるから其お身の上も聞度へばッかりで斯奇姿又成て這入て来た
 が其事を聞バモウ何とも思ひ置く事ねへ明日が日御用と云ふ聲が掛れば二度と再度装束
 を見る事の出来ねへ榛名の梅吉は源七さん何か思ひ出す日有たら傍題目の一遍も唱へて
 お呉んねへ源「南無妙法蓮華經」梅「未だ早いヤ、何うぞ後日で源「エ、固向する位ぢ
 やア有りません實又和郎さんの御恩の忘れませんヨ……此何うもお侍のお姿で尊公がお
 盗賊をささるとい思はれません子實又尊公の御恩の忘れません、と兩手を合せて拜み源「
 尊公一日流連をして下さい十何かチヨイと取り寄せて馳走をして旦那もチヨイと話を
 梅「オイ、然る事を云ツちやア往けねへモウ是が訣別だ永居の出来ねへから直歸へ
 る源「チヨイト旦那話をして仕度いから待て下さい、何うして當家の旦那でエ仁の中々俠客
 氣の仁ですから尊公の申杯を云ふ氣遣の有りませんヨチヨイト旦那話をして爲すから、と
 云ひ括て立ち上る梅「アレサ源七さん、と云ふ中又トノノと梯子を下りて内所へ參
 り指を撫で肩を怒らし侍の形容を爲て源「旦那何うも此形ですもの知れねへぢやア有
 りませんか斯う云ふ大結髪で此方へ這入れッて私の手をアワリ取て布團の側へ私を引寄
 せるぢやア御座いませんか主人「オイ源七さん乃公の處で浮氣をしちやア往けねへせ源「
 浮氣どころでいなので私に妙事でもなさるかと思ッて驚きました處が和郎さんッノ仁

の兼とお話を致しまゑた榛名の梅吉さんでエ仁です其梅吉さんがお侍の行装も成て其時
 よ助けられて當家へ伴れて歸ッた先の相馴花魁も逢ひ度と云ふので来たんですが相馴さん
 の阿父さんの恒川と云ふ仁と何か因縁の有る仁と見えて恒川さんの身の上を聞いてア、
 夫れで安心した明日も装束を見られねへ身体だからお題目をど云ふんですが尊公何うぞ
 お題目を唱へて進げて下さい黙然うで御座い升から主人「源七さん乃公も心配しておたん
 だが順達帳が来たヨ源「へエ甚太ちやんが来ましたエ主人「ナニサ調帳が廻ッたヨ、と調
 帳を披きコレヲ是を見ナ、と文箱の深いやうなもの、紐を解いて中から取出す書面の吉原
 町會所中へ渡ります所の順達帳で御座い升其の文言の

順達書

元と小川町出生にて上州碓氷郡安中宿にて安中草三郎榛名よ住居の節ハ梅吉と申居り
 年齢三十五六中肉中身丈並差長く白き方眼中すッやか口美しく鼻梁通り解舌爽快侍
 休よして衣服ハ黒手黄八丈の小袖黒物二重紋附の羽織萌黄千筋の仙臺半の袴人小を帶し
 右之者千住宿より追ひ込みハ處ろ廊内へ立ち廻りハ趣き相聞えハ間草別殿密よ取調べ
 立廻り次第手當のうへ早屈出へき事

文政三年三月十八日

小林藤太郎

新吉原町會所

石澤 又助

江戸町一丁目

竹島 仁左衛門

同 二丁目

西村 佐兵衛

京町一丁目

深山 甚四郎

同

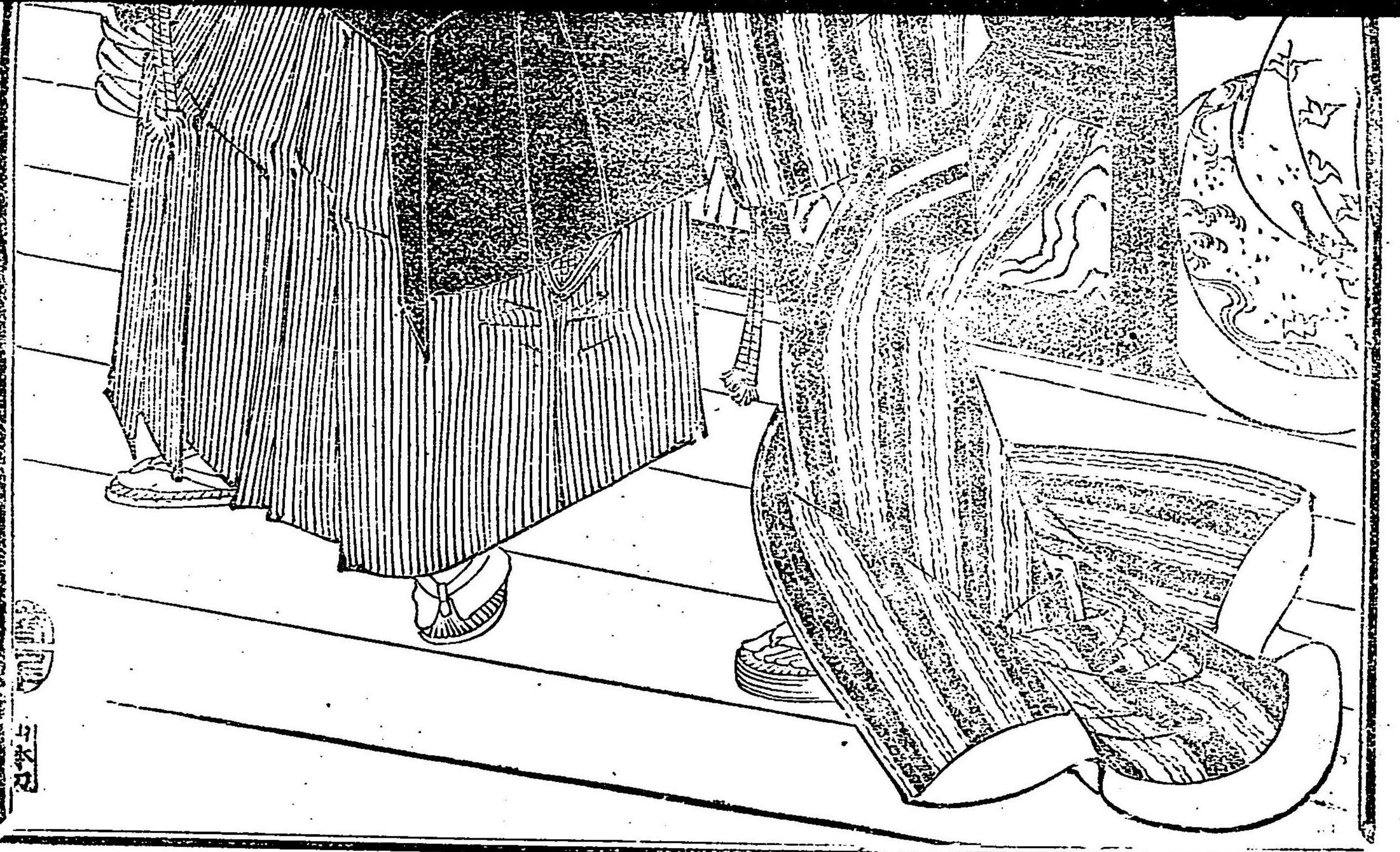
山口屋 庄兵衛

同

海老屋 吉助

主人「斯う遣て乃公の名が有るのに乃公の處より上らうとい思ひねへぢアねへか、源「モウ廻ッて來ましたかエヘエー……彼れで盜賊なんですか盜賊とい見えませんが柔和ッて本統のお侍かと思ひます、人を欺かすの巧いもので成程虚言を吐くものドロ……モウ盜賊よ成てますよ、ヘエー何うも迅速いものでモウ廻ッて來ましたか、旦那何うしたら宜う御座いませう主人「ムー乃公も困ッてるんだ宅から纏付を出すのも思だけれど其者と知れて見れば會所へ届け踏込して纏掛なけりやアあらねへが和郎も厄介よ成たり又た家の事で種々世話を爲て呉れた梅吉さんを家から纏付よして出しての義理が立たねへから何うか直よ梅吉さんを歸すやうな工夫の有るめへか源「ヘー……私も纏付に爲たく有りませんが……

……夫れぢやア私が往て話を致してスーッとして丑刻過よ外へ出すやうなことを爲ませう、と源七の眞青な顔を爲て二階へ上ッて參ると相馴の梅吉に初會から惚れてお升ので萬事手當が行届いて居ます源「へエ花の香さんチヨイトお客さんよお目よ掛り度う御座い升が花「往けませんヨ今お休みあすッたばかりだから源「少し譯が有ッて是非お目よ掛らなけれバ往けない事が有るので花「往けねへ事があるッて此方も往けねへから和郎のん氣を利して下へ往て居なましヨ源「大引けまでよ何うか結局を附けおけりやアあらねへので花「先刻屏風の中で何かコソコソお客と話を爲てへたが何んだニ……ア、解ッたヨ屹度彦太樓か何かよお馴染が有るんだチ其處へお客を伴れ出すんさせせう源「何うして伴れ出す處ぢやア有りません……一杯よ來て居る位で……何うかお客よ違ひして花「往けねへヨ花魁が大變なんだもの、花魁の彼様を事ハツイは無いんだが三日も歸さねへッて身揚りをするといッてるんだからお戯けでよいヨ源「ナニも私の申戲やア爲ませんチヨッとお目よ係り度ので花「だッて妾よの云ひ難いもの……花魁エ、花魁エ、アノ源七さんが客人よ違ひ度ッて相馴「戯けなますあヨ、彼處へ往きおまし知りまへんヨ源「何うしてもお目よ掛らなくッちやア往けねへんですから何うぞ相「源七どん歸ッて呉おましヨ客人の能くお眼みせずッて生体おいんだもの起すと毒なんだヨ源「誠よ困りましたチ……何うか然んる事を仰し



新編
浮城物語

やらあいで……お容様、お容様花「戯けなますなヨ、能くお眠みなすッてるのよ屏風の外から大きな聲でお容さまくッてサ……アレサ中へ這入ちやア往けねへ、何うしたんだヨ、と云ひながらビシヤリと源七の頭を打つ源「ア、痛い和女さんの手のイヤよ撓ふから痛う湯坐い升子……アノお容さま、梅……殿さまアく梅「アイ、源七どのかエ何か用か手相「お申戯みすあヨ寐た振を爲て居なましヨ源「然ん事事を教へちやア困りますナ、チヨツとお目よ掛らなけりやアあらねへ事が有るんで梅「ムー……花魁讀はお氣の毒だが手一寸源七どのへ頼んだ事が有るから夫れで来たのだらう、少し次へ立て呉んな相「然う……何うせ然うサお邪魔だから打解けねへんだヨ、と少し疑ぐッて居升からチレツたがッて胸抜の装でスーッと出て往きました源「お邪魔を致しまして花魁讀はお氣の毒さまへ、惚れたんです子相「申戯なますナ、素人染みてゆるヨ源「種々を云はれますナ……先程の梅吉さん、實の下へ調帳が廻ッて参りました、吉原の子會所へ殘らず廻文が参ッてッノ立廻り次第手當のうへ召捕て差出せと云ふ調帳が来たので旦那も心配して不審家の娼妓の事で厄介よ成たから繩附よ爲たくあいと仰しやるんですが時刻も丁度宜しう座い升から何うぞ直よお歸んあすッて下さいませんか梅「エー此親切は有難う當家の主人へ然う云てお呉んねへお目よ掛つて種々お話も爲てへが然う云ふ體で直よ歸りますすが先の相馴

第三十五回

さんを能く此親切は世話をして呉て添けあいと然ふ云て呉る

源「魁花だか新造衆だか知りませんが亂れ箱を匿しちまひましたヨ梅「ぢやア宜い小哥の是から尋常よ名乗ッて出てお繩を戴く積りだが大小丈けの差して出やせう源「花の香さんナヨいと旦那が據あいは用で仲の町まで往らッしやいます御同役が入らッしたから花「アレ見あましよだから云はあい事ぢやあい何處かへ伴れてくんだヨ憎らしいぢやアねへかへ、と新造の怒る、梅吉の草三郎の帯を締め袴を穿き悉皆り身支度をして梅「花魁又明後日來るが同役が他よ待つて居から今夜丈の歸らんければあらんが悪く思もッてお呉れでない……勘定を源「勘定の宜うは坐い升梅「イヤ宜しくいさい、と勘定をして番頭新造小供までよ充分の手當をやり大小を差す時よコンくと聞えるわかれと申て只今の午前三時廻ッた時分で湯座い升ガラくくと大戸を明ける梅吉の黒縮緬の宗十郎頭巾を冠り黒羽二重の羽織仙臺平の袴で大小を差し紺足袋雪駄穿きで角海老樓をスーッと出る若「お近い内よまた」とヒタリと戸を締ました源七の心配で堪りませんから戸の隙から見て居ります、梅吉の仲の町へ出ますと月の西へ傾きましてナラリくと櫻花の散る中を悠然として仲の町をまゆりますと所々の植込みの中へ捕丁が匿れて居て梅吉を狙ッて居ります之の金谷藤

太郎さま石澤又助さまの用を利ます捕獲の上手な者で十方八方へ手分けが為てあります
 梅其處に居るの捕吏の衆だ子小哥の榛名の梅吉だヨ安中の草三だ尋常にお繩を戴く所
 存だお手向への爲ねへから充分お繩を掛けて下せへ、お手向への爲ませんヨ……此通り短
 刀も呑んぢやア居ねへから繩を掛けてお呉んねへ、と云れるほど捕獲も勝れた者だが何ん
 だか解りません殊も手者と云ふから皆加減して居ると梅「サア縛られ、と云はれたが誰有
 て一人も草三郎の側へ寄り附く者が有りません梅「申儀ぢやアねへ和郎等が繩を掛けねへ
 なら仕方がねへ獨で會所まで往かおけりやならねへ案内してお呉れ先へ立てッてお呉んね
 へ「甲」先きへ立てッて後から斬られちやア堪らねへと、コソコソ咄しを爲ながら跡ビッシ
 ヤリをして四人りばかり圍結てシリく退り又往きます、草三郎の案内をさせ落付き拂ッ
 て町會所へ上りまして梅「榛名の梅吉實の安中草三郎で居坐い升、と是迄人を殺し物を奪
 ひ半破りの兇狀の有る事を残らず旦那の前で白狀及び尋常にお繩を受け筒井和泉守さま
 のお町奉行所へ出まして逐一明白悪事の段々を白狀して入牢に仰付けられました是より
 先は、大戸の喜三郎吾妻の清次も入牢もあつて居ましたから三人合牢も成て翌文以四年十
 二月二十六日小塚原に於て處刑に成りました草三郎の妹お告、女房のおつね、先も
 申上ました通り草三郎供養の爲め六体の石塚を建立致しまして今も磯邊村の平門寺の觀

音堂の左右に残り居ります又草三郎の一子重太郎の奥石重兵衛の家督を相續致しまして後
 は彼の庚辛塚の側へ石の手洗鉢を納めて名前が彫附けては坐います久保田傳之進の家、恒
 川の家の幕府の頃の土屋公の傍家は立派に残り居りました、之で大畧事柄も解りましたか
 らは免を蒙りますへ長物語でサアは退屈さまでございましたらう

太郎さま石澤又助さまの用を利ます捕獲の上手な者で十方八方へ手分けが為てあります
 梅其處に居るの捕獲の衆だ子小哥の榛名の梅吉だヨ安中の草三だ尋常はお繩を戴く所
 存だお手向への為ねへから充分お繩を掛けて下せへ、お手向への為ませんヨ……此通り短
 刀も呑んぢやア居ねへから繩を掛けてお呉んねへ、と云れるほど捕獲は勝れた者だが何ん
 だか解りません味よ手者と云ふから皆加減して居ると梅サア縛られ、と云はれたが誰有
 て一人も草三郎の側へ寄り附く者が有りません梅「郎殿ぢやアねへ和郎等が繩を掛けねへ
 なら仕方かねへ獨で會所まで往かおけりやならねへ案内してお呉れ先へ立てッてお呉んね
 へ甲「先きへ立てッて後から斬られちやア堪らねへと、コソコソ咄しを為ながら跡ビツシ
 ヤリをして四人りばかり圍結てシリく退り又往きます、草三郎の案内をさせ落付き拂ッ
 て町會所へ上りまして梅「榛名の梅吉實ハ安中草三郎で坐い升、と是迄人を殺し物を奪
 ひ牢破りの兇状の有る事を残らず旦那の前で白状及び尋常にお繩を受け筒井和泉守さま
 のお町奉行所へ出まして逐一明白悪事の段々を白状して入牢し仰付けられました是より
 先さ、大戸の喜三郎吾妻の清次も入牢しあッて居ましたから三人合牢し成て翌文以四年十
 二月二十六日は小原原よ於て處刑に成りました草三郎の女房のおつね、先にも
 申上ました通り草三郎供養の爲め六休の石塚を建立致して今も磯邊村の門寺の觀

音堂の左右に残り居ります又草三郎の一子重太郎の奥石重兵衛の家督を相續致しまして後
 は彼の庚辛塚の側へ石の手洗鉢を納めて名前が彫附けては坐います久保田傳之進の家、恒
 川の家の幕府の頃の土屋公の傍家立派に残り居りました、之で大畧事柄も解りましたか
 らは免を蒙りますへエ長物語でサツは退屈さまでございましたらう

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

Handwritten cursive text, possibly a date or a short phrase.

Handwritten cursive text, possibly a name or title.

Handwritten cursive text, possibly a name or title.

Handwritten cursive text, possibly a name or title.

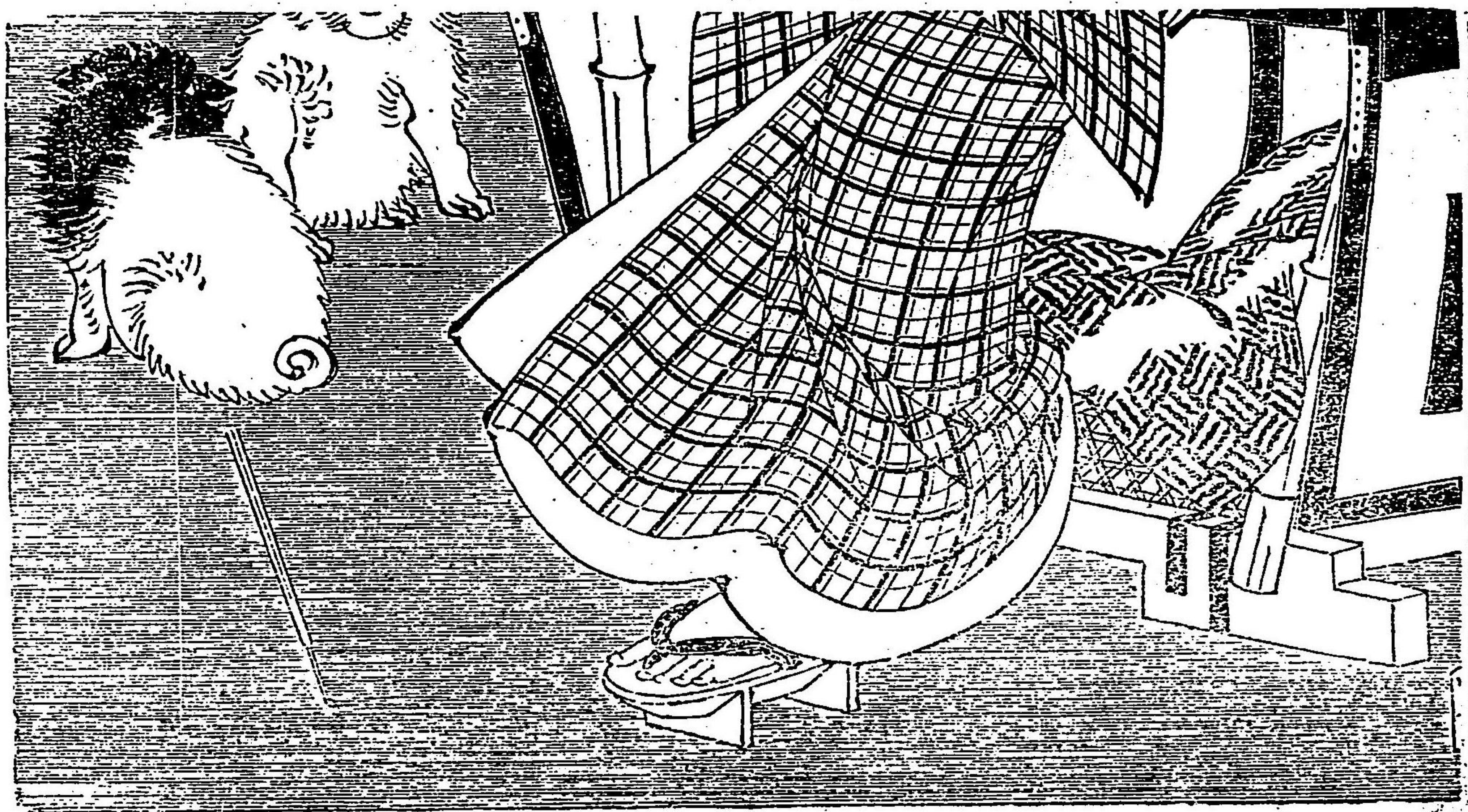
Handwritten cursive text, possibly a name or title.

Handwritten cursive text, possibly a name or title.

文七元結序

舌耕をもて聽衆の耳を喜はし目を樂まし
 むるものは蓋々音律講談落語等あり然れ
 ど音律にまれ講談よまれ落語にまれ聽
 衆を以て其胸裏を感動せしめざれば即ち
 其喜び樂と爲すこと能はず生來音律
 講談落語等を聽きて胸間の鬱憂を晴し
 て之を娛樂と爲すものなり故に時々
 席に遊び義太夫常盤津長唄清元或は講談





落語を聴く然れども多く其音調の能く
腦裡に感動せず却て睡眠を催ふすも又
嫌悪を來たすの類ありて眞に之が感動を
發起しむるハ形を獨三遊亭圓朝翁ハ然ら
ず其口演に係る説話を聴に勸懲の意至れ
り盡せり言語の舉動或ハ笑ひ或ハ泣き或
ハ怒る男女老若其説話に出る者各々之を
異よせり予大に感トて曰く翁の演ずるも
の能く時世に適し能く情態に合ふこと

實に絶妙と云つべし書肆鈴木君翁を知る
こと多年故に翁の説話にして速記に係る
ものを出版せり是を乃ち曩に發市せし粟
田口雷竹笛蝦夷錦等なり世評尤も囂すし
く衆競ひ求めんと爲もの夥多暫時にして第
二版に及ぶ故に又翁に請ふてやまと新聞
に登載せし美談文七元結なるものを求め
て一冊子と爲す此書や衆の知る處なれば
予ハ敢て云はず凡て翁が世に人情話の名

人なるを稱ゆるハ斯の如しよつて予ハ鈴木君が此書を發市するに當つて翁の名譽を祝し序言に換ゆと云爾

明治廿二年五月中旬

夢廼家主 人さむる

文七元結

第一席

三遊亭圓朝口演
酒井昇造速記

さてお短りいもので文七元結の由來と云ふ
ナトお古い處のお話を申上げ升が現今と徳
川家時分どの餘程容子の違ひました事で昔
時の遊び人ど云ふものが御坐いまたたが只
遊んで暮して居り升能く遊んで喰て往れと

十二
もので御坐い升何うして遊んで暮しが附
いたものか。と云ふと天下御禁制の事を致し
ました現今でいお厳しい事で御坐いまして
中々匿れて致す事も出来んほどお厳しいか
と思ひ升と麗く招牌を掛けまして何か火入
れの養が継下ツて花牌が並んで出て居ます
之を買て店頭で公然に致して居りましても
樂々を妨げる譯はないから少しもお咎めの
ない事で匿れて致し金を賭けて大きな事を

なせり金の澤山有るが退屈を仕方がない負
けても勝ても何うでも宜いと退屈凌ぎに彼
事を爲て遊んで暮さうと云ふ身分の御仁よ
の宜う御坐い升が其日暮の者で自分が働
きに出不ければ喰ふ事が出来ないやうな者
が行りますと自然商賣が疎遠になります慾
徳附くゆる倦が来ませんから勝負をいたし
今日で三日續けて商賣に出ない杯と云ふこ
とで何うも障害に成りますから厳しう仰

やる譯で併る博奕を致しまゑたり酒を飲ん
で怠惰者で仕方がないと云ふやうな者は何
うのすると良い職人杯も有るもので仕事を
精出して爲さへすれば大して金が取れて立
派に暮しの出来る仁だが惜い事には怠惰者
たと云ふ腕の宜い仁に御坐い升もので本
所の達摩横町よ左官の長兵衛と云ふ人が御
坐いまゑて二人前の仕事を致し早くツて手
際が好くツて塵際杯もスツキリして落雁肌

にムラのないやうに塗る左官は少な者で
戸前口を此仁が塗れば必ず火の這入るやう
な事はあいと云ふので何んな職人が藏を拵
へまして戸前口丈けの長兵衛さんに頼む
と云ふほど腕の良いが誠に怠惰もので御坐
い升古昔は博奕に負けると裸体で歩行いた
もので現時はお殿いから裸体處か股引も脱
る事が出来ませんけれども其頃は素裸体で
赤合羽杯を着て昨夜はカラ何うも悉皆り剃



れたと自慢まゐよ爲して居ゐるとい馬鹿ばか氣けた事ことで御ご
坐まい升ま今いま長なが兵衛べゑの着き物ものまで取とられて仕舞しまひ
仕方しかたなく十一じゅういちに成なる女おんなの子この半はん天てんを借かりて
着きたが餘よ程ほど短みじかく下した帯おびの結むすび目めが出て居ます
が平ひら氣きか顔かほをして日暮ひぐさに茫ま然ぜんり我わが家やへ歸かッ
て參まゐり長ながオ、今いま歸かへッたヨお兼かね……オイ何なにうし
たんだ真ま闇くらよ爲して置おいて燈あか火りでも點つけねへ
か……オイ何なに處ところへ往いつてゐるんだ燈あか火りを點つけやア
オオイ何なに處ところ……其その處ところよ居ゐるぢやアねへか兼かねア

、此こ處ところに居ゐるヨ長なが真ま闇くらたゐら見みゆねへや鼻はな
ア摘つままれるのも知しれねへ暗くらへ處ところに安坐あんざッて
ねへで燈あか火りでも點つけねへ縁えん喜ぎが惡わるいやお燈あか
明あきでも進すすけろ兼かねお燈あか明あき所ところぢやアないヨ妾めかけの
今いま歸かへッたバツかりたヨ深ふか川がはの一いちの華表くわひょうまで
往いつて來きさんたヨ何なに處ところまで往いつて知しれやア
爲しかぬんたヨ今いま朝あさ宅たくのお久ひさが出たッきり歸かへ
らねへんたヨ長ながエ……お久ひさが何なに處ところへ往いつたん
た兼かね何なに處ところへ往いつたか解わからぬから方はう々々探さがして

歩行いゝが見らねへんたヨ朝御飯を喰べて
出たが夫れツきり居なく成ツて仕舞て眞正
に心配たから方々探しぬが未たよ歸らねへ
のら妾の茫然りして草臥れけへツて此處に
居るんたア子長「ナニ知れねへ……年頃の娘
たエオ一幾許温順しぬたツてからよ悪漢よ
でも私通いてエオ一智恵エ附けられて宜い
氣よ成て其男に誘はれてパイと遠方へ往く
めへもんでも無へ其方へ其爲に留守居を爲

て居るんぢやアねへの氣を注けて呉れかく
ツちやア困るぢやアねへか

第二席

かね「留守居を爲て居るツたツて斯な貧乏世
帯を張てるから使ひに出す度び一緒に附い
ては往れませんがたが浮氣をして情夫を伴
れて逃けるやうな娘ぢやア有りません親に
愛想の盡きて仕舞たよ違ひないんたヨ十人
並の標致を持って、世間での温厚しい親孝行

ものたと云ひれてるのふ和郎が三年越し蕩
 樂ハあり爲て借金たらけにして仕舞ひ家を
 仕舞ふノ夫婦別れをするノと云ふ事を聞け
 ば彼の娘たつて心配してア、一馬鹿くし
 い何時までも親の傍に喰附てれば生涯宇立
 の擧らなひから何處へか奉公でもするか何
 ん飛亭主でも持つ方が襪褌を着て此様な眞
 似を爲て斯様な親に附いて居やうより一層
 の事宜い處へ往て仕舞ふと和郎に愛想が盡

きて出たのふ違ひない彼の娘が居ればこそ
 永い間貧乏世帯を張て苦勞を爲ながら斯う
 遣て居たがお久が居かい位なら妾の直に出
 て往ツちまふヨ 長お久が居あけりやア此方
 も出て往ちまはアなたからヨ一乃公が悪い
 から伴れて來て呉んナ阿父が悪いツて是か
 ら平抱するのらエオイお願へた乃公たつて
 ポカリと好い目が出れば又取返して子供に
 着物の一枚も着せ度と思ツてツイ追目に掛

ツたんだが向後モウ断然り博奕の爲ねへを
 仕事を精出から何處へか往てお久を探索て
 吳んナ かね「探索て來いたツて居ないヨ 長
 ねへ」と云ツたツて何處か居る處へ往て
 探索て來やアナ かね「居る處が知れてる位
 なら斯様に心配は爲やアしないお戯弄でな
 いヨ 妾も和郎のやうな仁の傍に居られな
 いヨ 長「居られねへたツて……エーオイお久を
 何うかして……」 かね「何う探しても居ないんだ

長「る居ねへツて……エオイ かね「和郎の行装の
 何んた子供子供の着物なんぞを着てサ見とも
 ないぢやアないか 長「見ともねへたツて竹
 處のこイ坊の半天を借て來たんだ かね「お尻
 が全で出てるヨ 小供の半天なぞを着て宜
 い氣に成て往來をノソソ 歩行いて、サと
 グツく云ツて居ると表の戸をトンく 叩
 き 男「御免ください かね「ハイ只今開け升……誰
 か來たよ和郎「匿場び……仕様がないなへ 男「何

どうか開けてお呉んかさい御免なさいませ
 ……エー誠は暫く何時も御壯健で長へエー……
 誰たツけ忘れちまつた誰公でしたかエー男
 ー私は角海老の藤助で御坐い升といのれて
 長兵衛は手を拍ち長ーオー違へねへ是ア何う
 もスツカリ忘れちまつたカラ何うも大御無
 沙汰は成ツちまつて体裁が悪いんで此な
 處へ来て仕舞たんで誠に何うもツイ……藤お
 内儀さんが一寸長兵衛さんに御相談申度い

事が有るから直に一緒に来るやうにと云ふ
 事で長和郎さんの處の餘まり御無沙汰に成
 て敷居が鳴居で往れねへから何れ春永に往
 きます暮の内は少々變間に成て、往れねへ
 ら何れ……藤鬼ヤ斯う仰おやるだらうが直
 にお伴れ申て來いとのお内儀さんが仰しやる
 ので「直にたツて大騒ぎなんで家内に少し
 取込とが有るんで年頃の一人娘の亞魔ツ女
 が今朝出たツさきり歸らねへので内の女房も

心配してエるんで子 藤「御宅の姉さんのお久
 さんお私宅へ来てお在りさいませヨ其事に
 就て御内儀さんが尊公に御相談が有るので
 長「エー……お久が和郎處み往てるとエ かね「ア
 ママア眞正よ有難う存トます何處へ参りま
 したかど存おて心配して居ましたが御親切
 よ有難う存トます……和郎さん直に往て伴れ
 て来てお呉れヨ 長「ぢやアマアかんだ……直に
 跡から往ますからお内儀さんへ宜しく 藤「直

に御同道志ろと申ましたから 長「直にたッて
 ……何んですから直に跡から参ります……左
 様なら宜しく かね「何んだヨ和郎御親切に知
 らせて下さつたのに何故直に往かないんだ
 ヲ 長「何故たつて此行装ぢやア往かれねへ……
 其方のを貸しねへ かね「思だヨ妾の着物が有
 りやア爲ないヨ 長「其方の宅に居るんだから
 此半天を着て居やアナ かね「然んなものを着
 ては居られませんお尻が全で出て仕舞ふヨ

長湯巻を纏てりやア知まないヨ かね一人が來ても挨拶が出来ないヨ 長面と向ツて話をとて跡へ退る時よ立てなければ跡ピツシヤリをすれば宜い かね「お愚弄でかいヨ 長「然んな事を云いぬへで貸しかと無理矢利に女房の着物を引剥いで之を着て出掛けました

第三席

左官の長兵衛の吉原土手から大門を這入りまして京町一丁目の角海老樓の前まで來た

が馴染の家でも少し極りが悪く敷居が高いから恐へながら這入ツて参り究窟さうに固まつて隅の方へ坐りてお辭儀をして 長「お内儀さん誠に大御無沙汰をして極りが悪くツて何んだか何うも子……先刻藤助どんにも然う申やしたんですけどすが餘まり御無沙汰に成ツたんでお見連れ申す位で御坐へやすが何時も御繁昌の事は影ながら聞いて居りやを誠に何んとも何うもお忙がしい中を態くお知

らせ下すツて誠に有難う御坐へやす……お久
ア此處に安坐ツて、宅の者よ心配を掛けて
眞正よ困るぢアやねへか阿母アハ和女を探
しに一の華表まで往たせ親の心配ハ一通り
ぢやアねへ年頃の娘がピヨユ　　出歩行ち
やアいけねへせ何んで御當家様へ来てエる
んだ斯う云ふ御商賣柄の中へ内儀「夫れ處ぢ
やアないヨ斯うして和郎の事を心配して來
たのだ這入り難がツて門口をウロ　　爲て

るたがセツバ詰りに成ツて這入ツて來たん
だが妾も忘まぢまつとア子和郎が仕事に來
る時分蝶々騒よ結てお辨當を持ツて來たツ
さり久しく面會ないから妾も忘れて仕舞た
が此處へ來て此の娘がオイ　　泣いて口が
利けあいんだヨ夫からマア何うしたんだ何
か心配事でも出來たのかと云ふと此娘が親
の耻を申まして濟ませんけれとも阿父が
未だ蕩樂が止まませんで宅へも歸らず賭博

三十四
ばかり烈しく致して居り升が翌が日阿父の
腰へ繩でも附きますやうな事が有りますと
妾も見てハ居られませんが漸々借財が出来
まして何うしても此暮が行立たず夫婦別れ
を爲やうか世帯を仕舞ふかと云ふのを傍で
聞いて居り升と妾も小兒ぢやア有りません
から聞き捨おも取りませんので誠に申兼ね
ましたがお役には立ちますまいけれど妾の
身体を御當家さまへ何年でも御奉公致しま

すゝら阿父をお呼びなすつて妾の身の代を
遣つて借財方が付いて兩親交情睦く暮しの
附きまにやうに爲て遣り度う御坐い升妾が
斯う云ふ處へ勤めを爲て居ますればヨモヤ
阿父も妾への義理で蕩樂も止まうかと存
ます左様なれば阿父への異見にもなります
から何うぞ妾の身体をお買ひなすつて下さ
いと手を突いて妾へ頼むから妾も吃驚り爲
たんだヨ真正に感心な事たつて當家にも斯



う遣ッて澤山抱への娘も有るが年頃も成ッ
 て賣られて來るものは大概不義か何か悪い
 事を爲て來るものが多いんたのに親の爲め
 に自分から驅込んで來て身を賣るといふや
 うな者が又と有る譯のものぢやアないヨ眞
 正よ斯な親孝行者に苦勞をさせて宜い氣に
 成ッてちやア濟まなれヨ和郎幾歳におなり
 た四十の坂を越して何う爲たんた子マア此
 娘に不孝たヨ長「エー……誠ふ何うも面目次第

も御坐へやせん然んな事と知らねへもんで
 すうら子年頃にも成てやすからヒヨツと又
 悪い男が附いて意地でも附けて遠方へ往ッ
 ちまッたかと思ッて喉アも驚きやして方々
 探して歩行いた譯なんぞへエ……お久堪忍し
 て呉れ誠に面目次第もねへ汝にまで乃公は
 苦勞をさせてと云ひさして涙を浮め聲を曇
 らし「長實ハ乃公アお内儀さんの前だが汝に
 手を突いて謝罪るくれへ親の方が悪いんた